

『五十からの明日』

サブタイトル 『面白可笑しくがんばれエキストラ体験記』

せもり友

ゴルフの録画中継をテレビで観戦、青空の下、白球がグングン伸び弧を描いて飛んで行く、ギャラリーの歓声が上がる。全視線が落下地点のボールを追う、フェアウェイにボールが跳ねて転がる。完ぺきなティショット、フェアウェイのど真ん中、ギャラリーからは大きな拍手。選手を羨望の眼差しで見る。「さすがにプロの弾道は違うな」木々にセパレートされた緑のフェアウェイ、その先のグリーン上にピンフラッグが立っている。

セカンド地点、ギャラリーの足音も声も消え、一瞬の静寂、張り詰めた緊張感の中、アドレスに入る。トップからダウンスイング、ヘッドがボールを飛ばす。芝生が飛び散る、ボールがブッシュシュルシュルと空を切る音とともにピンに向かって飛んでいく。

司会者「ナイスオンピンそば三メートル バーディチャンスですね」

解説者「このパットは明日につなげる大切な一打ですよ」

(パットをするシーンが写し出される。)

司会者：「いつもより時間を掛けていますね」

解説者：「軽いフックラインだと思えますが」

司会者：「今日はパットの調子がいいから入れてくるでしょう」

(パターヘッドがスツと動きボールが打ち出された。ボールはゆっくりと

ライン上を転がりカップに吸い込まれカランと音を立てた。)

司会者：「入った入りましたナイスバーデー」

解説者：「丸山君は強くなりましたね、ここという時に入れて来ますね」

(そして土曜日の決勝ラウンド一日目が終了。インタビュが始まった。)

レポーター：「丸山選手がきてくれました。お疲れさま」

丸山：「有り難うございます」

レポーター：「最終ホールのバーデーお見事でしたね」

丸山：「ハイ、右カップにいっぱい狙って打ったら入っちゃいました」

レポーター：「今年は絶好調ですね」

丸山：「ハア」(満面の笑みで丸山スマイル。)

レポーター「今日のラウンドを振り返ってみて、どうでしたか」

丸山「十六番ショットでミスして右手前バンカーに入れちゃったのですよ」

レポーター「あのショット、あれはどうしたのですか」

丸山「十六番ショットでミスショットをして右手前バンカーに入れちゃったのですよ」

レポーター「あのショット、あれはどうしたのですか」

丸山「あのグリーンは手前から早くて止まらないんすよ、飛びすぎて奥に

行ったら嫌だなあと思ってたらちよっとコスっちゃいました」

レポーター「あのバンカーから寄せるのは難しい状況だったと思うのですが」

解説者「ピンまでが下りで近い状況であのバンカーショットは満点じゃないですか？」

丸山「ハイうまくいきました、あれが精一杯です」

解説者「残りニメートルのフックラインのパーパットが入ったのは大きかったですねえ」

丸山「(先に喋ってしまう解説者に一寸むっとしながらも…)」

丸山「そうっすね、あのパーセーブが十八番のバーデイにつながったのだと思います」

レポーター「明日は どうしますか最終日、最終組」

丸山「優勝したいっすよ」

レポーター「このままだとトップのジャンボ尾崎さんと二打差で明日の決勝を

迎える訳ですが、一緒に廻るプレッシャーは」

丸山：「ジャンボさんに食らい付いていきますよ、鬼っすからね、

鬼が寝ている間に優勝をかつさりますよへえへっへ」

レポーター：「明日は尾崎選手と、優勝を争っていい試合を見せてください」

丸山：「ハイがんばります」

レポーター：「明日の試合、期待しております、お疲れのところ有り難うございました」

丸山：（軽く会釈をして手を挙げて去る。）

（丸山のインタビューステージが終了。）

ジャンボ尾崎が上がって来て、インタビューステージが始まる。

レポーター：「お疲れさまです、今日だけでファイブアンダーですが、満足してまいすか」

尾崎：「まあまあだね」

レポーター：（頷いて目を見る）

尾崎：「ショットは問題無いんだよね、パットがイマイチなんだよ」

レポーター：「二、三メートルのバーディーチャンスは何回か惜しかったですね」

尾崎：「そう、五、六回はハズしているね、六十二が出てもおかしくない内容だったね」

レポーター：「明日はパット次第と言うことですか」

尾崎：「明日、（自慢げに）パットの不調はシヨットでカバーできるから

心配してないんだけど、ピンそばに全てつくわけだからさ、ん、ん」

レポーター：「丸山選手とは二打差ですが」

尾崎：「丸には頑張って最後まで試合を盛り上げてもらいたいね、シナリオでは

勿論優勝は僕で二位は丸か誰かがなるんだろうけどね、ハハハ」

レポーター：「尾崎選手をおびやかす若手選手は今のところ居ませんか」

尾崎：「僕を踏み台にしてどんどん強く成って欲しいんだけど、まだまだだね、

他の追ついを許さないんだから僕が強すぎて、ハッハッハッハ」

レポーター：「明日は尾崎選手の優勝で決まりと言っていていいですね」

尾崎：「勿論、僕しか居ないでしょう、勝利の美学をお見せしますよ」

レポーター：「有り難うございました。ジャンボ尾崎選手でした。」

（ギャラリーの拍手の中、立ち去る尾崎選手。）

次にシーン変わって、辰吉丈一郎のインタビュー

レポーター：「計量を無事パスして今の心境は」

辰吉：「今回の減量はうまく行ったし、キャンプ中のトレーニングもバッチシやったしね、

早く試合をやりたがって体がむずむずして、あすのゴングが待ちどおしいですわ」

レポーター：「ファンが待ち望んだ明日のタイトル戦どう戦いますか」

辰吉：「どう戦うか言われても、叩きつけて倒すだけですわ」

レポーター：「明日はKOシーンが観れますね」

辰吉：「2ラウンドでKOやね」

色々なジャンルのスポーツ選手にインタビューし明日の事を聞いている

オリンピックの柔道に明日出場するやわらちゃんに古賀選手、

マラソンに出場する有森選手に聞いたり。

千秋楽を勝てば優勝、負ければ曙との決勝戦に成るかもしれない貴乃花になどなど。

新聞で読んだり、テレビで見たりよくあることです。

一般人は公のメディアで明日のことを聞かれることなどありません、希にあるのは事件や災害が起きたときのインタビューだ、

「明日から不安です、怖いです、どうしたら…」などと言っている。

明日の事の望みや楽しみを持って聞かれることはまず日常的に皆無である。

「シーン変わってある家庭内」

子供と母親。子供がファミコンゲームに熱中している、母親が来て明日起きれるの、明日学校よ、もう、早く寝なさい。

「シーン変わって」

深夜近くの飲食街、仕事帰りの人々が飲んで歌って今日有った事、いや、明日の事を思いたくないのか、忘れたいのか飲み屋で時を過ごしている。

お店のママさん、「山ちゃん、明日東京出張で朝早く新幹線で行くんでしよう」

「もう明日になっちゃうわよ、山ちゃんたら、早く帰りなさいよ」(と言ったような)人生は人様々、それぞれ色んな明日がある…やって来る…。

今日嬉しい事があった、嫌な事があった、無事過ぎた、明日が楽しみだ、明日が不安だ、明日は無事過ぎせるか♪明日がある明日がある明日があるさ〜♪と、

今は亡き坂本九さんが歌っていた。明日が来るから生き続けていられるのか、生きていくから明日が来るのか？たぶん生きて居るから明日を向かえられるんだらう…？明日は無くせない。人は皆、明日があるから救われと思っているのだらうか…？

今日を生き、今を一生懸命に生き、日々の仕事、雑事に追われ繰り返し継続している。それが当たり前で未来に続いていく、妥協とまんねりが人生の試練なのであるか…？五十歳に成って今日云々よりも明日どうしようか、その事が頭に重くのしかかってくる。このまま老いていくジレンマ？、死ぬ事の意味、不安と悟りとが交錯する。

“嫌だ嫌だ”将来に夢を抱いて、目標を、目的を持って明日が楽しみ明日が待ちどろしい、そんな明日を永続的に向かえられたら何と素晴らしい人生だらうか…！

そんなステキな楽しい明日が待っている人生は人間の永遠のテーマかも知れない。

♪明日という字は、明るい日と書くのね〜ラララ・・・♪

五十過ぎのおっさんに希望や期待、感激・感動の明日を迎えることが出来るのか…？。そんなワクワクするような明日を体験してみたい…。

三年間に渡る本人の実体験を綴ったノンフィクション劇場の始まりです。

『ゴルフのコーチ・個人レッスン』

主人公はゴルフの個人レッスンをしている、ゴルフレッスンを始めたキツカケはその当時、経営していた会員制のスナックでコマフィットネスクラブの部長と

知り合いになり、ゴルフの指導をすすめられたのが切っ掛けだった。

スポーツクラブは阪神大震災で被害を受け無くなり、しばらくインドアゴルフに移った後、現在の練習場の支配人をお願いし個人レッスンの許可を頂いて教える場所が確保出来た。

過去の携わった仕事は十種以上に及ぶが、このゴルフを教えるという仕事が一番性分に合っていて天職だと思っている。

話が飛ぶが、関西の青山台カントリークラブに同姓の寺田 寿プロがいる、北海道の

利尻島の出身で相撲部屋に居た経歴の持ち主で温厚でおとなしい人あたりの良い人である。その彼が知り合いのプロのすすめで、宝塚チボリの打ちっ放しでシーズンオフ（冬期）

の間レッスンを受け持つ事になった。

しばらく通っていたが、教える事が苦手ですぐに辞退して止めてしまった。

そのプロと青山台カントリークラブでラウンドをした時のことである、

同伴の私の生徒が数ヶ月前に廻った時に比べ数段進歩をしているのを見て

「寺田さんどうしたらこんなに上手くなるのか教えて下さいよ」と冗談めかしに言った。

その顔には、「私は教えるのが苦手だ」と、書いてあるように見えた・・・。

ゴルフが上手いことと教えるのが得意なことは別のようである。

予断だが、インストラクターやアシスタントプロで一つ残念なことは

ずっとゴルフ一本でやってきた奴らは中途半端な名ばかりのプロの卵でゴルフ馬鹿が多く、

世間のモラルとか社会性に欠け、つぶしが効かない、ゴルフがチョット上手いからと

いってちやほやされ傲慢になり自分はオールマイティだと勘違いをしている。

御同業に公認インストラクターと称するそんなやからがいる、社会通念は常識外れで

感情は子供以下で頭脳はニワトリの頭だ同じ穴のむじなに思われても困る迷惑な話だ全く。

ゴルファーも社会人として人間として当たり前の見識と道徳を身に付けて欲しいです。

『レッスンを受けてくれる生徒は自分で集めなくてはならない。』

今の練習場に移った時の生徒は一週間にたったの六人だけだった。

一日に二人レッスンしたら終わり、明日は誰も来ない一日中、練習場のロビーで待機し手持ちぶたさな毎日だった。果たして誰も声をかけてはくれない、

いつまでもてぐすねひいて待っているわけに行かない、何とか生徒を集めなきゃ、手作りのチラシをあっちこっち配ったり貼ったりした結果、やっと一人来てくれた。

それからリビング阪神に十五万円の募集広告を続けて載せたりして徐々に増えていった。携帯電話が03で始まる高価な時代でしたが、それがとても役に立った。

何処に居ても問い合わせに対応でき、携帯の着信音が鳴る度に嬉しかった。

二年目には三十人を越え三年目のピーク時には月謝を納める生徒の数が、五十人を越え、さすがに神経は疲れたが、身体は心地好い疲れで毎日が充実し明日来る生徒のレッスンメニューやアドバイスの方法を考えることが楽しみの一つだった。

口コミで評判が広がりますと、よその練習場の生徒が芋ずる式に入会する、しかし良い事は長くは続かない、目立ちたがりやで、でしゃばりで口うるさい吹聴型の

11 オバハン（関西のご婦人）が人付き合いの和を乱し足を引っ張る。

一人止めると次々と来なくなり、減るときも辛ずる式に辞めていく。
女性達の感情、気持や、心変わりは今持つて解らない、
言葉と心配りには気を付けていたつもりなだけど？、
誰か女性の扱い方を教えて下さうい。

色々あったが現在は毎月コンスタントに三十人位の生徒を教えている
レッスンは一日中忙しいわけではないので体が暇を持て余す、
午後の空いた時間は六時ごろまで囲碁センターに行つて好きな碁を打つ、
どうかそこでは三段で打たせてもらえるまでに成つたが、自己満足にすぎない
碁は面白くて打っている間は夢中なのだが、そんな時間が勿体無い気がしている。
老け込むような気がして、楽しんでばかりいられなくなつていた。

そんな時期に…。

平成九年四月のある日の朝、何気無く朝刊に目をやると、ある広告が目についた、顔写真がずらりといっぱい並んで大きく紙面を使った広告である。

何気に目をやると！

『あんちよくな男が一念発起！日常とは違う世界へ』

『N・A・Cタレントセンター、ゴールドシニア募集、』

今まで歌手、俳優、アナウンサー、その他タレント募集、明日のスターをめざす貴方とか、スターを夢見る貴方、タレントに成りたい貴方などの、

歌い文句で募集をしている専門学校とか養成所の広告は今までも目たり聞いたたりした事はあるが、何にも関心も無く考えたことも無いし思いも寄らなかつた。

暇で仕様がな、何かをしたい、そう思ってた矢先に、偶然目に飛び込んできた。熟年スクール（四十歳〜六十五歳の男女）と書いてある白抜き文字に引かれた。

募集内容、応募条件、合格者特典、オーディション申込書、一通り読んで

私もいけるかも応募してみようかなあ、どんなもんか違った世界を経験してみたい、興味がふつふつと湧いてくる、度素人の私が恐れ多いことだ。あんちよくな男が深く考えた訳じゃない久し振りにわくわくする気分になられ、次の日申込書を投函した。

『オーディション会場へ』

幾日かして、オーディションを受けられる通知が来た。

書面の内容は会場まで電車で行くアクセス、受付時間、受けるための費用が書いてある。いよいよその日が来た。オーディション当日慣れない電車に乗ってJR京橋駅へ、西出口から続く高架歩道橋を歩きビジネスパークへ向かった。

途中に大阪城歩行者専用道周辺案内図があった。ツイン二十一MIDタワーの場所を見つけ迷う事なくすんなり目的地に着く、途中でオーディション会場に向かう

それらしい何人かに合う、案の定その人達も同じエレベーターに乗り込み二十階のボタンを押した。その間が長く感じた。気恥しい思いと気まづい気持ち、

14目と目が合ったが当然知らんぷり、お前らもひよっとしてオーディション受けに

来たのかよ「嘘」「ウツソー」心の中でそうつぶやく（沈黙）

貴方もそうなの「信じられない」 見ず知らずの人達に変な気を回すから目が
そう言っているように感じた。廊下に出てすぐ貸会議室のNACオーデイション
会場と書いた受付場所に着いた。

「五十からの明日」主人公はどんな明日を経験して行くのだろうか・・・!?

何がきっかけでエキストラの仕事をするような事に成ったのだろうか・・・!?

撮影現場は楽しい面白い。待たされて辛い、やりたくない事もやらなきゃいけない。

製作の陰で支えているエキストラの仕事はそんなに簡単じゃない!。

OKが出てもしこうすれば良かったああすれば良かったかなといつも後悔する。

どの現場へ行ってもカメラマンが一番格好良いんだよなあ。どの役者もスターの
オーラがある。中井貴一や渡辺謙、西城秀樹、中条きよしなど魅力的だ!やばい。

『オーディション会場にて』（これがオーディションか…？）

通路からのぞくと真ん中の部屋が受付で左右に広い部屋がある。

すでに受付は人でごった返している、若い青年部の男女が青いハッピを着て忙しく動き廻っていた。会場の雰囲気は何となく私は怖気付き帰りたいたい衝動に駆られた。

本気で困ったなあと腰が引けてしまう、状況判断のためしばらく様子を見る事にした。左の部屋では、お子様連れの父兄など百人以上がずらっと並んでいる。

座る椅子が足らず後ろの方で立って見ている人も大勢いる。

その最前列の前で数人の男女がジャズ体操かエアロビクスでやっているように、手足と体を動かしている、リズム音楽の音をがんがんと響かせ、ワンツースリーフォー

「右ハイ、左ハイ、リズムに乗って、もっと元気に」先生の指導の声が飛ぶ、

「嫌だなあ、あんなことするの？？どう仕様カッコ悪う」（エライ所に来てしまった）それは、すぐに解ったんだが、熟年組の私には、関係無くジュニアの部だけだった。

どうしたものか、場違いな処に来てしまったな、その場にいる人とは目を避けるようにして、とりあえず自分の居場所を確保して、落ち着かなきゃと思った。

受付を挟んで反対の右側の部屋を覗いて見ると、広い部屋の中は緊張感が漂っていた。

窓側を背にしてずらっと並んで審査をする先生方が机を前にして座っている。

その前に折りたたみ椅子が一脚用意されている。その椅子に腰かけている人が、先生の問いかけに、何やら真剣に答えている、面接をしているように見えた。

うなずいたりしている、他の席では大声で何か言っている、立ってパーマンスをしている人、踊る人、歌っている人、自分の得意とするものを披露しているようだ。子供から大人まで、皆一応に緊張しているのか顔が突っ張っている。

私が想像していたオーディションとは、まったく雰囲気も内容も違う光景だ。

順番待ちで椅子に座って待っている人、立ち見で待っている人、大勢いるなあ、

先生方は、映画監督、映画全盛期の男優に女優、他に音楽関係者かな？

業界の関係者十人位が審査員だ、私は一旦その部屋を出ることにした。

受付の突き当たりの大きな窓際に立った。外界に目をやりふと下を見ると、20階からの素晴らしい景観が広がっていた。

高層ビルが乱立する、都会の中に緑の木々の大庭園、眼下に大阪城公園だ。

五月晴れの陽光をこもり繁った若葉枝葉が一杯に浴び、春風に揺れる姿はまるで木々の身体が喜んでいようだ。銅葺き屋根が青く錆び、金色に輝く装飾の壁や柱、見事な大阪城が緑包の中で建っている。堀の水面も陽光が反射しキラキラ輝いていた。

高くて離れた上から眺める景観の素晴らしさにオーデイションの事もすっかり忘れ
暫し感嘆していた。三橋美智也の古城の一節が浮かぶ、♪昔を語る天守閣♪

当時その天守閣から眼下を見渡していた豊臣秀吉が、よもやこの城が

上から見下ろされる時が来るとは夢にも思わなかっただろう、

当時の優秀、有能な学者だって到底想像もつかなかったことだったであろう。

世の中がこうも変わろうとはなあ、なんて突拍子も無い変な思考をめぐらしつつ

日本が高度成長をしてきた凄まじいまでの進歩と発展を続けているこの時代と

この世に今、生きている自分に自問自答的し、大袈裟にも自分を見つめ直していた。

ふと我に帰り自分のチツポケナさに何をうだうだしているんだ、

今更優柔不断もいとこじやないか、案ずるよりは産むがやすし、

「山よりでっかい獅子はでん」何事も経験だ、一丁トライしてみるか!、

平常心に戻り俄然勇氣が沸いてきた。「よっしや」と気合を入れた。

受付に行き審査資料と整理番号、百五番の名札を頂いて費用を払い受付を済ませた。

「受付がお済みになった方は左側の部屋で番号を呼ばれるまでお待ちください」

「遅い方の番号になったなあ」と思いつつ待つ間に審査テストの内容を読むことにした。イントネーション、アクセント、例題、「雨降りに飴を買いに行った」

「箸を持って橋を渡った」など。それから簡単な台詞、「動くな撃つぞ」その他にもいくつがあつて、そしてラーメンの新製品の朗読、カマナイよう何度も読みかえした。三十分程経った頃、百一番から順に私も呼ばれた、

『オーディション部屋へ！』

「番号を呼ばれた方は右の部屋に入ってください」（一見会場は流れ作業のようだ）室内ではオーディションの真最中だ。椅子に座り先生とのやりとりを見ていた。

大きな声を出して台詞を読む人、歌っている人、得意の踊りを披露する者、

先生から質問や説明を受けている者、会場は緊張感の中にも騒然とした雰囲気である。十人ぐらいの先生の前で入れ替わり立ち替りほとんどひっきりなしに、まるで流れ作業の面接形式でテストを受けている。．．．やがて私の番号と名前が呼ばれた。

「あの〇〇先生のところへ言うてください」

『オーディション本番!』

いよいよ自分の番が来たが、気持ちには開き直り平常モードになっていた。名前をつけ深々と一礼して先生の促す手の動きを見て椅子に腰かけた。

(相手は女性である)いきなり「ここを読んでみてください」ハイ「二時に虹を見た」
「はい次も読んで」「ハイ」「柿と牡蠣を食べた」先生が指摘する。

「……………」「ここが違いますね」アクセントの違いを言われた、

「能登出身なのですよ、やっぱり変ですか？」先生が正しい言い方で

「ここをこのように直してもう一度読んでください」と言って

「ハイ」「かきとカキをたべた」私は理解した通りに読んだ、

「はい、結構ですよすぐに違いが解ったのですから大丈夫直せますよ」

「それではこの台詞を言ってください」(とっさの判断で大声を出して演技をするほうは止めようと思った、大きな声を出す恥ずかしさもあつたからだ
それで渋く決めてやろうと思った)とここまでは良かったんだが……?

「スチエーションは」「ご自分で決めていいですよ」「ハイ」「動くな撃つぞ」
自分ではどすの効いた怖そうな低い声で決めたつもりだった……。

「刑事が犯人の背後から拳銃を突きつけて：（しめた解ってくれた）言っているスチエーションだったらもう少し迫力が出て欲しい、もう一度」（ガックシ）拳銃をもった手つきで身を寄せた仕種で、「動くな撃つぞ」：

「ん、感じはすごく出てますが・・・撃つぞが違います、うツぞです」

「つ」と「ぞ」の音の高さが違っていたのだ、正しい発音が成っていなかった。（ダメだし）もう一度台詞を言っつてその先生の審査は終わった。

歌を唄ってみてくださいと言われたら内心どうしようかと思いつながら、

その時は「大阪の女」を唄おうと決めていたが、ほっとした気持ちと

ガツカリが入り交じっていた。カラオケで歌うフランク永井の「大阪の女」は十八番だったのに・・・一応一人目が終了し次を待つために席に戻った。

中央には机の上に箱が置いてあり若いスタッフが整理に当たっている、

その箱の中に審査書類を入れて席に着いた。全部の先生に面接するのか？

何人受ければ終わるのかは知らされていなかった。じっと待つしかない、

一通り端から端まで先生方一人一人をジックリ観察した。

人間には相性があるこの先生に当たって欲しいな、あの先生は嫌だなあなど思っていた。

すると！「あああの人知っている」

見たことのある俳優さんだ。こんなこともやっているのか！

昔映画によく出ていたな、懐かしい顔だずっと現役で居ることは大変なのだろうな、

役者や俳優は一杯居るのだし、次から次と竹の子ようにでてくるのだから、

そんなことを思いながら、悪い癖で審査中の先生の目一点を見据えていた。

視線を感じ取ったのか何を睨んでいるのだと言った目でじっとこちらを見返してきた。

一瞬だが睨み合うような格好になった、「ヤバイ」即座に目をそらし素に戻った。

『オーディションの様子』

「百五番〇〇××さん」「はい」「あちらの先生のところに行ってください」

先ほど凝視してしまった顔を知っている俳優さんだ、

机の上に置いてあるネームプレートに高峰〇〇と書いてある、

名前を名乗り深々と一礼して椅子に腰かけた。

私がすわるや否や開口一番「同じ年ですね、私も二十一年生まれなのですよ」

この一言で親近感が沸きすぐに打ち解けた会話になってしまった。

「ゴルフのインストラクターですか、私もゴルフをするんですけど難しいですね」「はあ」ゴルフの事なら得意と！一瞬思ったが、ゴルフの話は控えた。

相手も心得ている「機会があったら教えてくださいよ」と社交辞令で返してきた。（機会などいつ作ってくれるの？）と内心呟いた。そして相手はこう切り出した

「この業界で飯食っていくのは大変だよ、売れている間はいいけど、仕事が出来なかつたら暇持て余すし、見た目は派手で華やいだ世界に見えるけど、やっていることは地味だし儲からないよ、「そうですね、そうですね」

「この業界だけでやって行ける人はほんの一握りで後はほとんど本業か副業を
持つてやっているのです、厳しいですよ」「うーん大変ですね」

私に止めといた方がいいよと言っているのか、それでもやる気があるかどうかを試そうとしているのか、たんなる愚痴話を聞かされているのか、聞きながらそう思った。さらに先生は「どっちが本業かアルバイトなのか分かりませんよ、皆好きでやっているのでしょうね、有名に成りたい憧れや夢を抱いて入って来るのですけどね…」（やっぱり私では無理かと思いつつこう切り出した）「引き出してくれる人、

コネとか人脈、そういった人との縁、そして本人の努力と、

運も強くなかったら駄目でしょうし・・・」「勿論そういうことも言えるでしょう」

「先生はベテランの芸能人ですから、インスピレーションでこいつはいけるとか使えりとか、何かオーラを感じなかつたら駄目でしょう」「…?」

「仮に先生と共演するとか、刑事役と一緒にするとか、相手役としてどうですか?」別にキャストイングをしてもらうつもりなど無かつた、どんな返事が返ってくるか話の流れでそのような問いかけをしてみましたことば（バクカ）自己嫌悪に落ちた。半分やけになってどうでもいいや駄目ならハッキリ落としてくれ、内心では止めといった方がいいよと判断をゆだねたい気持ちだったのだ。

正直にそう願ひこんな場所に居る事を反省もしていた、それにしても思ひ上がった言い方をしてしまったものだ。

先生は冷静に笑顔で返してきた。「役者になるにはそれなりの勉強をして努力をしないとそれからです。ゴルフと一緒にですよ難しいですよ」（上手く言ってくれた）

「えーとちよつとそこ読んでみて下さい」「ハイ」「……」

短い詩を朗読し高峰先生が「ウン」うなずいて審査は終わった。

立ち上がった最後に掛けてきた言葉、ニンマリ含み笑いで「儲からないよ」微笑返しをしたが、「儲からないよ」が、やけに耳に残った。

中央に戻り係の人に審査書類を渡すと、「ここは終わりですから隣の部屋で番号を呼ばれるまでお待ち下さい」なんだもう終わったのか安堵感と拍子抜けが一変に全身に來た。通路に出て灰皿を見つけてたばこを一本ゆっくり吸った。

左側の部屋に戻り椅子に腰かけ、真つ正面で子供相手に七十過ぎの老いた先生が、「返事は大きく元気な声で」、「はい」「もっと声を出して」「ハイ」なにやら話をしているのを漠然と見聞きしていた。

「〇〇××君」驚いたことに同姓同名の子供だった。丸い顔黒い瞳を輝かせ大股で元気よく歩いてきた。

思わず××君がなければよと呟いた。子供は保護者同伴で來ている、離れた場所でその子の母親だろう目が真剣だ顔もこわ張ったまま先生を見ている、「やれやれ大変だ」親も子も一緒にオーデイションを受けに來ている人達も居るようだ。

「百五番〇〇××さん」「百六番何々さん」「百七番…」八人ほどまとめて呼ばれた。八人揃ったところで会釈して男の前に座った。

その人はエヌエーシーの渡辺社長だった。私がお茶を飲みたいのですがと言った時に女性スタッフに指示をしていた人だった。(あの人が…社長だったのか！)

エヌエーシーの現状況説明と現在活躍している人の話をした後

「一人ずつ今日の感想を右の方から順に言ってみてください」

初めての事なので緊張しました、先生に色々言われていい経験をさせて貰いました」

「舞い上がって何が何だか分かりませんでした芸能人の方と話ができて嬉しかったです」

世間で言うおばさん五人とおじさん三人である、社長は一人一人に笑顔で頷き聞いているやがて自分の番が来た。みんなありきたりな感想やな、大したことは言っていない

考えたすえに受け狙いにした「今日、自信とはうらはらに恥をかいてしまいました」
案の定社長は体を揺すり今まで以上に笑った。「一週間後に合格証書が届きます。」

合格された方はタレントスクールで又お会いしましょうお疲れさまでした」

オーディションは終わり、気持ちがスッキリして何事も経験だこれで良いと思った。

『オーディションが終わって』

廊下を出て突き当たりエレベーターを待つ間、審査の先生の仕事が済んでやって来た

(三木の朝ドラにもよく出ている) 紅萬子さんにばったり出会った。

向こうは知らないがこっちは知っている、反射的に「あっお疲れ様でした」

「お疲れ様です」笑顔で答えてくれた。テレビや映画でオバハンを演じている

彼女とはずいぶん違ってみえた。幾分若く見え、洗練された魅力と色っぽさを感じた。

相手が芸能人であるオーラを感じたのと、ミーハー的感情の現れだろうか？

エレベーターの中で少し会話ができた。こんな話をした

「芸能界では本人の実力もさることながら、見出ししてくれる人、引き抜いてくれる人、
そういった人との出会いとかコネが無いと無理でしょうね」(同じことを聞いた)

「そうね、でもそこまで行くのは本人の頑張り次第よ、色んなことを勉強しないと

駄目、運よく売れても落ちたときつぶしが効きません、アホではできへんよ」

出ました「アホではできまへん」(大阪のノリや)

目を細めにこやかな顔で言っはいるが、何となく厳しさは伝わってきた。

「お急ぎのようですけど今から……」「これから舞台稽古に行くのです。

すかさず、今度のこれ面白いわよ見に来てね」パンフレットをバックから出した。

さりげなく営業もしてしまう彼女の仕事に対する（舞台に賭ける）意気込みに

圧倒され感心する間もなく「は、はい是非行かせて貰います」と返事をしてしまった。別れ際「舞台がんばって下さい」「有り難う失礼します」

互いに軽く手を上げてその場を去った。森の宮駅までの帰り道終わった安堵感からか、足も軽く何年ぶりにヘンに心がウキウキしていた。

高校の入試試験が済んだあの時の心境と同じ位だったかも知れない。

今日までの人生で座右の銘というか、ためになる教訓をいくつか肝に感じ習得してきた。

「山よりでつかいししは出ん」これなどはラジオで中村鋭一さんがよく使っていた。

この年になって好きな教訓は「我が日々は良くなりつつある」「創造は具現化する」

「深く悩むには人生は短い」「愛は何を持ってしても変えがたい」などがある。

まだたくさん悟らされたり教えられたことは数々あるが、いずれにせよ人間の宿命、

煩惱を日々乗り越えていくことが人生なんだろうと思う。で、あるならば夢を明日を

楽しく期待が持てるように、どうあるべきかのまえに何をすべきか、モチベーションが

下がらないようにアグレッシブにポジティブに「頭」「気持ち」「心」「行動」の

持ちようを努めて日々勉強していかなければその人間の裁量が発揮されないと思う…。

だから数多くの楽しみのある明日をめざす一環としてNACに飛び込んだのである。

オーデイション会場を出て電車に乗り、猪名寺駅の真裏にある「つかしん前ゴルフ練習場」に帰りつくやいなや、そそくさと食事を済ませ、七時からいつものレッスンが始まった。勿論生徒達には今日のことは内緒である。

レッスンとなったら人が変わる真剣だ「テークバックはもっと飛球線にそって地面と水平の位置までノーコックで左肩を引つ張ってくる、左膝もついてくる、大きな筋肉の捻転と一体に連動させてヘッドを始動して下さい。」「上体だけで飛ばそうとしすぎていますよ」

「そうですよ腕だけで上げるバックスイングをしないように」

「人間の筋肉は下半身のほうが三倍以上強くできていますから、ニーアクション、力強いフットワーク下半身リードで振るように」一人ずつアドバイスをする。

「駄目だよ右肩が突っ込んでいる、トップからの切返しは左かかと、ウェイとシフト、右の膝を押し込んで」 「まだ上体で打ちに行っています、右膝の押し込みピボット運動で腕が降りて来るように」 「左ひじがフォローでどうして引けてしまうの、右手だけががんばって左腕が曲がっています。」 「ゴルフは、クラブの慣性モーメントを活かすのです、遠心力を素直に出したらそんな腕にならないでしょう。」

「両腕がフォローで自然に伸びるように、ヘッドの重みを感じてゆっくり振ってみなさい」

皆が上達して喜んでもらうことが一番のストレス解消になる。

30 どういう言って表現したら解りやすく基本が身に付きフォームも奇麗になり、

飛距離が伸びるか？なかなかそう簡単には行かない、二時間があつという間に過ぎてしまう、いつもの事ながら上手く行ったなと思う事が少ない、今度何をどう教えたなら良いのか反省ばかりそれでも明日来る生徒を教えるのが楽しみである。

『オーディションの結果？』

幾日か過ぎてオーディションの結果のことなど忘れていました。

そんなある日、エヌエーシータレントセンターから大きな封書が届いた。

中に合格証書と研究生心得及び規則を書いた物、合格者入所手続きのご案内、

レッスンスケジュール表、入所経費の手続き、（振込先）月謝の支払い方法、

入所後の特典の説明、ちなみに二十万三千円を払わなければならない、授業料は毎月払いで一万三千円である。手放しでは喜べなかった。むしろ批判的であり、否定的であった。やっぱりお金儲けの手段か、そう簡単に誰でもタレントに仕立ててくれる訳がない。

人の夢を食い物にしているのか、果たして、夢を与え叶うべく、その道を教えようとしているのか、自問自答し、行くべきか行かざるべきか、さんざん悩んだ挙句、結論を出した。

31 授業を受けることは今後何かに役に立つだろう。

好奇心もあって違う世界を覗いてみようと思うと行く決心をした。今のところレッスンの合間に暇と時間は充分あるのだから、いつまで続くかやってみよう。かくして私は平成九年五月十五日より、六カ月分の授業料を前払いし、身分証明書と名札を頂いて入所を済ませ、NACタレントセンターのゴルフシニア十四期生と成ったのである。

六月はゴルフレッスンもまあまあ忙しく、紹介者のお陰で生徒が二人増えた。

ラウンドレッスンも二回あった。日頃打ち方の説明をしながら模範ショットをすることはあっても、お金を払って練習をしたことがない先生である。ゴルフはそんなに甘くない、常に練習しないとコースに出ていざ実戦となると、頭が覚えているイメージと負けん気だけでは、そう上手くはいかない、ミスショットがでる。特にアプローチやパッティングなど、シヨートゲームの感覚は最悪で、スコアをまとめるのに四苦八苦だ。セカンド地点で絶好の位置から打ったショットがピンに寄らなかつたり、グリーンをはずすと簡単にボギーにしてしまう、私がへマをしてしまうと、生徒が気を使って必ずこう言って慰めてくれる。「一人一人に着いて教えながらだからだしようがないわよね」「私達が足を引く張っているから集中できないわよね」

などと、なぐさめる言葉でフォローしてくれる。これでは情けねえよなあ…。

ゴルフアーは、ゴルフの悪いのを人のせいにはできません、すべて自分の責任です。どんな状況でもタイムイングを計りコンセントレーションをして打つことが大切です。とは言うものの、ラウンドレッスンはえこひいきしないように教えるのは大変である。立場上のプライドと意地でハーフは集中力も何とか持って、流石先生やあと云って貰えるスコアが出るが、イン、アウトとも30台がでなくて残念である。ゴルフが終わって、ラウンドが楽しかった、面白かった、お陰でいいスコアが出ました。先生が着いてアドバイスしてくれたので安心して打てました。などといった感想を聞くと、一日の疲れが吹っ飛び、ゴルフレッスンをして居て、つくづく良かったと思う。帰りにカラオケルームで歌うのも楽しい、また明日から気持ち新たにレッスンだ。

六月二十九日(日)タレント年鑑の写真撮影にNHKのスチール撮り専門のカメラマンの自宅のスタジオに行く。午前の十時からの予約だ。私が着いたとき若い子が一人とその少し後におばさんが来た。簡単な手続きを済ませ撮影が始まった。

いくつかポーズを取らされシャツターを切る、と唐突に、カメラマンが「1たす1は」と言った唐突に何事かと思いながらも「2」と答えるやいなやシャツター音がした。すぐに「はいチーズ」と同じ要領だったことに察しは付いたが変な気分だった。

タレントの紹介売り込みに使う白黒写真だが後で見て不自然な、にやけ顔で気に入らない出来映えだった。自分で言うのも何だが実物よりも見栄えが落ちカッコ悪い写真だった。本になって一万円の出費、他の人の写真写りもどことなく不自然で納得がいかない。

『スタジオでレッスン』 「夕鶴」(鶴の恩返し)

七月三日第一木曜スタジオにて月形先生のレッスン

昭和十八年佐渡の民話「夕鶴」の立ち読み稽古をする。「この物語は世界的に認められ有名であり、日本よりも諸外国で数多く演じ続けられています。」「へーそうなんだ」この話は子供の頃、紙芝居で見えて知っていたし、映画では吉永小百合さんがつうの

役で出ているのを観た事がある。「今日は物語の途中から最後のほうを読みます」

テキストを一通り先生が読んだ後、つう、夫役(よひよう)村人の役の惣ど(そうど)

と運ず(うんず)女性一人に男性三人が選ばれそれぞれの役の台詞を立て読んでいく、

ト書きは先生が読む、ト書きとは台詞の間にある状況説明のことで、「いつの間にか

帰って来たつうが、奥の部屋からすつと出る」とか、「夕やみはようやく濃く、その中に

いろりの火のみ、ちろちろと赤い」などがト書きである。セリフには方言が一杯出て

くるそれらしく喋ってはいるが、佐渡の人が聞いたら訛り違いでさぞ滑稽で笑うだろうな、

映画やテレビドラマでも方言指導者が着いていて教えても変な大阪弁になっている、私の出身地である能登の方言、訛（なま）りもドラマでの能登弁はいつ聞いてもへんだ。ついでに能登弁を紹介しよう↓そうですよ〓ソシナガヤ、ばかだから〓ダラヤサカイ、だめです〓ダチャカン、寄っていきません〓ヨリマツシ、疲れた〓タイソイなどがあります、あの〜とか、え〜とか語尾を伸ばすのも発声の特徴だ。

夕鶴のセリフの「かわいそうだけに」「織るちゅうだな」「こったぞほんなもの」「行ったちゆが」「そげなおめえ」など、昔の方言で喋らなければならぬ。

「惣ど」と「運ず」のやりとりは巧妙で面白い、訛りのイントネーションが判らなくても気分が乗ってくるとそれらしい方言に聞こえてくる。立ち読みをやっている二人が舌を噛みそうな台詞にずっこけたり、相手の台詞を言って間違ったり教室の中は笑い声が絶えない。でもご当人は真剣そのも…だ。「夕鶴」の立ち読み稽古は楽しかった。

七月は五週あつて第四木曜は休みであるにもかかわらず、スタジオに行ってしまった。誰もいない誰も来ない、「変だな」…そうか！やつと気付いて慌ててスケジュール

表を見直したが確認するまでもない休日だったそそっかしいところが又々露見した。いくつになってもおつちよこちよいは直らないものだ。七月は北見先生(俳優)荒井先生(暴れん坊將軍の監督)この二人にも習ったがレッスンの話は後で述べることにして、

『初めてのコマージュルのエキストラ』(サブタイトル初エキストラで現場体験)

私の携帯電話が鳴り響く。「エヌエーシーです。サンヨーのコマージュル撮りですが、八日火曜日大正駅六時四十分までに行けますか」、「エツ、ハイOKです」初めての出演の話が来た。コマージュルの撮影って？どんな仕事かどぎまぎしながら聞いている。

「OKですねその後大阪ドームへ行って下さい、そこで現場の指示に従って下さい、野球を観ている観衆です」当日の服装を指示して来た。「野球を観に行く格好で結構です。ふだん着のジャケットとカジュアル姿のツーパターンを用意して下さい。ただし、

ブルー系は駄目ですよ」

「ハイ判りました」ブルー系はダメか？「前日確認の電話を必ず入れて下さい、七日の五時までに変更がないか確かめて下さい」「確認担当の方のお名前は…？」

「杉本です宜しく」入所してまだ日が浅いのにCM撮影の仕事だ「ヤッター」なんやらウキウキしてきた。そしてゴルフレッスンが始まる前に、夏物のブレザーを買いに行った。

洋服の青山、ボルボ紳士服、アオキ、フタタ、伊丹にある大型店舗のはしごをする。

「時間が無いよ」なかなか気に入ったジャケットが見つからない。紺色でいいんだったら何も無理して買わなくて済むのに、初めてテレビに写るんだからケチケチしてられないし、ビシッと決めていくか、よし、もう一軒だけ行ってみようか、スリーエムが

あった。アダルト向きの商品が揃っている、店員も同じ年頃だ喋りやすく話も合あった。ブレザーとワイシャツ、ネクタイをコーディネートしてやつと買うことが出来た。

おしやれをする楽しみは幾つになってもウキウキするものだ。明日の朝は早起きをしなければいけない、来たく楽しみな明日だ。五十過ぎてこんなワクワクするとは…？

『野球のオールスター戦その時のCMは大阪ドームでこうして作られた』

(サブタイトルルコマーシャル撮り初エキストラ)

当日の朝JR大正駅に集合時間の四十分も前に着いた。駅を出て右に行くと早朝からうどん屋の暖簾がでている、腹ごしらえにちよつと食べるか！、入口に野良猫らしいのが愛想よくニャオニャオと招くように鳴いている、店内は角店なので三角、立ち食いで

五人も入れば満員、月見うどんとおにぎり一個を注文した。すぐにうどんが出てくる、食べながら気になってさっきの猫のことを聞いた。「あの猫はお宅の飼い猫ですか？」店主いわく「捨て猫ですけど餌を与えているうちに居着いたんです」「入り口でお客を寄せるこれが本当の生きた招き猫ですね」との言葉に仲睦まじそうな二人は目を合せ一緒に笑い返した。初めての店に入って和やかに喋れたのは、私のモチベーションが幾分ハイになっていたのでだろう。「ご馳走さん」勘定を払い一歩外に出ようとした時に、猫が戻ってきて私の足元からはず（斜め前）の位置に座り「ニャーオオ」と首をかきあげ鳴いた、先っきとは鳴き声が違う。まるで「ありがとう」と云っているように聞こえた。店の中を振り向くとおやじと目が合った、いつもそうだよと云った顔でニヤツと笑った。なんと微笑ましい猫の恩返しか、まるで童話の世界だ。集合場所の駅に戻る私の後姿を、首を後ろ向きにしてじっと見送る猫。「元気でなバイバイ」と、手を振って別れた。

『大勢のエキストラ』

駅に戻るとNACスタジオで同じ時間にレッスンを受けている顔見知りと出会った。

「お早う御座いますお宅ですか」お互い連れが出来て心細さが若干和らいだ。

そうこうしている間にぞろぞろゾロゾロ人が集まって来た。総勢四十人ぐらい居た、

若い男女に混じって中年の男女が七、八人、集合場所で参加者の点呼をすましてから
野球場まで五百メートル位を引率者に着いてゾロゾロ歩きだす。

知らない他人が見たら何の集団に見えるだろうか、すれ違いざま怪訝そうな目で通り過ごす人も居る。どう思っただけで見ているのかな？このゾロゾロと同じ方向に歩く団体は何だ？

一体何があるんだ？、朝の通勤時間に否日常的な行動をしていることは確かだ。
誰しも何らかの目的を持って歩いている。

何かをするために目的地に向かう、それは今の私も同じであるがゾロゾロと

歩いて行く先に何が起こるのか具体的には知らされていない、変な気持ちで歩く

「こんなにぎょうさん出るのか、エキストラやないか馬鹿鹿、何が出演や…」

『みんな一丸となって撮影』

ラッパのマークのセイロガンのコマージュシャル映像を思い出す。

自分が写っているのかどこに出ているのか全然判らないような、撮影になるんだろかな、ウキウキ気分は消え何が出演やふてくされぎみになってしまう。

ドーム球場を初めて観た。関係者専用通路を通されて、一階内野スタンド入口に着いた。そこで全員集められた。「呼ぶまでここで待機して下さい、勝手に何処でも行かないように」スタッフの一人の若僧が偉そうにそう云った。

現場での決まりがある、聞きたいことはエヌエーシーの担当者に聞くこと、どんな指示でも相手は仕事上の上司である。逆らったり迷惑をかけたたりしないこと。タレントであるプロ意識を持ち、忍の一字。我慢して一切の事に従わなければならない。

器材を運ぶスタッフ、カメラマン、その助手、総監督、ディレクター、AD、大道具係、といったところか？。ホームベースの右側の観客席でリハーサルが始まった。

「その辺に固まって座って下さい、」カメラリハーサル略してカメラリハが始まった。

指示を聞いてディレクターが人の配置を替えていく、「その二人こっちへ来て」

「君と君二人こっち、アベックで観ている感じね」「その男性三人社員同士で来ているつもりで左端から座って」「前列の人もう一段前に座って下さい」「前列の右側貴方と貴方移って下さい」「真ん中の背の高い人後ろの人と変わって」。テキパキと指示をする。

「かぶってる」とか「色がぼける」とか訳のわからない現場用語を使っている。

メガホンと野球帽が適当に配られたが、私は持ちたくもかぶりたくもないと思ひ避けた。

準備ができていよいよ撮影開始だカメラの位置は斜め後ろから、映っているのは頭と肩と左頬ぐらいだろう、一束や一盛りでなく一個売りそれがたとえば腐った林檎でもいい、私を撮って欲しい、大勢の中の一人では意味がない、人数さえ揃えばいいなら誰でもいいじゃないかアホらしいと思つた。此処まで来て今更何の愚痴を云つても仕方がない、そうだ！撮影の現場体験を何度もすることが、今後の役に立ちプラスに成る筈、何事も経験の積重ねが重要だ。ポジティブ思考が明日につながる「それが大事だよう♪」…てか

「エキストラによる集団リハーサル」

ディレクターか監督か知らんがメガホンを使って「打者がバッターボックスにいます」みんないつせいに居もしない打者が立っているホームベースの方を見る。「カーン打ったボールが伸びる伸びるホームラン。私の合図で応援してみて下さい」「打った」という合図で一斉に歓声を上げ手を振り手を叩く、すぐには気分は乗ってこない、野球を観ることは日常的で、野球観戦をしているかの様に撮影する模擬的なニセの行動は、虚実的やらせの映像を作成する事であり、大勢の演者が想像して観戦者に成りきつてその雰囲気演技することで、野球を観ているシーンが撮れる、あたかも観戦しているかのように見せるんだ…。今、その現場に居るんだ。と愚もない屁理屈が頭を巡る。

まさしくエキストラが全員で日常の再現を演じるのである。(そしてリーハ)

「もつと大声を出して、入れー入ったー、やったー」とか、何度もリハーサルは行われた。「みんなが一緒に同じように手を上げてたら変でしょ」とダメダシ出てまたやり直した。「盛り上がりが短い」「同じことばかり一緒に言わない、」イライラして罵声的に言う。大声で「ベースランニングをしている選手を目で追いなから応援するように」などとダメだしの怒鳴る声、馬鹿馬鹿しくって気乗りがしなかった私も、皆の声も演技もどんどんその気になり迫真を帯びてきた。ヤル気満々ディレクターもスタッフも乗って来た。集団心理が働きそこには個人の人格も思惑も消え、一緒になってやることに心と体は洗脳されたように一心不乱、どこか脳裏に有った冷めたものは消え、集中力が他の思考を忘れさせ無我夢中の世界。大袈裟にも役者がその役にハマりきってしまうこととは、うことなのかと思った。そして、大きな青いシートが客席の前に張ってある場所へ移動。私達からは裏側の球場はほとんど見えない、グラウンドのライトスタンド方向が見えるだけである。要するに、青いテントを見て球場をイメージしなければならないのである。そのスタンドに先ほどの設定のまま、全員が横に移動させられた。スタッフの声が飛ぶ。「大きな荷物はそこに置いて下さい」言われた位置にエキストラがスタンバイしてた。

一度だけリハーサルをしてさあ、本番開始だ。「ハイ本番」「本番」大きな声がかかる。

撮影が開始された、カチンコ無し、スタートの合図で、みんなワーワー張り切って観戦者に成りきって演じている。

「OK」の本番撮影が終わりモニターでのチェックが入る、しばらくして、

「オーケーでえーす」の声、「ヤッター」一発で決まりみんなが喜んだ。

「やったー」「デキタゾー」満足感を味わい各人が声を掛け合う。

「お疲れさまでした」スタツフからも「お疲れさまあ〜」

この言葉がこれ程嬉しく、解放感があったとは、実に久しい心地良い気分になった。

これにて初体験のCM撮影完了。

何かを成し得た満足感で帰路に着いた。いつもの生活パターンが待っている…。

このCMはオールスター戦開幕の二日間だけオンエアされたいが、私は見ていない。そしてあくる日の午後。

暇つぶしに行つたいつもの碁会所にて・・・。

『行きつけの碁会所にて』（安永 一先生の囲碁道場）

「やりましようか」「おう」 さあ、白石と黒石との戦いが始まった。

「何やその手は」

「ほっといてくれ、どこ打とうと勝手やないか」

「遅いな、下手な考え休むに似たりや」

「いいとこ打つやないか」

「死んで花が咲くものか」

「死んで花が咲いたなら、お墓の廻りは花だらけ」

「シチヨウ知らずに碁打つな」

「四隅取られて碁打つな」

「しまったしまった島倉千代子」

「はよ投げてや」

「勝負は下駄を履くまで判らない」

何やかやとダジャレや舌戦を交えて、楽しくへボ碁を打って楽しんでいる。

（碁の面白さは、やってみないとねえ）

『レッスンで大笑い』（サブタイトル荒井監督）

荒井先生は暴れん坊將軍の監督である。お顔立ちは怖い、現場ではかなり厳しそうだ。だけど私達シニアに対するレッスンはやさしいしユーモアがあつてメツチャ面白い、演技指導の時なんか、乗ってくると生徒の間違った演技を真似てオーバリアクションでダメ出し、それが、可笑しくつて、お腹がよじれるぐらいに皆大笑い。

立ち読み稽古のときなどは、セリフをなまるとすぐに真似をする。

「大阪弁や」「あんた、九州か」「あんた、何処」「あんたは、四国か」とつつこむ、全員が訛っているから大笑いだ！、それが天然の笑いだからメチクチャ面白い。

監督がメガホンを取った。映画「砂丘」の台本で演技指導を受けた。

青春ラブストーリーのワンシーンをコピーし、ホッチキスでまとめた短い台本を渡され、悠子と信吉のラブストーリーのワンシーンが始まった。

砂浜で座って絵を描いている信吉の傍らにそつと近づいて行き、（最初の台詞）

そこで、監督が「抜き足差し足忍び足、あんた盗人か」と大笑いをする。

監督がその真似をする滑稽な仕草で、レッスンスタジオは笑いの渦になる。

悠子：「コンニチハ」とが声をかける。

信吉：「やあー」（言葉のやり取りが始まる）

（信吉が悠子を背後から抱きしめ）「悠子！好きなんだ！好きなんだ！」

悠子（ふりほどこうとしながら）

「嘘！嘘よ！お姉ちゃんにも、わたしと同じこと云ってるんでしょ」

信吉：「違う！ぼくが好きなのは最初から悠子、君だった」

ト書き：（信吉に抱かれたまま泣いている悠子、いつの間にか陽は落ち、二人の足もとに

波が打ち寄せている）演技はたったこれだけである。（映画のラストシーンである）

「照れるぜえー感じが出ない」大きな声で云えばいいってもんじゃない、笑っちゃうよ、（東京弁になっちゃう）ほんと、二十代の頃に帰ってやれただって、もう今更無理だよ、ここがいいとこなんだからと云ったって、年食ってんだから。

やらされる方も見るほうもケラケラ笑ってしまう。

監督も呆れて笑っている。青春映画のワンシーンの稽古風景は素人の天然ボケで、バライティー番組よりめっちゃ面白くて笑っちゃう楽しいレッスンだよ〜ん。

『うれちゝいゴルフの日』

七月二十九日と三十日の二日間続いてラウンドレッスンがあつた。

生徒と一緒に、二日連続で回るのは十二年振りである。初日4バーデイ取って5オーバー。スリーパットが三回とはいけませんね。二日目は2バーデイ取って、3オーバー。

距離は短い狭くてトリッキーなホールが続くコース、久しぶりのラウンドで両日とも七十台は満足の行くいい内容のゲームが出来たと思う。

パオン率が良かったのにパットが…ねえ。先生、パットが下手ですわねえって、余りにも入らないパッティングに、同情とも思えない生徒からの厳しいお言葉。

パーセーブのパットは外れ、バーディーチャンス逃しているようではダメだ。でもまあ！、月一ペース程度のラウンドで、ボールを打つ練習もろくにしないで、

素振りだけしかないのだから、これで良しとしましょう。

八月、スタジオレッスンを受けることにも馴れてきたが、演じることの難しさを痛感した。

まだ自分の出番が近づくと少し心臓がドキドキするが、人前でのあがり性も幾分は無くなり落ち着きと余裕が出てきた。

余裕を持ちすぎても駄目なのだろうけど、演技をした後はもったこうやれば良かったと反省しきりで、思うようには出来なかった悔しさが残る。

今度同じことをやらされたら絶対上手くやってやるうという無念さはいつものことである。阪神高速をセルシオで帰る運転中の最中でも頭にセリフが渦巻き、

繰り返し大きな声で台詞を云う練習をしよう。(全然上達する兆しは無い)

八月下旬のある日NHKで撮影中の『生前の予約』という連続テレビドラマのシーンに医者役で出演する話が携帯電話に掛かって来た。

「谷町線に乗って谷町4町目で降りて2番出口を出て右へ歩いて5分ぐらいでNHKです。二十六日十一時三十分迄にメイク室前に行ってください」

「前日の午後五時に事務所まで確認の電話を入れて下さい」

「OK」「了解しました。」今度は一人だけ選ばれた。その他大勢ではないのだ!。「ヤッター」何やらワクワクしてきた。

その話が来てから私は医者役の役ってどんな事をするのか気になってしょうがない。医者を目指して妄想していた。

NHKの洋画で病院の出来事をドラマにした番組がある。

医者役を黒人がやっているドラマだが、それも見た。患者との会話、接し方

「お身体の具合どうですか」「ご家族を呼んでください」「しぐさ格好を真似ていた。当日、遅れてはいけないと思って早く行きすぎた。

NHKの大きな玄関を入って右の受付で来訪目的「NACから来ました世森友です。生前の予約の出演で来ました」と告げると、来訪名簿を確認し入館の許可が出た。

そして、メイク室を教えてもらった。(後で何が出演だと後悔するハメに……)

余談だが聞くとところによるとNHK放送局の建物内の通路は迷路のようになっている。

一階と二階、一階と地下、二階から一階、各階が錯覚するような構造で作られているのは、テロ対策なんだって、確かにビル全体が継ぎ足したように各階が複雑な構造になっている。そして、メイク室前のソファで、待つこと約一時間、途中から同じNAC所属の短大生も合流して一緒に待つ、話を聞くと、看護婦役なのだという。通る人通る人に「お早うございます」誰が誰なのか職員か？全く判らないが挨拶だけはする。

芸能人も出てくる、ぼくが大好きな、俳優の「小林薫」は姿勢が良く映像で見るとより体格が良くて格好いい、文庫本を持って、喫茶室の方へ入っていった。やっと、NACのマネージャー代わりの現場担当者がやって来た。

「お早う御座います」「何か指示有りました?」「まだ何も聞いてませんが」

それから少し過ぎて、化粧室のドアを開けて、アシスタントディレクター（AD）らしき若い人が出てきた。ペコペコと頭を下げ「おはようございます」の挨拶。

「医者役と看護婦役、二人とも衣装室で着替えてから此処で待っていて下さい」

白衣、小道具に聴診器、衣装係の太り気味の男は偉そうに、つつけんな物の言い方をする、びくびくおどおどしながら、年長のこつちが丁寧語で気を使い使い喋っているのに、

「クソツ」と腹がたつ、ロッカーの借り方までも教えてもらい、持ち物と服を入れた。普通の高さの半分の大きさの古いロッカーである。

着替えを済ませてソファに戻る。何時間こうして待たされるのか見当もつかない。看護婦役の短大生と喋ったり、通路から化粧室に設置してあるモニターを見る。

その画面には、現在撮影している朝ドラ「甘辛しゃん」のモニターが映っている。長いこと嫌になるほど待たされてやっと、さっきの人（AD）が来てくれた。

「撮影は午後からになりますから食事を済ませて下さい」と、詫げれずに言う。なんちゆうこつちや馬鹿にするな、散々人を待たせておいて、でもグツと我慢…、

「済ませたら、一時十五分には此処に戻って居て下さい」「…はい、はい」

NHKの食堂は初めてなので、地下二階なのか三階なのか？容易に判らない？うろろと歩いて、どうにかこうにか食堂にたどり着いた。

その日のおすすめメニューの食券を買って、中へ入っていくと、セルフである。どうするのか戸惑ったが、前の人のやり方を見てなんとかお盆に食べ物は揃った。空いているテーブルが見つからない、ほとんどが相席状態で、間もなく食事が終わりそうなテーブルに見当をつけて待った。

看護婦役の短大生、名前が「後藤」。後藤さんはうどんを持ってやってきた。

細かい話だが、うどん代は私がおごってあげた。お父さんぶって安いもんだ。

とばかりええ格好したのであるが、これが、悔しい思いをすることになるとは…？。

昼食を済ませ、化粧室前の長椅子に戻り、一時十五分になるのをひたすら待った。そして、二時近くになってやっと、ロケ現場へ向かう指示がADから告げられた。

大勢のスタッフが、阪大病院の裏手で撮影の準備をしている。

後藤さんの髪をメイクさんが直している。私は日陰で待機していた。

やがて、カメラの側にいる演出家らしき人に呼ばれた。

「医者役の方こっちへ来て下さい」 指示がでる

「あの入口から出てそのままこちらに真っ直ぐ歩いてみて下さい」

「はい」

なんや歩くだけかいと思いつつも昼間の散歩の雰囲気を出して歩いた。

その様子を見て、カメラマンと何やら打合せをしている。

そのシーンをどうするか決まったようだ。

「すみませんこっちに来て下さい」

カメラの前に後ろ向きに立たされた。

「肩をほんと叩いたら歩き出して下さい」

なんだ！最悪だ後ろ姿しか映らないではないか、強面で医者に向いてないのか、それとも主役より男前過ぎて目立つからか！。

演出家らしき人が、カメラマンと何やら話し合って、スタートの位置を決める。

少し斜めに歩く方向、そして、歩く感じは、昼休みにぶらっと外に出て陽を浴びながら歩いている。そんな雰囲気を出すようにと指示が決まった。

そして、小林薫も登場し、歩いている私とすれ違うシーンを撮る事が判った。

紺のスーツを着てカバンを持って、血相を変え急いでいる様子で走ってくる。

カメラは私の右肩と頭半分なめている状態からスタートをする。

私がゆっくりと五、六歩、歩いた所ですれ違うシーンだ。リハーサルが始まる。

リハーサルは二度やらされ、小林薫さんの方に細かい指示があって「はい、本番」

「スタート」「ハイOK」。本番は一回でOKが出た。

相手に目を合わさずに、白衣のポケットに手を突っ込み大股でゆっくり歩く。

考えてやったつもりだ。演出担当や監督はどう思ったかは知る由もない…。

次のシーンの撮影は。小林薫が走って下りて行くスロープ（車の進入路）の途中で、こんどは看護婦役の後藤さんとすれ違うシーンの撮影だ。

これもちよつと歩くだけで「ハイOK」これで終わりだろうと思っていたら、もうワンシーンあることが告げられた。

今度はきつとおいしい役どころかも、と期待して待った。

現場は急に慌ただしくなった。カメラも一緒に追いかけながら撮影する。

移動カメラのレールが組まれていく、カメラが揺れたりガタつかないように、スムーズに移動できるように、大工さんがよく使う道具で水平を計り、厚さの違う板を下に噛まして、レールの微妙な高低差を調節して行く。

照明さんも反射板（レフ板と言って銀紙を張った板）の位置やライトの位置をセットしていく、その間、私達二人は炎天下に立ったまま待っていた。

小林薫が主役かどうかは、ドラマの内容まで知らされてないので定かではないが、小林薫は折りたたみチェアに悠然と腰かけて出番を待っている。

私はたばこ一本も吸えない状況で我慢しなければいけなかった。ようやく準備が整い出演者がスタンバイに入った。私に動きを付ける、小林薫が走り過ぎる真後ろを横切るようにゆっくりと歩き院内に入っただけである。

側に居た若いADに、ちよつかいと、おべんちゃらのつもりで聞いてみた。

「ああ暑いなあといった感じで空を見上げて歩いていいですか」

「それでいいと思いますよ」さあ、ようやくリハーサルの開始だ。

スタートの合図で走り出すその後ろを車の横から出て歩き出す。

通路には日陰と日が射しているところの明暗がはっきりしていた。

一回目のダメダシ、小林薫に「走って通るところを、もう少し病院側にしてください」

彼女は立つ位置と「すれ違う時はもう少し近づき、あまり離れないようにして下さい」と指示が出た。

「はい本番」「OK」撮った映像をモニター画面で三人が頭を寄せ確かめて合って見ている。おかしいところが無かったようだ。「はいOKです」本番の時少しでも顔が写るように、少し斜めに横顔をカメラに向け、小林薫が走り病院の角を曲がるまでは、カメラが回っている筈だから、その間ゆっくりと歩いてみたが果たして、どこまで写っている事やら。見ていないから判らないが。結局、私は後ろ姿と横、彼女は前からと後ろ姿だった。

一段落して飲み物が支給された。

ロケスタッフ全員で休憩、ちよつと休んで次のシーンの撮影が始まった。

私は立ち疲れてへろへろになって病院の壁に寄りかかって見ていた。

帰っていい筈なのに、次のシーンの段取りで必死に働くロケスタッフはてんでこ舞で、誰にも声をかけられず、ADは何にも言いに来てくれない。

放つたらかしにされたまま、相手にもされずに、撮影現場の様子を見ながら待っているしかなかつた。

やがて救急車が用意され中から車付きの担架が下ろされた。

担架に誰かが乗っている、病院の廊下を急いで担架を押ししていくシーンの撮影だ。

設定が決まり演出も決まった。何度かリールサルをして動きをチェックして本番だ。

出番が来るまで、小林薫さんは。このシーンから共演する若い俳優さんと親しくふざけ合うようにリラックスして雑談をしている。とても、演技の事に集中しているうようには見えなかつた。「現場に慣れとる人は違うな」と思った。

「本番」の声で顔つきがころつと変わり真剣になり、その場の雰囲気を出して演じていたのは流石だった。スタッフも全員が病院内に入って、外には二人が残された以外誰も居なくなつた。その時ふと、小林薫が座っていた椅子に目が行つた。

ぼつんと離れた場所に残っている椅子が気になり、座ってみたい衝動に駆られた私はとうとう我慢し切れずに、チョツとした出来心で腰かけてしまった。

座るや否や間髪を入れずに、「ダメよ」後藤さんの怒鳴る声、ビクツとして立った私は無言でやってしまったことを恥じた。黙ってその場で反省をした。

病院での撮影が全て無事終わり、スタッフが戻って来て、立って待っている私達にやっと気付いてくれた。「お疲れさまでした」ああこれで帰れるんだ帰れるんだ。

君達の出番は終わったから、もう帰っていいですよって、早く云ってくればいいのに、そうすれば、あの椅子に座ることもなかったのにと、憤懣やるかたなし。

帰りはNHKまで歩いて帰るように云われた。

歩いて帰れるほどNHKまでが近いとはしらなかった。受付嬢（病院の案内係のおばさん）に帰り道を聞いた。そこを出てまっすぐ行って、横断歩道を渡って、左へ曲がれば、

NHKですよと、方向音痴の私に、解り易く親切に教えてくれた。

大きな歩道橋を渡り終え横断歩道の信号待ちをしているときに、後藤さんが切り出した。

「さつき、小林さんの椅子に座ったでしょ、駄目ですよあんなことをしたら、こんな事をした人がいると事務所にクレームが来て、皆に仕事が回らなくなったらどうするんですか」
「・・・御免ねえ、五十を過ぎたら長時間立っているのが辛くてなあ」

私は気まずくて性が無い、あやまった後に追い打ちだ。

「私らはこの業界ではまだ下っぱだから、上下が厳しい業界だから、一寸でも、嫌われる事をしたら上にいかれへんよ」しつかりしたことを言いよる。

だが…、そこまで年長者に向かつて説教するか、お前は何様や…現代っ子は違うんだなあ、
「お前は芸能人にでもなったつもりか笑わせるな、お前は無理や、何のぼせあがっとなや、俺と何ら変らん立場やないか、今日一緒にエキストラやった仲間やないか、俳優の卵か何や知らんけど、年上にそこまで説教するか、年上に対する思いやりとか配慮とか、

心遣いとか、遠慮は無いんか、生意気やぞお前が芸能人に成る顔かボケ」年甲斐もなく、若い子にやり込められて、返す言葉もなく、頭に来てしまった。

ブチ切れて、言いそうになったが、グツと飲み込んで堪え胸にしまいなながら、

「ホンマ悪いことした、ホンマにスマン・・」というのが精一杯だった。

相手の言い分は的を射てるし、私がいけないんだから…、だが、我が子より年下の短大生の勝ち誇ったようなしつつこい叱責に対し、素直に成れずムカついたが、

「今後一切気をつけます。二度と迷惑は掛けませんから」と謝るしかなかった。
現場での心得。その一がホンマに身に滲みた。

なんでこんな子に、鼻の下を伸ばして、うどんをおごったんやろう…。

『小林薫がいつぺんに嫌いになった』

NHKに帰り着き、メイク室に入り、とっととロッカーに向かつて着替えを始めていると、ロッカーに向つて真後ろが、出演俳優の控室の入り口になっている。背中に人の気配を感じ、はっと振り向くと、小林薫さんが上がりがまちに腰かけ本を読んでいた。あれ！もう帰っていたの？早いな、あのシーンが最後の撮影で、病院から車で送つて貰つたのだろうか、思いつつ、着替えをそそくさと、済ませた後、帰り際に、小林薫さんの方に振り向き、「お疲れさまでした」と相手の目と顔を見て声を掛けた。芸能・業界規範の挨拶をちゃんとしたつもりだったのに…。

彼のリアクションは。本を読んでた顔を上げ、あなたは誰といった怪訝な表情でちよつと目を合せただけで、素っ気なく無視するようにして頭を下げなかった。

先ほどまで同じ撮影現場にいた私の顔は覚えていないにしても、今日一緒にロケをした人かなぐらひは察しがつくだろう。わずか2m程しか離れていない、目の先で、白衣を着替えていたのに、鷹揚な態度には到底思えなかった。

シリアスからユニークでひょうきんなチンピラ役まで、幅広く色んな役をこなす俳優さん

だったから、好きな芸能人だったが、一寸がっかりした。

お前はそんなに偉いのか、有名人はエキストラ如きに一々まともに挨拶してられないか、クソツたれが、椅子に本の一瞬だけ、ちょこっと座ったことで小娘に怒られたことも思い出し、相乗効果で尚一層気分が悪かった。

しかし帰りの電車の中では。人仕事を終えた。妙な満足感が疲れを忘れさせた。あれ以来コマールシャルに出ている小林薫を見ると偽善者に見えてしまうのである。つくづく、人間同士はコミュニケーションが大切なのだなあと我が身に沁みた。

『NACスタジオの待合での話題』

八月二十八日木曜、三時四十五分に始まるレッスン前、いつも早く着いてエレベーターの踊り場にある、長いベンチのような腰掛けのある喫煙場所で一服するのがお決まりだ。「おはよう」「お早うさん」「お早う御座います」ぞくぞく生徒が集まる。

そこで、顔馴染みになった者同士で、このような会話を交わす。こんな仕事をした。

このドラマに出た。こんな役をした。こんなエキストラの仕事をした。などなどわいわいガヤガヤ近況報告の会話が飛ぶ。「何か出た」「この間テレビに写ってたね」「コマーシャルに出てんの見たよ」「CMのオーディションを受けに行った」「あんたテレビにでとったね」「わたし今度これに出てるから見てね」「この間女優さんの横で飲むシーンを撮って、それを見たらアップで三秒ほど写っとったで」などなど、プチ自慢の話でもちきりだ。

「もう何かでた」「別に」「撮影に行つて来たんでしよう」「うん、エキストラや」

「どんな役やったん」「役、言うほどのことやあらへん」「仕事があるだけいいやないの」中には「その他大勢のエキストラをするのは断ってるの」と云っている人もいる。

私もそう思っているけど、今はとにかく経験を積む事や、なるべく事務所から与えられた仕事は断らないで、都合がつく仕事はNGを出さないように頑張ることだ。

いつか、チャンスがあれば、おいしい仕事が来るだろう。エキストラであろうと、我慢して現場に行く。エキストラの仕事も趣味の一環と思つて、気楽に続けることにした。

みんなも芸能人気取りで、売れるかもしれないなんて勘違いしないように心得なさいよ…。芸能人やタレントは一杯居て、あり余っている。駆け出しの素人が簡単に上手く行く訳がない、夢や目標に向かって生きる。それは良い事だが、夢だけにしとけよとつくづく思う。

NAC事務所は。エキストラ派遣のピンはねで儲けている会社だと私は実感していた。

今日つつがなく仕事をこなし、何かを成し遂げて、無事起きたことに感謝をして床に着く、明日目覚めれば新しい時間であり、新しい体験だ、日々の行いは同じことの繰り返しかもしれないが、雑事も居食住も、時が過ぎれば昨日とは確実に違う、身体の細胞も、年齢も一日分どこかが違うのだ。生きていて当たり前のことであるそのことに対して、明日になれば一歩進むと思うか、後退すると思うか、諦めと惰性の明日を安閑と待つのではない、何か楽しみが待っている。するべきことがある。何かをする、見る、出会う、聞く、行く。何でも良いから期待感のある明日。心と体と頭で思いつくままでいいからそれを続ける。自分にとって励みになることを見つける。感動が待っている、楽しみが待っている明日、そんな明日をテーマにした題名が、「五十からの明日」なのだ。

『競馬に狂って大損』

(サブタイトル 一夏の熱い体験)

熱い夏にさらに、熱くなる体験をした。阪神競馬に土・日と園田競馬に水曜通い詰めた、阪神では一レースに五万から十万張った。単勝複式黒三角には十万から二十万、ほとん

どが一点張りだ。枠連でも馬連でも予想紙を見て専門家が同じ組合せを予想している堅そうなのを買う。馬のことは血統も何にも解らない、パドックも見ない、黒三角の馬で、この条件なら三位以内に入るなと思つたら買う。例えば第一レースが外れてしまつたら、同額を二レースに賭ける。それも外れたら三レース目は倍額を賭ける。

それも外れたら四レース目では前と同額を買う。この方法ならいづれ当たれば儲かる。始めの内はビギナーラックで運良く勝てた。ところがそうは問屋が下ろさない、堅いはずのレースが荒れる、取り戻そうと熱くなり、欲をかって大きな配当の馬を一発逆転で狙う。当たらない、熱くなって単勝複式の一点買い二十万円を張って六十万以上を取りに行く、当たるとは思はない、考えが甘かった。競馬は難しい、賭博は怖い博才がない、勝つたり負けたりで、金は400万円程動いたが、最初の30万円と下ろした貯金百万円をすつていた。軍資金が無くなった時はガックリしたが、サツパリと競馬場へ行くのを止めた。競馬でこれなら勝てるという法則は御座いませんから、皆さんもほどほどに楽しんでね。でも楽しかった当たり馬券を返却口に入れるとバサバサガチャンとお金がでてくる。思わずほくそ笑む、「ゲートイン終了、各馬一斉にスタート」道中の駆け引きと折り合い直線コースで逃げ、差し、追い、ゴールまでの素晴らしい競走馬の姿。行けえ、走れえ、ゴール寸前はエキサイトする。買った馬が差して来た時が一番の醍醐味だ！興奮する。

一度やったら、癖になりそうな魅力がある、競馬に取りつかれそうだが、でもそれはもつと年をとってからの楽しみにする。

賭けるレートをもつと下げて、勝つても負けても、金儲けに執着せずに、素晴らしいサラブレッドの走りを楽しんで観戦したい。
今はそう思っている。

不思議に悔やんでないし勿体無いことをしたとも思っていない。
良い経験になった。そして暑い熱い夏は終わり残暑厳しい九月に入った。

『女優の雪白先生のレッスン』

雪代先生には。パーティに出席した時のテーブルマナーと、立食パーティの注意点などを教わった。岡田先生には言葉について、言葉と表現と題して九項目に別けて、ノートに書き取る。その一つの九、言葉を固定化して書かれた台本の台詞を上っ面だけ読んでも駄目です、（書かれている内容、奥を読み取る）気持ちには言葉だけでは表しきれません、心からあふれる表情として出なければなりません。

役を演じることに重要な基本的知識を教わる。

『スタジオで即席の演技』

岡田千代先生「恐怖の場面を演じてもらいます」五人一組のグループになるよう云われた。「エレベーターの中で起こった怖い体験をする、それを演じてください」私の組は男二人に女三人、わいわいがやがやそれぞれの組が短いシナリオ（脚本）を作るために話し合う。『恐怖シーンを即興で演じる』私が脚本と演出とキャスティングを勝手にやり始めた。

清水さんは部長役で、私は課長、女性三人はOL役、皆でゴチャゴチャ話し合うが、結局、私が率先して決めた。「ハイみなさん、立って動きを入れてエレベーターの場所や大きさも想定して、後五分あげます」皆、顔を突き合わせるようにして真剣に取り組んでいる。いよいよ各組の演技が始まった、そして私達の出番が来た。先生の「ハイスタート」の声。私がランチャタイムを終わって、爪楊枝でシーシーやりながらエレベーターに向かう、部長がエレベーターに乗り込む、「部長待つて」私が手を上げる。ドアが閉じないように、部長が押さえている。私が、エレベーターに小走りで乗り込み私…「社員食堂相変わらずマズイね」

部長：「ほんまや、何とかならんかな」と、喋っている。

(するとエレベーターが、止まりOL三人が乗ってくる)

私：「岡本さん、この間の日曜日彼氏と二人で中之島歩いとったやろ」

岡本：「いや、そんな」中島「もうじき結婚するんやて」

岡本：「嘘、私まだそんなこと」

中原：「本当、ええ」

部長：「岡本君もすみにおけんな」

私：「彼、男前やで」(楽しそうに会話を弾みます)。

そして中島さんが髪を撫でるしぐさを合図に、みんながいつせいに騒ぎ出す。

「おっ、わっ、きゃー、地震や」エレベーターが揺れる。

しやがみ込む、又揺れる、電気が切れて真っ暗、

私：「部長、ライターやライター」と叫ぶ、(恐怖で慌てふためく)

これにて寸劇「恐怖体験」の演技は終わりです。

岡田千代先生はうんうんと頷いただけ…。(自己評価はイメージの半分の出来でした)

『お昼の連ドラに出演中の北見先生』

エヌエーシーのBスタジオオ今日は。私も知っている俳優の北見先生の授業である。まず最初に仰向けに寝そべって、お腹一杯横隔膜を広げて吸って、五秒間止めてア〜と声を二十秒間以上出す。イ〜ウ〜エ〜オ〜まで繰り返し返し発声訓練を行う、先生はイチ〜ニ〜サン〜シ〜ゴ〜と秒数を数えるこれがなかなか二十秒以上は息が続かない、言うに、講談士は一息で一気に喋るらしい、呼吸法の訓練が出来ているからだろう。名脇役と言われた。俳優の北見先生から、アクセント音感について習った。

日頃何も感じないし、気にせずに、考えもしないで使っている言葉。その言葉の言い方には正しいイントネーション、正しいアクセントの決まりがある。この違いでお里が知れる。例えば「なに言ってるの」この短い言葉で判ってしまう。

「な」を伸ばす、「に」が高い、「に」が低い、「言」が高い、「言」が低い、「て」が上がる
「る」が高い、「る」が下がる、「の」を伸ばす、「の」が上がる、「の」が下がるなど、
アクセントの違いは色々なのだ。

そして、聞く場合と、無視した場合と、怒ってる場合と、状況によっても違ってくる。
強く出す音、高く出す音、上げるのか下げるのか、正しい発声をその場で直すように云われたら、音感がしっかりして正しい方を理解できれば直せる。

何度も言ったり、言い直そうと繰り返して言うのと、余計ややつこしくなり実に難しい。イントネーションは平板型、頭高型、中高型、尾高型の四つが基本である。

新聞、野原、話す、明日、これが上から順に四つの型の例題である。

しんぶん、のはら、はなす、あしたと、声を出して言ってみれば解ると思います。

『エチュード』

続いてのレッスンは、動きをつけずに立ったまま台詞を喋る。ちよつとした手の振りはしてもよい、エチュードの勉強だ。ようするに台詞の言いまわし、発声の練習が始まった。

『台本を持ったままの立ち読みの稽古』

「あつ、なんだろうあれ？ほら、あそこだよ、あそこ、見えないの？あそこに赤い屋根があるでしょう。もつと右もつとずつと向こう。赤い屋根のずつと上の方だ。

何かキラキラ光ってゆつくり東の方へ動いているだろう。

見えないの？ほらだんだんあつちへ飛んでくじやないか。

ああ、あの屋根のかけに入っちゃった。見えたろう！丸くてキラキラ光ってたぜ、

あれはUFOかもしれないぞ、そうだ！UFOだよ。」

たったこれだけですが、貴方は劇場の舞台で、日常のように自然な演技ができますか？？このシーンの情景を想像してその場所に居ると思つて、イメージを膨らませて、セリフを云っているんだが、北見先生に何度もダメだしをくらつて言い直しをやらされた。

「ほら」でダメダシ、近くの物を指して云う「ほら」と、遠くを指して云う「ほら」と、驚いて云っている「ほら」と、何かを見せるときの「ほら」も、傍で聞いている人が一人の時と、周りに大勢いる場合の「ほら」、状況によつて全て違うのである、この台詞の中の「ほら」は、かなり遠くの物体を見つけて驚き、側に居る彼女か友達に教えたい「ほら」であることを表現しなくてはいけないと丁寧に説明してくれた。

次に「ああ〜」であるが。見つけて欲しいのに、スーツと消えていく様子と、スピード感、動きが伝わるよう、その気持ちと状況を表す「ああ〜」である。短かくても、間延びしたような「ああ〜」でも駄目、諦めたときや驚きとも違う「ああ〜」なのだ、決して悶えている「ああ〜」ではない、女性の方々が云っている、「ああ〜」は、悩ましく聞こえたり、間が抜けたような感じに聞こえる。各人各様の天然ボケで笑われたり笑つたりで先生も色々ツッコミをやつてジョークを飛ばし笑わしてくれる。

他の人がやっている時にこうしようと、イメージが湧き出来そうだが、いざ自分が台詞を

声に出すと、「ああ、あの屋根のかけに入っちゃった。」が、上手く行かなくて悔しい、「ダメダメ違う違う」先生が何度もチェックと指導、演出家だったら怒り出すだろうな。レッスンは真剣な中に笑いがあつて楽しい、オバハン連中が面白くてハマッテしまった。

『ガンバレ〜エキストラ』（初めてのテレビ番組の録画撮り）

十月九日当日、十七時三十分地下鉄谷町線の天満橋東改札を出たところに集合してから、テレビ大阪に向かった、学校の教室のような広い部屋に案内された。大勢集まっていた。ほとんどが十四期生で顔見知りの人達だ。「お早う御座います」と挨拶を交わす。

みんなテレビに出れるという期待感で、一様に嬉しそうに華やいだ顔をしている。入念な化粧をして、目一杯オシャレをしたおばちゃん達は大張り切りだ。

同期の男性二人の居る席に着いて、用意されていたお茶を飲みながら、世間話を始めた。先に来ていた先発の連中は、「うどん対そば」の収録を既に撮り終わり、その収録の様子をあっちこつちでワイワイガヤガヤ、その話で盛り上がっている。

「エッうどん対そば、終わったん？」

「そうや、さつき終わったよ、次の収録は、女の浮気対男の浮気や」

ええ！、ダチョウクラブの、言いぐさじゃないが「聞いてないよ」

下調べした予備知識は何の役にもたたなくなつた。

例のめつちや天然のおもろいキャラの和田のおぼちゃん、廣野さん、松倉さんとの四人で雑談しているところへ、テレビ局の若いスタッフが入つて来て「審査員をやる人は、これを着けて下さい」と言つて胸に着ける審査員と書いた名札と、リボンを適当な人を選んで渡していく、私はなんとなく気が引けて、審査員に選ばれることを、避けたくてスタッフと目を合わさないようにしていた。

又待たされるのだろうと、思つて居たが、以外に早く六時を回つた頃にスタジオ入りした。番組の収録でセットに入るのは初体験である。

『録画取りでひな壇』

スタッフや関係者と思われる一人一人に丁寧に「お早う御座います」と挨拶を交わしながら入っていく、女性のサブディレクターが席に着くように案内をする。

左右と中央正面とに三段のひな段がセットされていて、右側が女性、左側が男性、正面が審査員席、私は二段目の奥（右）から三人目に座つた。

審査員席は入場が後でまだ席は空いたままだが、両サイドは全員席に着いた。S・Dさんがオーブニングの説明を始める。要するに拍手の練習だ。それと収録のおおまかな説明だ。

「マイクを向けられたら、遠慮なく、何でも思ったことを、言つて下さい、文珍さんが、コメントを求めるかも知れませんが、その時もしどんどん喋つて下さい」と、指示を仰いだ。スタジオ観覧とか、公開テレビで番組を生で見える機会は誰でもあるのだが、番組に参加し収録される側になることはそうそう無いだろう。始めての体験で気分がワクワクしていた。4321スタート全員で盛大な拍手、「女の浮気対男の浮気」の収録が開始された。司会の文珍さんと女性アナウンサーが登場、メインのカメラは真正面、その横からチーフディレクターが進行の指示を出す。カメラの下に隠れカンペイを出す人がいて、カンペイに書かれた指示を見ながら文珍さんは喋る。

「それでは、今日のゲストの方々に登場して頂きましょう」いっせいに拍手で迎える。

ゲストコメンテーターは、そのまんま東、洋七、若林、鈴木紗理奈、久本妹、女性弁護士、この六人で「女の浮気対男の浮気」の、バトルが始まった。

ゲストのやり取りの内容は、収録の現場の方が、編集したオンエアーよりも、数段面白い、私は終始笑いつばなしで手を叩いて笑っていた。

「ガンバレヨ」と、調子に乗つて一回だけ大声を出した他は。一言も喋る機会は無かった。カメラがなめる度に、どのように写っているのか期待した。

NGもダメ出しも大した緊張感も無く、八時過ぎに、収録は順調に終わった。

初体験の番組収録だったが、こんなの出てもあまり意味がない、一人で客の役をするのとさくらの客とは意味が全然違うからだ。

バラエティー番組が出来る流れを見せて貰っただけで十分である。

十月の下旬になって、事務所から立て続けに入って来た。撮影現場のオフア―は、陽炎4、極道の女達、TBS教えてアミーゴ、この三つが来たが全てNGになった。

仕事の依頼を受けて、現場に行ける都合をつけて、意気込んで、行く気なっているのに、直前であれば行かなくてもいいですよと断られると、「ガックリ」NGのショックで気持ちがおかれる。「極道の女達」、どんな役だったんだろうな、ヤクザだったのかなと妄想する。

『正月特番のロケ現場』（サブタイトル鈴木京香と共演???）

この日は、通天閣に行つて、暗くなるまでのロケ撮影で大変だった。「疲れる〜」

事務所からのロケ内容の指示は。十一月六日七時十五分、通天閣エレベーター前に集合、鈴木杏香さん主演の、テレビドラマ、浪花のべっぴん刑事「お礼は見てのお帰り」のロケである。朝が早いが主演が鈴木杏香と聞いてエキストラの仕事を引き受けた。

毎回のことであるが現場へは電車で行かなくてはいけない。電車に慣れてきたとは言え、初めて行く場所には、電車のアクセスを下調べしておかないと不安である。

明日は早起きして、五時五十五分にJR猪名寺駅から電車に乗らなくてはならない、明日のことを夢見てもう寝るとするか、五時に目覚し時計をセットしてベッドに入る。

明日の事が気になり、色々勝手な妄想が始まり、少し興奮気味でなかなか寝つけなかった。指定された、通天閣の待ち合わせ場所に、誰も未だ来ていなくて、私がいの一着に着いた。近くのコンビニで、パンと缶コーヒーを買って腹ごしらえをすることにした。

通天閣のエレベーター前の片隅でパンを食べていると、NACから派遣されたエキストラとわかる人達がぼつぼつ集まって来た。エキストラの人数がどんどん増えて来る。

安藤さん、愛称あんちゃん、NACに入って知り合ってから、「安ちゃん」と呼んでいる。

「おつ安（あん）ちゃん久し振りやな、お早うさん、元気にしとった」久し振りである。

「おつお早う」大きな目を細めて、満面の笑みを浮かべながら私に近づいてくる岡山から芸能人に成る事を夢見て、こんな事をしている。NACでは二つ先輩の安藤さんである。

私が「どうしているのか気にしてたんやでエ」と、言うとうん、レッスンを卒業してからは一度もスタジオに行っていないから、会う機会が無かったなあ…と、言った。

安ちゃんは、私がNACのスタジオに通い始めたとき、最初に声をかけて、話し掛けてくれた人で、他の先輩の紹介もしてくれた飾り気のない、気さくな人である。

知り合って直ぐに、気安く話をするようになり、短期間ではあったが、スタジオで会うの

が楽しみだった。遠い岡山から通っていた彼は。俳優に成りたい強い願望を持っていた。ある日、レッスンが始まる前に、トイレに行く通路で出くわした。荒井監督に向かつて、監督、「暴れん坊將軍に、出してくださいよ」と、真顔でお願いをしていた事があった。

「安ちゃん、最近！何か出たん、撮影現場へ行ってる」と、案じて聞くと、安ちゃんは。

「今日が久振りや、遠いから、事務所も声を掛けてくれへん、この仕事で食っていけたらええねんけど、金稼ぎに今、掃除屋のバイトをやってる。家族にも見放されて、飯もろくに用意してくれへん、梅干だけで食うてる。娘は口も利かんし、つまはじきにされとる」涙ぐましい話だ。「それは辛いな、男の仕事としては。好きなこととして食えたらええけど、この世界はそう簡単には行かへんで、キツカケ掴むまで頑張るしかない、けど……」

「そこに行くまでがなあ、年も年やし、いつまでも、エキストラばっかりやつとれんし」安ちゃんにしては、珍しく弱音を吐いた。私はただ頷いて、「今日はどうやって来たん？」と、話を交えた。「朝の早い集合時間に間に合うかどうか判らんから、昨日の晩に車を走らせて着いて、近くで泊まったんや、ほら、あそこ」と、言って指を差した。

察するに、車中泊をしたのだろう。「大変やな、安いギヤラで、大きな出費」

冗談まじりでチャカスト、例のくつたくのない笑顔が返って来た。

そうこうしていると、ADさんが、集合の手招きをして、やつとお声が掛かった。

『正月特番「お礼は見てのお帰り」の撮影開始』

「皆さん、エレベーターで上に上がって下さい」若いスタッフの命令口調に促がされる。通天閣のエレベーターは古くて怖い、スピードが遅い、ゆっくりゆっくりと上がっていく、撮影機材を慌ただしく運び入れるスタッフ、展望台の広場で撮影の準備が始まった。

今日の撮影では。スタントマンの男女もスタンバイしている。

スタントマンは危険なシーンで本人の代わりに演じる。高い所での撮影があるようだ。

主役、あるいは出演者が、万一怪我などしたら大変だ。撮影が続行できなくなり、製作に支障をきたし、中止になるような事にでもなったら万事休止だ。

代役のスタントマンは。危険な場所での、危険な演技を、日頃から猛訓練し、鍛えた体で演技をする凄いなさものだ。やがて撮影シーンの説明が始まった。

「このシーンは、関係者以外立入り禁止のドアの向こうで事件が起きています。

皆さんは何が起ったか見ようとすると野次馬です。ドアの向こうを覗こうとしています。」
野次馬役のエキストラは。みんなうんうんと頭を動かし、適当に聞いている。

いよいよリーハの開始だ「それではドアの前に集まって一度やってみて下さい」

「432ハイ スタート」の合図で「何かあったん」「どうしたの」「何?」「どうしたん」

などと口々に出して大騒ぎをして、押し合いへし合いドアの向こうを覗き込むようにする。同じNACの青年部のガードマン役の二人が、「そんなに押さないように、もう少しドアから離れて」嬉しそうに演じている。NACの青年部の二人、ガードマンの格好に扮しているがキャスティングは、バツチリ二人ともやけに征服が似合っている。

「一体何事やという雰囲気を出して下さい」と、ダメダシを言われている。その時に！。私の携帯から、スカボロー・フェアのメロデーが鳴り出した。

NHKの朝ドラ『甘辛しゃん』の開始時刻に合わせて、電源をオートONにセットしていたので鳴ったのだ。「おい、誰やあく携帯電話切っとけよ」これはまずいなあと思ったが誰のが鳴っているのかな？と知らん振りを通して鳴り止むのを待った。

「はい、もう一度」「本番 432ハイスタート」やり直しは上手く行ったようだ。

私と安ちゃんは窓際で外界を眺め、「車を停めたのは。高速道路のあの下辺りやけどな？」
「車あるか」「見えへんな」「やばいなあ、レッカー車で、持って行かれたら高うつくでえ」などと、こそこそと喋っていた。野次馬の最後尾で、カメラアングルから外れているので、フレイムインはないだろうと想定していた。

『鈴木京香が同じ現場に現る』

そうこうしていると主役の鈴木さんが現われた。テレビでしか見たことのない、スターが私の直ぐ目の前に居る。ただ見惚れていた。演出家が鈴木さんに動きを付ける、野次馬の間を走ってドアの入口に入るまでの段取りを説明する。「はい、リハーサル開始」鈴木さんが急いで走って来て人をかき分けるようにしてドアまで行く「チット待つてえ」の声おぼちゃん達が張り切り過ぎて邪魔になったのである、立つ位置を決め通る所を少し開けるように指示が出る。鈴木さんも確認する、頷いている彼女、「リハーサル、スタート」群衆役のエキストラがドアの入口に集まり中の様子を何事か？と覗こうとする。鈴木さんが血相を変えて走ってくる、野次馬をかき分けドアの中へ飛び込んで行く。私はその成り行きを見ているだけだったが、今度はリハーサルが上手く行ったようだ。「はい、本番」

「本番」スタッフ全員に声をかけ緊張が走る。一瞬の静寂シーンとなつて：「スタート」カチンコが鳴る。エキストラがわいわい動き始める、主役が動く（演じる）「ハイOK」モニターでチェックしてOKがでた。「はい、ここでのシーンは終わりました。下に降りて待つていて下さい。」私達エキストラが出演する。通天閣での撮影は終わり、地上に降りて、そこから辺で、それぞれがたむろして、駄べつていた。実はこれからが大変だった。

通天閣を見上げると、展望台の窓のさらに上にある高い所、真下が透けて見える金網状の床と手すりだけの場所に、カメラマンとスタッフとスタントマンの六人が立っている。

「怖いなあなんとこ」指を差して皆口々に言つて見上げている。高所恐怖症だったらとてもじゃないが立つていられない場所だ。次の撮影の支持が出るまで待つことになった。ロケバスから朝食の弁当が下ろされ、缶入りのお茶と一緒にエキストラの皆に配られた。てんでんばらばらになつて弁当を広げる。私と安ちゃんは。開店前のパチンコ屋の店先に腰を下ろして食べることにした。老若男女、三十人程が、道行く人や車の往来する場所です弁当を広げてパクついている。異様な光景に、この人たちは何やる？、通る人、通る人がいぶかしげな目で見る。こっちは、恥じてなんぼのエキストラ、半笑いを浮かべて返す。パンを食べたせいか食欲が無い、おにぎり一個と、オカズを少々食べて後は残した。

「もういらんの、食べてええか、貰うで」と、言つて安ちゃんがペロつと全たいらげた。安ちゃんは。よつぽどお腹が空いていたのだろう。満足そうな顔が印象的だった。

『通天閣の下でロケ』（そのた大勢ではくだらねえ）

サブディレクターがトランシーバー片手にやつて来て、「皆さん集まって下さい」通天閣を見上げる位置にエキストラを集めた。「あの、日立のマークの一寸左上を見て下さい、あの上から今、まさに飛び降りようとしている男が居ます。それに向かつて叫んで下さい」それを聞いて「エッ、なんや馬鹿馬鹿しい、何をやらすねん」と思った。

「それでは。やって見ましよう。ハイ」

みんな、それぞれに声を出すのが、気が入ってないから上に届くほど迫力が出ていない、

「止めるー」「危ないやないか」「誰か飛び降りようとしてるでエー」

「何をするんや、止めんか」「キヤー、怖い」

それぞれが思いついたことを口走っている。(エキストラはダルイね)

練習が終わり、上から撮ったカメラリハからの指示をトランシーバーで受ける。

エキストラの立つ位置を、もっと左に寄れとか、私達おっさん四人は。少し後ろに下がれ

とか言ってくる。「皆が一緒になって指を差したら不自然やから、差す人、手を上げる人、

両手を振る人、しぐさに変化をつけるように」と、上からトランシーバーで注文が出る。

そして又練習、リハーサルをやっている間に、見る見る周りに、人だかりが増えていく、

後ろを振り向くと、奇異な眼差しで見ている。街中でのロケは、恥ずかしいな、大変や、

主役なら意気を感じてやれると思うけど、野次馬の役では。物笑いになるだけだ。

「俺達エキストラは。恥じてなんぼや」と、また呟いてみた。

撮影の方はどうか、こんなもんやろといったところでOKが出た。

「今の立った位置を覚えておいて下さいね」上でのシーンの撮影がすむまでそこら辺で待つことになった。座る場所もない、道路からパチン小屋迄の広場に、若い連中おばさん達

おっさん達が、数人づつの固まりになって、何やら話し合って、時間つぶしをしている。野次馬役のエキストラの私達の、撮影の様子を見ていた。地元の野次馬の人達が興味深々、「何してんの、何撮ってるの」と、話しかけてくる。適当にロケの内容を喋っているが、なんとなく、相手をするのを避けたい心境になってしまう。

その一方で、安ちゃんは。すっかり地元の人達と打ち解け、我が意を得たりとばかりに、ご満悦でモテモテ振りを發揮している、今は囲まれてスターになった気分であっている。こっちはすっかり待ちくたびれて気持ちのやり場がない、ときどき上の撮影状況を見る、スタントマンが飛び降りようと、身を柵から乗り出したり、それを阻止しようとなだめているよう女性スタントとの絡み、飛び降りを説得をしているシーンを撮っているようだ。撮影が順調に行っていないようだ。おしているようだ。(撮影の予定時間が伸びること)足場が悪いし狭い場所で一カットづつ撮っていくのだから大変だと思ふ。

ロケを見ている観衆の中に双眼鏡を覗いて上の様子を見ているご夫婦がいた。私は側に行つて「すみません、それ一寸貸して頂けませんか」どうぞと快く貸してくれた。双眼鏡を覗くと、高所恐怖症だったらとてもあの場所で立って動いて演技など出来ない、下から見ているだけでも怖い、下がスケルトン状態の金網の上である。

後で知つたが、鈴木京香さんが演じる主人公の女性刑事は高所恐怖症の人物設定だった。

俳優の仕事を現場で見ていると大変だ、画面で見るカッコ良さとは少しかけ離れている。ディレクターにああして、こうしてと云われ一つのシーンを撮るのに、カット、カットでこま切れに映していく、リハと本番ダメダシが出ては、撮り直す撮影は時間と手間が掛る。ヨーイスタートのカチンコには数字が書いてある。台本にもその数字が書き込まれている。動きのチェックも書き込む、編集の時にその番号を見て台本通りに構成するのだ。

今日のような場合、台本通り撮っていたら上へ下へと大変なことになる。上での撮影が全て終わるまで待たなければならぬ、エキストラも辛い、俳優も実際は辛い仕事です。待つことに耐え、人前で恥じをし、指示に耐え、集中力もある、ディレクターの思惑、演出家のイメージ、それをその場で発揮できる演技力が無ければいけない、俳優の仕事は演じることが好きでなければ出来ない。

「嗚呼、大変だ」かといって演技が好きなんですだけでは、自己満足に終わってしまう。演じている事がモロに出たんでは良い役者とは言えない。

俳優になりたい、芸能人になりたい、有名になりたい、そんな夢を叶える為に、この業界で頑張っているが、仕事が全く無くて、アルバイトをしながら、芸能界を目指している。

第一線に活躍している人は。カリスマで、何か不思議な魅力があり秀でた人達だ。

そして地道に努力を積み重ねた人、それにその人の運だ、業界関係者の誰かに、目をつけ

て貰わないと前に進まない、自力に芸の才能があると思っても、それは一人善がりて終わる、他力本願的というか、周囲の人脈にも恵まれないと、なかなか使って貰えない、勿論だが自分で自分を売り込むことも必要だ。役者冥利に尽きるなんて生易しくはない。

私と先輩と同期の松倉さん、三者会談で時間を潰す。それぞれエキストラの仕事はちよくちよく有るようだ。たまには断ったりするが、「撮影が終わるまでの緊張感、OKが出てお疲れさまでしたと、開放された瞬間は！、何とも言えない感覚だよね」「何かを成し得た喜びと似てるね」「うん、それで病み付きになるんだな」「日当安いのに」「俺なんか、毎回大赤字や衣装代で」「ツープーターン用意して行って下さいって、言うけど一つでいけるで」「今日かて、ほら、スーツも一応は用意して来たけどいらへんで」「事務所は人材派遣センターや」「そうやな」「ロケ現場に人を送ってピンはねして儲けとる」たまにくる仕事は、エキストラばかりなのでみんな不満を抱いているのである。ほとんどが本業を持っていないからこんな事をしている。一年もすれば半分以上は去って行く。

何か夢のある仕事をしたい、テレビや映画に出たい、タレントに成りたいという願いを、無残にも打ち砕かれ辞めていく、挫折し「やっとなんは」と諦め悔しい思いをするだろう。人の夢を食い物にして…と言えない事も無いが…、皆が皆、タレントに成れる訳がない。

私は、その時々を楽しみながら、人生勉強だと思つて、ぼつぼつやつていくつもりだ。立ち話をしていゝうちにお昼になつてしまい、スタッフがまたまた弁当を配りだした。こんどは。パチンコ屋の自転車置き場の周辺で座れる所を見つけ、そこで弁当を広げた。五十を過ぎた。おっさん四人が横並びに座り雑談交じりで飯を食う。

おかしなものだ、とてもじゃないが、こんな場所で、弁当を食べる時間を一人で過ごすことになる。成ると恥ずかしくて耐え切れないだろ。皆で渡れば怖くないじゃないが、四人一緒だと、まるで遠足気分のように、笑いながら人目をはばかりる事なく、平気で食べて居られる。

通りすがりに、私達の方をチラ見する人を、こつちから見返して、反応を見るのも面白い。見返された方が、照れ臭そうに、見て見ぬ振りをして、あらぬ方向に目を逸らす。

やっとお声が掛かった。「はい、集合、先ほどの立ち位置に立つて下さい」

一時になつてようやくエキストラの撮影開始だ。みんなの胸中は計り知れないが、やる気満々張り切つていゝ様に見て取れた。私は深い溜め息と共に「仕方ないやらなきや」と自分に言い聞かせた。「今、上で男が飛び降りようとして居ます」みんな見上げる、周りの本物の野次馬を観ると、同じように口をアングリ開けて、通天閣の上を見ている。

「リハーサル行きます」「ヨーイ」パンと手を叩き合図が出る。

みんな見上げて、「オーイ」「やめろ」「しようもないことすな」「危ない、何やってんねん」

「死ぬ気か」それぞれが、大声で、アドリブの台詞を言う。私は口パクでごまかしていた。上では。飛び降りようとする人を演じるスタントマンが身を乗り出したり、鉄柵に捕まり、足を掛けたりする演技を、スリーパターンに分けて、動きの確認をしているようだ。

いよいよ、通天閣の上と下の野次馬エキストラの撮影、本番が始まった。

上からトランシーバーの合図を待って、メガホンで「ヨーイスタート」

本番ではみんな迫真の演技だった。パニック状態のような危機感が良く出ていたと思う、私の頭の中は半分白け状態であったが、他のエキストラの真剣に演じた姿を見て感動をした嬉しさでニヤリとほくそ笑んだ。

その時、ふと、製作する側の、楽しさ、面白さ、…が、解ったような気がした。

『長〜い撮影現場』

カメラがようやく地上に下りてきた。主役の鈴木さんも疲れた様子も見せずみんなの所へ現れた。大輪の花が咲いたようにその場の雰囲気が一変した。すごいオーラを感じたのは私だけだろうか、女性達は素直に喜びを表す。軽い会釈と笑顔で答える。これから一緒に撮る現場での仲間意識というか、一緒にやるのよお願いね、皆さんも頑張っってね、皆さんようこそ、彼女の社交的スマイルに、ここまで感情が入り込むとは、何の影響なのかな？

人の内面、気持ちまで読み取ろうとするのは悪い癖だ。感じる、感じたまま、感じたこと、感情は複雑だ。人それぞれ受けた感じが、自分の気持ちの持ち様で変わる場合もある。その人自身もその時々変わる。感情とは非常に厄介なしろものだ。

人と人（コミュニケーション）の間に、必ず立ち入ってくる逃れ様の無い葛藤と言える。勿論、悪い事ばかりではない。喜怒哀楽この全て感情（心）があればこそ成せる。

また又、詰まらない事を深読みする病気が出たしまった…。

さてと現場では大きな台が組み立てられた。高さ百五十cm 畳二帖分十人程が上に乗れる。適当に老若男女をピックアップして台に上がってもらおう。

主役の鈴木さんも後から上がる。ローアングルで撮影し、見上げているシーンを撮るのだ。セットされた、台の上ではお尻の品評会だ。下世話だが下で見ていてそう思った。

他のおっさんも、パンツルックのピチットした鈴木京香さんのお尻を見ていたに違いない。

「はい、後ろの貴男、前の貴女と変わって、そこ開けて、京香さん、もう少し右に寄って」「はい、本番」まだまだ撮影は続く。

物語の流れの内の一部、画面ではおそらく数分間で終わるシーンに一日掛かりだ。「フー」武田鉄矢がテレビで語っていた話を思い出した。

「幸せの黄色いハンカチ」のラストシーン、洗濯物を持って立っている倍賞さんに近づく

高倉健さん、それを離れた場所から見守っている武田さん、山田洋次監督は。雲一つ無い、青空をバックに欲しいと言い出し、雲が流れて無くなるまで、高倉健さんはその場から、身動き一つせず、雲が切れるのを長い間、待って待ってあのシーンを撮ったんです。

「思い入れとこだわりは、とどまるところ知らずか……」

監督、ディレクターは、納得と満足するまで色々細かい指示を出したり、撮り直したり、注文つけるのは。良い作品を作る情熱であり、仕事上の責任感であり仕方の無いことだが、なんだか、詳しい訳が分からぬまま、指示されて、やらされている、エキストラは大変だ。

「次は何」ADさんが後ろポケットから、台本を取り出し次の撮影ことを考えている。

背が高く彫りの深い顔は二世風、ヘアースタイルはパーマネント（天然か？）のロング、カッコいい男優が手招きされてやってきた。その格好いい男優と、暫く打合せをしていた。私達の内十五人ほどが、また元の位置に集まるように言われた。

私達が見上げているシーンを撮るようだ。そこに男優が駆けつけ、人垣をかき分けながら前に出て上を見る。気持ち（女性刑事の安否を気づかって）心配そうでないといけない、カメラは斜め左前にセット、リハーサルの開始だ。

一回目、大柄な男優が急いで、野次馬のエキストラをかき分けて、前に出ようとする時に、エキストラの肩にぶつかって、女性が二、三人よろけてNGになる。二回目、「スタート」

こんどは、誰かの足を踏んづけてしまって、NG、すみません踏みましたね、男優が謝りながらスタート地点に戻る、謝り方が大げさなので、みんな大笑い、三回目、「スタート」今度は上手く人垣をかき分けて前に出たと思ったら、「あつ、すみません、貴女の胸にぶつかりましたね」と、言つて、大きな体を二つに折つて、エキストラに謝り倒す。

一部始終を見ていた私達も大笑い「ワツハハア」「あいつおもしろいな、お笑い系いけるで」受けを狙つてやっているリアクション芸ではない、真剣にやつてるから、尚おもしろい、緊張と緩和だ。しかし、ADさんの表情は厳しかった。直ぐに気を取り直し、真剣な顔で、「ハイ本番」声が今までより気合が入り少し大きかったような気がした。

やっとの事でOKが出た。男優はエキストラを見渡すようにして微笑み軽く右手を上げた。エキストラを労つてか、無事に撮り終えたからか解らんが、気さくで気のいい奴に思えた。

「ハイ、集まつて下さい、声だけを頂きますから、先程のように大きな声を出して下さい」街中で空を見て大声で騒ぐのは照れ臭いが、エキストラもプロ意識を持つてやっている、周囲のことなど気にしていない、「恥じてなんぼの世界じゃ」と、又もや口ごもりながら、周りのエキストラの、頑張っている姿を観察しながら、ロパクの演技でごまかしていた。音声さんも、長い棒の先に集音マイクを取り付けたのを持ち上げて、頑張っている。二度、三度繰り返しやらされて、やっとな収録の「OK」がでた。

車にはスペアタイヤがある、写真屋も二回撮る。撮影も押さえと、試し二度撮って置く、万が一のためのスペアなのだ。現場では、セリフの声や物音を、音声さんが取り直すのだ。このシーンには、あれもこれもと、色々欲しい場面が生じて、押えてたいスチエーションが増えてしまう。そのつど、フィルムがたくさん要るし、撮影時間も掛かる。

考えた迷惑通りに撮れていればいいが、編集作業がまた大変だと思う、上手く構成してお茶の間に、オンエア出来る映像が完成するのだ。街中でのロケはまだまだ続く。

少し場所を移して商店街の駐車場の空きスペースでたむろする。おばさん三人が呼ばれて商店街を出た当たりから、通天閣の上で何が起きたのかと小走りで駆け寄るシーンを撮る。次に杏香さんが、商店が並ぶ通りで、おばさんに、何か尋ねているシーンの撮影をする。

エキストラの中からおばさん一人とおっさん一人が選ばれ、ADが二人に演技指導をする。杏香さんが、パンパンに太ったマネージャーを従えて登場、杏香さんは、大分疲れている様子で不満そうなふくれっ面をしている。「まだ撮るのいい加減にしてよ」と言いたげだ。一日中撮影に振り回され、こき使われたら無理もない、店先におばさんが立っている。

こちら側におっさんが待機、向こうに杏香さん、カメラはおっさんの肩をなめる位置にセット、「ヨイイスタート」で双方歩き出しすれ違う時に、おばさんに近づき台詞を言う。マイクを両手で差し上げ音声さんはじっとしている。「今のは三人重なりますから、貴方

(おっさん)は、もう少し先ですれ違おうように、ヨイイで歩き出して下さい」と、監督、今度は上手く撮れたようだ。直ぐにOKが出た。撮影が押しているから、妥協したのか、案外このシーンはスンナリ行つた。

「皆さんこつちへ」反対側の商店街(映画館のある通り)に移動する。
「早く歩いて」と、移動を促すスタッフの声の苛立ちも最高潮に来ている。

突然のご指名で：、私と少し年上の方と二人呼び止められ、私にADさんが「他に着替えを持っていきますか」と、聞かれた「ハイあります」皆と一緒にまとめて置いた手荷物の場所に戻り、グレーのフラノのジャケットを取り出し、急いで着替、「これでいいですか」
「はいOKです」実はこのジャケット、待ち時間の間に、直ぐ近くの紳士服を売っている小さな店に入り、冷やかしの積もりだったのに、安い値段に釣られて衝動買いしたのだ。それがこの場で役に立つとは！、私は思わず肩をすくめて笑った。

映画館の看板が見える向かい側の位置に二人が立たされ、撮影の段取りの説明を受ける。右斜め前方の約5m程離れた位置に杏香さんスタンバイ、カメラは左手からロングで撮るADさんから撮るシーンの受け応えの台詞の説明があつて、いよいよ撮影開始だ。

夕暮れが迫る時間の関係でリハは無い、いきなり「ハイ本番スタート」、京香さんが近づく、

「バイクに乗った少年が通りませんでした」「いいえ見ませんでした」と、言う台詞の前に美人の京香さんを見て会釈をしてしまった。モニターを覗いた監督が大きな声でカメラの横から「挨拶はいらんでえ、頭を下げずに知らんでエ、言うてくれたらいいですよ」と、きついダメダシの声が飛んだ。「知らんでえ」か、どうせこの場面は、何か尋ねているらしい画面が流れて、その場の状況を出す為の台詞は。口の動きだけに過ぎないはず…。

そんな想像を巡らし、二度目の本番を待ち構えた。「ヨーイスタート」私達二人は友達同士何か喋っているような雰囲気だ立っている。京香さんが歩き出す。足早に近づいて来る。

私は。映画の看板を眺めている振りをする。鈴木杏香さんが目の前まで近寄って来て、
「バイクに乗った少年を見かけませんでした」

せ、せ、台詞が微妙に違う。「…知らんなあ」。京香さん、その場を去って行く。「OK」
「みなさんお疲れさま」午後六時近くに、本日の撮影無事終了。

今日の撮影は全部逆の順に撮ったことがお解りだろうか。帰りの電車の中であの緊張した自分を思い出していた。エキストラの中でもちよい役をやらされて満足だった。

鈴木京香と共演したとほらを吹いて自慢したい気がした。

こんなことはあくまでも自分だけの価値観であり自己満足に過ぎないのだ。

興味が無くミーハーでもない人にとっては、たわいなく滑稽なことに見えるだろう。

「何やってんの暇やね」と言われそう。

でも、五十過ぎてこんな体験が出来た事が嬉しい…。

『とうとう歯医者に行かなければならなくなった』

十一時半に予約、嫌な歯医者に行くあつちこつち、がたがきている、いつまで

通えば治療が終わるのか、見当がつかないから、尚更のこと気が重い。歯医者 of 医師は、私にゴルフを習っている生徒である。知り合いだから変に気を使って、やりにくそうだ。

遠慮がちに氣遣って、喋られると、こつちもついつい肩苦しい（しゃつちよこぼった）口調になってしまう。木曜日は歯医者 is 休みだから同業の連中とよくゴルフに行く。

「昨日のゴルフはどうやった」と、私がゴルフの話を持ち出すと、「午前のハーフは。OB二発打って四十五、まあええ調子やな思つて、昼からの出だしはドライバーもセカンドもナイスショット、打ち上げのグリーンやったけど、乗ったと思つて、行つて見たら、奥に一寸こぼれていて、ガックリ、そこからの寄せをトップしてしても、グリーンオーバー、バンカーに捕まって、一発で出されへん、それで、カーとなって、多叩きしてしもた」

「うーん、残念やったね」ゴルフの話になると普段の遠慮のないタメ口の喋り方になる。ぐらつく歯をどうするか？困っている様子だ。

「抜くか!」「もちませんか」「もう一寸しつかりしてくれたらな」

「奇麗に掃除して、治療を続け暫く様子を見て、抜かずに治すようにしましょう」。

「解りました。よろしくお願いします」。歯槽膿漏で歯ぐきがさうとう駄目らしい、その後、何とか治したい思いから歯磨き歯ブラシを色々と変えてみた。

『碁会所でのいや々な出来事その①』

この人一手打つのにメツチャ遅いな「ん…?」考えるのが長すぎるのだ。せっかちな私は、とてもじゃないが、付き合い切れない。三手目で「…すみません参りました」と言ったら相手はポカンとしていたが、素知らぬ顔で席を立ってその場を離れた。

後で聞いて知ったが、三手を打つ間に、ゆっくりとたばこを二本もふかしながら打つのはあの人の癖のようなもので、悪気はなかったあのポーズだったのだ。考えていると言うよりも、のんびりと打ちたいタイプなのだ。「あんな遅い人とはもうコリゴリだ」と思った。

『碁会所でのいや々な出来事その②』

「福田さん久し振りですね、打ちましょか」「おう、いいよ」その日は私の方から誘った。以前に何度かお手合わせしたことがある方で。優しそうで人当たりも柔らかいイメージだ

勝敗に拘らずに打てる相手で、私は、彼に好意的な感情を持っていた。

先手を後手を決めるために、互いに石を握る。相手が白石を、何個か掴み盤上に並べる、その石を数えて、奇数か偶数かを、黒石を持った方の数が当たっていれば先手で、外れたら後手になる。相手が上手である場合は。相手が白を持ち、下手は黒を持ち先手になる。

五角の場合は年上が白石を握る。福田さんは白石を握った。私は。黒石を一個だけ握ってそつと、碁盤の上に置いた。福田さんは。碁盤の上に置いた手を広げて、白石を数えた。

「奇数」だったので、当たった。私が黒を持つことになり、先手で打つことが決まった。

「お手柔らかに」軽く会釈を交わす。一手目の黒石を盤上に打った。カツンと音がしても相手は隣の碁が気になるのか、横を向いたままだ。私は。「はい」と、言つて、促した。

それに気づいても、なんら慌てる様子もなく、打つとまた直ぐに、隣の碁を覗き込む、三手目、私は「カツーン」わざと大きな音が出るように、力を込めて黒石を打った。

打った音が聞こえる様に、わざと大きな音を出して打ったのに、彼は気づいてくれない。暫く待つて居ても、こつちを向かない（礼儀に反する、失礼な態度だ）誘った時から隣の勝負を見ていたので、よつぽどその碁が気になるのか横を向いたままだ。「はい」と大きな声で促がすと、「おっ」と言いながらも、詫びる様子もなく向き直し、一寸考え石を置いた。その後は、石を打つ音に反応して、向き直つては打つが繰り返して続いていた。二十五手目、

私の手番だがどう打てばいいか、難しい状況だったので、すぐには打てず、長考になった。その間、福田さんは隣の碁がよつぽど気になるのか、相変わらず横を向いたままである。囲碁を打つ者としての礼儀作法も何も、あったもんじゃねえ、強く打った石音がしても、こつちを向こうとしない、私はイライラしてくる「打ったで」促す声でやつと振り向き、チョツと盤上を見て石を置くと又すぐに横を向く。ムカムカしてきた。

私は石をわざと二個続けて置いた。勿論ルール違反だ。相手の横顔を睨みつけて待った。その目線によりやく気づき、「どこ」と、私の置いた石の位置を聞いたが、囲碁の規則でも答える必要は無い、（ふざけんな、相手の打った石を見もしないで…ボケが）黙っていた。暫く考えて、石を置くや否や又隣の碁を覗く、とうとう私は（ブツツン）「おいコラア」とその声にびっくりした相手は目が飛びださんばかりの顔をして、「どっどっどっどっ」と、言おうとしているのを有無も言わず。「誰と打つてると、思うてるんや、相手が居てこそ、碁が打てるんと違うんか、二度打ちしたのも解らんと、なんや、相手に対して失礼やる」彼の目は点、顔は真っ赤「う、ム」スマンといった顔。怒った私の真意が飲み込めた様子。「横ばつかり向いて、相手に失礼やる」「無…」福田さんは、モノも言わず神妙にしていた。「もう、止めじゃ」と、盤上の石をソソクサと片付けた。大人げない怒りで、バツが悪い。席料を払って帰る間際、「隣の碁を覗く、悪い癖やねん、マナーに、反するわよネエ」と、

お店番をしている席主の奥さんが言った。本人は隣の碁を覗く癖に気づいていないのだ。全く悪気は無かったらしい、そんなことがあった後日、彼が打っている姿を見かけたが、何度も隣を見ようとすると首を必死で元に戻している様子が可笑しかった。

何日か経って、福田さんが、隣の碁を見る癖がなくなっていた。「ん、良かった良かった」

『碁会所でのいやくな出来事その③』

もう一件、碁会所でプチトラブルをやらかしている。我ながら自分の性分が嫌になる。

その場を我慢するか、「用事を忘れとった」などと言って、用事を思い出した振りして

その場を立ち去るとか、利口な大人だったら、当たり障りがないゆるいカーブを投げる。

私は何時も直球を投げてしまう。「あんたと打つのは嫌」「遅いから嫌」「強すぎるから嫌」

「汚いから(碁の内容)嫌」碁会所の人から、相手をすすめてくられても、断ることが多い、

ヘンコでわがままで、短気な性格を直そうと思ってるんだが…。

この日は朝から私の機嫌はすこぶる悪かった。碁会所に着くなり、待ち構えていたかのようになり、「や、やるか」と言われても気がすまない、不動産屋の雇われ社長とは何度もお手合わせしている。相手は鴨が来たとニコニコ顔で誘う「なあ、打とうや」と、執拗に言う。今日はこのおっさんと打てる雰囲気が無いのにと、思いつつ「打とか」渋々席に着いた。

一局目は何とか内容の良い碁が打てたが僅差で私の負け。気を取り直して二局目、相手の言いたい放題の舌戦を我慢しながらも…途中で形勢が悪いので投了した。

三局目、あまりにも調子こいて言いたい放題を抜かすから我慢も限界「プツツーン」

「止めや」盤上の石を崩した。石をしまいながら「お前とは二度と打つか、もう打たん」私より大きなドンガラ（体格）をしたおっさん、顔を真っ赤にし狼狽している。

二人は立ち上がり。「相手の気持ちも考えんと、言いたい放題、吐かすな」「ま、待てや」「お前口が悪いんや」「イヤ、待てて」「…」「俺も、言われたら嫌やねん、解る、解るって」

「ン…」「悪気で言うたん違うさかい、そう怒るなよ、なっ」黙って頷いて、その場を去ろうとする私に、顔を真っ赤にして、「悪かった。スマン」と、頭を下げていた。

半分は意外だったが、口喧嘩で終わった。それ以上口論する気にもなれず、碁会所を出たまゝ必死で謝ってくれたから良いか…、気まずくはなつたけど…。

この人とは、修復出来るなかもしれない、仲直りしようと、心の中で呟き反省をした。

なんぼ相手がどう言おうと「投げや、勝てるか、ハイハイと（急かす）、何処どこ

（と言いながら打った石を見て嘲笑する）なんじゃその手、それではアカンわー」などと
言われても、苛々したら勝負は負け、そして怒った私は大人気のない我儘だった。

不動産屋のおっさんの碁は自分が劣勢だと無口になり、口数が減り、黙って打つが、優勢

になつた途端、言いたいことを言い出し、相手に失礼な暴言を吐くマナーに反する言動が出る悪い癖だ。自分が負けると言い訳（たら、はず）をたらたらと並べ、勝つたら鬼の首でも獲つたように、相手をコケにして、言いたい放題ご託を並べるタイプなのである。勝負事の囲碁は性分が出る。人格が変貌する。人間性が暴露する悪い性分があるのである。そんな彼は相変わらず「雑言悪口」相手を口でののしりながら、碁を楽しんでいる。おっさんの相手になつてにいる人に、聞こえよがしに「こんな口の悪い奴とよう打つなあ」と、言つて冷やかすと、二人同時に私を見上げて笑う。子供じみた笑いで碁に興じている。人それぞれの楽しみ方があるもんだ。とつくづく思う。私も囲碁でいらいらする短気な性格を直して、悠々と打てるような、紳士的態度を身につけなきや。囲碁も修行じゃあ。

『ゴルフを教えるのはナンギなものよ』

NACのスタジオに向かうぎりぎりまで税理士さんのゴルフレッスンをした。六十五を過ぎ尚、向上心を燃やし、上達に励んでいる、ハンデイ十迄行った方だが、最近飛距離が落ちて悩んでいる、小技で何とかスコアはまとめているが、府に落ちないので、今迄に何度かレッスンを受けたが、上手いかなかつたらしい。何とかして上げたい。

「飛ぶようになりませうよ」と、言つて、税理士さんがどうすれば、今よりもシンプルにクラブを速く振り切れるか、秘策を考えては、必死でアドバイスをする。

「悪い癖が身に付いてしまつて、解つていることができない、こんな簡単なことが直らない、解つていて出来ないのが一番たちが悪い」と、悔しがつてボヤク、素振りでチェックをする時はちやんと出来ているのに、ボールがあると打つ時に昔の悪い癖が出てしまう。右腕の使い方がなかなか上手く行かない、肘を後ろに引き上げるトップで右手首の形が

理想の打つ態勢にならない、例えば、のこぎりを引いては押す動作で振ろうとしている。私の説明を理解し、こう振るんだと腕に言い聞かせ、チェックして一生懸命に練習してもぜんぜん直らない、自分のスイングの悪い動きが、頭で把握しきれていないようだ。

運動神経が良い悪いに関係なく、筋肉の動きに対する命令系統は、訓練によつてこの動きが正しいという事が理解出来たら、一連の動きを頭で命令し、繰り返し行えば正しく出来るようになる、私は信じている。そうでなければ教えることが無意味になる。頭が理解しても、運動神経が鈍いと、上達が望めないという事は決してない、考え方の違い、思い違いによる上達のさまたげを解らせて、解り易く的確な表現で説明し、スイングに対する正しい考え方や想い様を指導してやれば、上達すると信じています。

そうでなければスウィングのメカニズムや、ファンダメンタルを教えてあげて、その通り

に出来なかつたら「貴方は駄目、上達はしません」で終わってしまう。

そうになると、このゴルフレッスンの商売は上つたりだ。どう表現し、どう言えば良いのか、どういう仕草や動きで説明すれば解り易いのか、練習が上手く行き、上達させられるのか、飛距離が伸びて、方向性が良くなる。飛んで曲がらない、スイングをマスターさせるには、どう教えれば良いのか？、教える側も色々悩み試行錯誤をする、それが永遠の課題である。

『NACスタジオに行つてレッスンを受ける』

松尾監督と俳優の田中先生の授業だ。松尾先生は「こんきょうじ」を読んで、発生の訓練、明快な発音の練習をする。エロキューション（言い廻し）ハーテック（歯切れ）呼吸（いき）づかいの勉強をした。田中先生は久し振りだった。今日スタジオ入りの人数を胸に付けている名札を見て手帳に書き留めた。男性は、家辺、廣野、木下、清水、村野、松倉、津田、人羅、岡田の九人。女性は、伊田、一位、松本、岡崎、柿田、木村、勢力、米山、中島、和田、菱田、坂本、岡田、田後、中原、塩田、井上、小谷、篠原、田中、比嘉、真田、の二十二二人。何時も遅れて入ってくる西野（男性）私を含めて十四期生三十三名、ほぼ全員が来ていた。授業内容は前に習ったことと、テーマは同じだった。以前、昼の部でやったことと、ダブってしまった。授業運び段取り、言ってる事が全く

カリキュラムが同じなものには驚いた。行き当たりばったりで教えている人とは大違いだ。

「チョツと変わった演技指導」

手揚げカバンを小犬に見立てて何かを表現をする。端の人から順にカバンが手渡され、小犬の様に相手をする。前回と同じだ。始めの内の数人は無言で動きだけでやっている。

「何か、言うてもいいんやで」小声で私は言った。でも気づかない？、先生が止める

「何かセリフを言うてください」始めからやり直し、順にカバンが手渡され、木下の番が回ってきた、彼は「犬、嫌いなんや、あっち行け」投げ出して蹴る。何人か順番が過ぎ、私の手に小犬（カバン）が来た。私は「あらっ、ぐったりしてこの子、じろう

ちやんが蹴ったからや、可哀相に、病院に行きましょ」と、言って、隣の人に渡した。

（みんなケラケラと大笑いした）考えていたことと、違う展開で渡された次の人は、

「病院ですか」と、一瞬とまどったから、又みんなが笑った。彼女はそれを無視して

「わあ、こんな可愛い小犬頂いて嬉しいわ、ヨチヨチ」と、真顔で演じたもんだから、

尚更、みんなの笑いを誘った。続いて次のレッスン課題は椅子を犬小屋だと思つて下さい、

そこには猛犬がいる、どうしてもそこを通らなければならぬ、どうするかを自分で考

え、

どういう演技をするかを考えて、演じて下さい。これはこの前にもやらせられているから、
「今度は上手くやって見せるぞ」私は自信たつぷりほくそ笑んで出番を待っていた。

それぞれその人の個性を出して精一杯やっている。笑わせる人、面白い人、上手いな
と思わせた人など色々だったが、皆、恥ずかしがったり、照れたりしなくなっていた。

『課題を即席で演じて見せる』

「世森さん」「はい」私の出番が来た、宅配便のお兄ちゃん役になって「ぴんぼーん」

「今日はいく宅配です」恐る恐る門扉を開き中に入り、家の玄関まで行こうと歩き出す。

右側に庭があつて犬小屋がある設定「ウーワン」。吠えられ驚き、門扉の外まで逃げ戻る。
もう一度インターホンで「済みません、犬を何とかしてください」

二度目は「ピンポーン」の擬音は言わなかった。暫くして「シャワー浴びているんですか」
(そうだソーセージが車の中にあつたことを思い出した仕草で)車に戻りソーセージを取
ってくる、犬の方に投げて、通り過ぎようとするが失敗。慌てて戻る。

荷物を担いだ格好で、門扉を閉じて待つ、(やがて奥さんが出てきて犬小屋につなが)

脅える事なく堂々と玄関まで行き扉を開け「どうも有り難うございました、ハンコ押し

てください」と、いつて届け状の紙を出す。挨拶をして、立ち去る。犬に「バーカ」と、捨てぜりふを言つて門の外に出る。何とかやったが？もしもこれを舞台で演じていたら、コントにも何もなつてないだろう。下手くそな現時点の自分を卑下しても始まらないが。ああ、明日がどんどん減っていく、良い結果を求め、早く結論を出したがる。そう簡単に演技力は身に付かない。「まだまだ勉強引越しのサカイ」のCMが、何でこんな時に、冗談で気を紛らわしている場合じゃないが、みんな演じ終わつて。さて先生の寸評は？各人の演技内容には細かく触れず、全体的な演技のポイントを説明した。演技者として考えることの説明だ、目的、場所設定、衣装、時間、季節感、天候、小道具、登場人物の設定、年齢、性格、役どころ、以上を与えられた状況の中で表現すること。

私のことで、「ピンポーン」は言わなくていい、ソーセージが何故あつたのか解らんが？と言つてニヤツと笑つた。ピンポーンと言つてしまったことは、電話の時に「プルル」と言つて、落語や漫才でない演技に擬音は必要無いと、指摘されたことを思い出していた。だから、二度目はインターホンを押す格好だけにしたのだが、指摘されたのは納得している。私は自惚れやさんだから、何かと私に言つてくれるのは、目を掛けているからだろうと、思い込みの激しい私は勝手にそう解釈して、指摘されたことを、少し喜んだのだった。

いつでもいい方に取れば、気分が楽でいいんだけど、実は、打たれ弱い面もあるんです。

『竹内 力主演のミニミの帝王の撮影現場』

心齋橋ビブレビル前に七時四十五分に集合、スーツ姿で、早朝五時起き、JR猪名寺駅五時五十五分、御堂筋線で難波駅、歩いて四、五分御堂筋を渡ってビブレに着く、どこかの撮影現場でお会いしたことの有る、NACのゴールドシニアのおっさんがほとんど同時にやって来た。「お早うございます、早いですね」「おはございます」返事は帰ってきたが、そっけない、私が言うのも何だが、どう見てもただの田舎のおっさんにしか見えない風体、背広はよれよれ靴は合成皮、眼鏡もダサイ、しかし、エキストラに求めているものは、

撮影状況に応じた普通の一般人なのだから、この人はピッタシ可も思わないと思った。二人つきりなので色々話しかけるが、いっこうに乗ってこない、あっちうろろう、こっちうろろう、歩道やビルの近くを動き廻る、やがて他の人たちも集まって来た。

NAC青年部の一人が今日の引率者である。マネージャーは他所の現場に出向いている。十二月は。撮影も大詰めで、製作に追い廻されていて大忙し、エキストラの仕事も多い、実は八日に誠抄納言死すの、撮影が入っていたが集合時間が、朝の六時四十五分、余りにも早い集合時間だったので、その時間に着くのは無理だと言ってキャンセルしたのであ

る。

行くのが億劫になつて断つたのだが、その日は、朝早くから大雨で行かなくて正解だった。参加者の点呼が済み、寒いビルの前で肩をすぼめ待つ、冷たいコンクリートの歩道の上で二十人ぐらいがたむろして待つて居る。足もとから全身が冷えてくる「まだかいな」苛々するが、誰も文句は言えない待つのも仕事の内だから、八時を廻つてようやく、目付きの悪いガツチリした体格の男が近づいて来た。皆一斉に「お早う御座います」その男は顎を少し突き出し首をすくめ「おはよう……ざいまゝす」皆一斉に「宜しく願ひします」

又軽く顎を下にした。それを見て「挨拶ぐらいちゃんさせえよ」と、むかつ腹が立った。「着いて来て下さい」ぼそつと、つつけんどの言つて歩き出した。人見知りか、シャイな野郎なんだろう口数が少ないのもそのせいなのかも知れない、思い様を変えたら気にならなくなった。ぞろぞろとその男の後ろを着いて行くと、汚い雑居ビルに着いた。居酒屋やスナックやクラブなど水商売の店ばかりが入っている貸しビルに着いた。

入り口付近から狭い通路の奥まで、二十人ほどが一列に並んで暫く待った。

スタッフが来て、青年部を四人指名して連れて行く、直ぐ横の地下一階に降りて行つた。やがて、残されていた人達も着いて来るように言われ、先ほどよりも真新しい隣のビルの三階まで上がらされ、階段と狭い踊り場で、「暫くここで待つて下さい」との指示。

集合時間から撮影が始まるまで何度も待たされる。「エキストラを何だと思ってるのだ」。「大の大人だぞ、それもええ年した」。「バカにすな、なめとんか、扱い方が悪すぎるぞ」などと、誰一人として文句は言わない、立場が弱いから我慢するしかない、それにしてもこのようなエキストラの扱い方は許せない。業界の偉い人が改革すべきだとつくづく思う。「はい、こつちです、入って下さい」。ようやく撮影現場に案内された。入ってびっくり！ ぞろぞろと出てきたのは、なんとニューハーフばかり、はだか天国という店であった。

『ニューハーフ店で撮影』

こんな処に来たのは初めてで、少し戸惑いながらソファーに座って待った。やれやれやつと撮影が始まりそうだ。「二服でもするか」みんなの顔が先ほどまでと違って、生き生きしてきた。スタッフ全員が撮影器材を店内に運んでいる。店内は人でごった返し、撮影の準備におおわらわだ。ママらしき人が奥から出て来た。遠目では、すつごいべっぴんさんに見えた。スタッフや皆と挨拶を交わす。「よろしくお願いします」

スタッフは、撮影場所を提供してくれたママに、丁寧な挨拶をする。照明、カメラのセットが出来たようだ。ようやくエキストラの座る配置の指示が出る。奥からなんと八人もニューハーフが出て来た。本当は男なのか？ 胸も出てるし女性にしか見えない、何て

言つたらいいか？！、マイツタナ、奇麗な女性を見て心がときめくのは、微妙に違う。

「その二人はここに座つて」「その三人、そつちに」アバウトな感じだが、とりあえず次々と座らせて、店の雰囲気が出るようにする。ウメちゃん（芸能人）と若手俳優一人がカメラの前のボックス席に座る。ママと三人女性が間に入る。エキストラの傍らにも女性が座る。私の左横にもニューハーフが来た。「わたし何々ですよろしく」と言つたが、覚える気もなく「宜しく」とだけ言つた。カメラにどう写っているか、客に扮したエキストラのチェックだ。「ええつと、その人、もう少し寄つて」まるで物を扱うかのように指示を出す。座る場所が決まったら演出だ。客に成つたつもりになつて、雰囲気を出さなければいけない。ADさんが、各テーブルに廻つて、ああしろ、こうしろと、その場の振る舞い方を説明する。私達のボックスは、右隣にれいのめがねのおっさんで、左がニューハーフの彼女、彼女の隣が青年部の男、仕事が終わつた会社帰りの、部長と課長という設定だ。リハーサル前の演出が始まつた。ヨイイスタートで、ニューハーフ嬢と青年とが抱き合う、ボーイが来る、私がボトルを注文する仕草、部長がハーフ嬢の太股を手を伸ばして触る、ハーフ嬢がどこ触つてんのよここよと、言つてふざけ合う、部長も好きだねえと口パク。水割りを飲んでる格好、青年がトイレに立つ、部長がまた触るまで、やることは決まつた。演技というよりも、飲んでる時の客の再現であるが、自然にやることは難しい。ようは、

普段のお客に成りきればいい訳だが……？。

この日の主演者とハーフ嬢が、シーンの説明を受ける。会話（台詞）の内容を合わせる。ダイレクターが言い廻しを変えたり言葉の表現を変えたり、繰り返しセリフの言い回しの練習を何度もさせられている。どうやらこれで行くこうと決まったようだ。

いよいよリハーサル開始だ。

「ハイ、リハーサル」その瞬間、隣のめがねのおっさんはここぞとばかり別人になった。スケベな客を見事に演じている。地が出ているのか、触らないと損みたいのに、今とばかりにニューハーフの太ももをさすりまくっている。今は営業中でもないのに、嫌な顔を一つ見せずに彼女は応じている。ハーフ嬢の対応は、何時ものことと慣れたもので、嫌悪感をお首にも出さず、おっさんを傷つけないようにあしらう。私は横に居て、過剰過ぎる悪乗りのおっさんの演技に呆れてしまった。あれを演技と言えるかどうか……?!。

リハーサルを繰り返して、ダイレクターが、セリフの言い方やアクセントや発声の強弱など色々と指示を出す。セリフの発声には執拗に拘りがあって、何度も言い直させている。日頃使う何でもない言葉が、言い方によって、ニュワンスがコロッと変わってしまう。セリフ一つでも難しいものだ。「はい、本番」「OK」チェック、映像はOKのようだ。

しかし演出家から、ハーフ嬢にダメダシが出た。「おかま、マカオ、おかま、マカオ、

マカオのときに、乗り降りでお才を強く言つて下さい」ハーフ嬢と若手俳優が、言い方を練習する。「おかま、マカオ、おかま、マカオ」「その調子！」そして再び本番開始！。

「本番カチン」カメラが回る。私達の席でもフロアディレクターの指示通り演技をする。おっさんは、今だとばかりに、私の前に身を乗り出して、ハーフ嬢の太股を撫でる。

ニタニタ笑い、露骨に触る、何とも言えない名演技だ。だんだんエスカレートする。ミニスカートが捲れ上がる。分厚いレンズの下で、ニタツと眼が異常に笑っている。

私は背もたれに身を預けて、ハーフ嬢の背に左腕を回し左肩にそつと手を置き、おっさんの手と横顔を見ている。こんなシーンでは声を出してはイケナイ、ロパクで演技をして、その場の雰囲気を出さなければならぬのである。ハーフ嬢が、「メツ、へたくそね」と、ロパクでやり返すと、おっさん、眼鏡の下で目を細くして笑つてごまかす。

私が「ぶちよう、あんたもすきねえ」と、サイレントで言う。笑い声も出さずに笑う。おっさんはいいいキャラしてる。スケベな演技は地でいけそうだ。

二人の間に居る私は、嘔き出しそうになる笑い声を堪えるのに必死だった。

「ハイOKでエース」「チェックしまアース」「OK」「お疲れさまでした」終わった。

この解放感がたまらんね！。「皆さん下に降りて下さい」。ビルの外に出ると、スタツフの一人がすぐ後ろを着いて来た。「みなさん集まって下さい。もう一軒行きます」「ええ〜！」

「これから曾根崎の方に行ってもらいます。曾根崎警察の前の地下道を降りて右側にある警察案内所の待合に一時半に集合、それ迄に昼食を済ませて下さい」「はい、判りました」「エエ、もう一本、撮るんかいな」まだ撮影があるのに弁当が出ないとはケチくさいなあ。「昼飯自分持ちかいな」呟きとボヤキ声が誰とはなしに出る。最寄りの駅に向かってぞろぞろ歩く、時間はたつぷりある、青年部とゴールドの行動が二手に別れだし、電車に乗る頃には、団体行動も崩れ、各人思い思いの別行動を取り出す。頭の中に待ち合わせ時間は一時半を忘れないようにインプリントして、私は気の合った三人と行動を共にして歩いた。

『ニューハーフ店のハシゴ、二軒目での撮影』

「取り合えず、梅田まで出て、曾根崎署の近くで、ゆっくり食事を取りましょうか？」結局、あり余った時間は、待合所で潰すしかなかった。

私は、今話題のアニメ映画、もののけ姫の原作漫画本があったのでそれを読んで過ごした。待ち合わせ時間が近づくにつれて集まってくる。時間が来ても一人現れない、スタッフが迎えに来た。出口付近を捜すが見つからない、仕方なくロケ現場に向かって出発した。

曾根崎商店街を通り抜け左に曲がり着いた処は、ジャック&ベティ、ニューハーフの店だ。この店は噂で聞いて知っていた。「ジャック&ベティこってここか！」店内に入っていく

と、

ほとんど撮影の準備が出来ている。邪魔にならないように、入口付近の席に腰を降ろした。たばこを吸いながら暫く待つ、フロアディレクターが、エキストラの座る席を段取りする。「二人はアベック、あなた達は会社の同僚ね、この席に」と、配置を決める。

このシーンの撮影は、スリーカットに別けて撮った。

まずおかま役のウメちゃんが、舞台でシヨールをする。それを見ている。お客になりすましのエキストラと、色気たっぷりに腰をくねらせて踊るウメちゃんを撮る。

次は、ニューハーフ嬢が、一人で踊るカット、シヨールが始まったら「愛ちゃん」「愛ちゃん」と声を掛けているシーンを撮る。そして最後にハーフ嬢が五人舞台に出てシヨールをする。五人の中のお目当ての子の名を叫ぶ「リナちゃん」とか「マイちゃん」などと大声で叫ぶ。私達は鏡に映っているだけだ。そのシヨールの合間に、どういう役かは解らないが石野真子さんが登場し、入口付近に立って、中の様子を伺っているシーンを撮る。

以上のシーン3カットの撮影だ。この撮影は七時まで掛かった。

それが短いのか？長いのか？、私には判らないが、たった十五秒のCMを撮影するのに、一日掛かる事がざらにあると聞いている。大勢の人に見て貰う映像を撮っている訳だから、細部に渡って気をくばり、写る物から人物、全てが完璧な内容で、納得のいく作品でな

くてはならない。不必要、不自然なもの、光、音、声、人の動き全てに完璧を追求し、拘る。妥協が許されない、幾らでも撮影は続くだろう。100%の出来だ、「よし、これで良い」と、判断してやつとOKが出る。現場は緊迫した空気と緊張感が充満する。

ディレクターの仕事はあくまで撮影の段取り（演出のコンテ）をする役目であり、現場のキーマンはカメラマンである。カチンコが鳴ったらカメラマンの技術、腕に全てを託す。カメラマンの一言で撮り方が変わる場合もある。撮影現場を経験してから、テレビや映画のワンシーン、ワンカットを興味深く見るようになっていた。

1カット目、ウメちゃんのダンスの振付はその場であっただと話し合ってる。

黒い鳥の羽で出来たシヨールを首に巻、黒のブラジャーとハイレグ、ランジェリーの様な衣装、付けまつ毛に、厚化粧、女装のウメちゃん、大柄だけに異様だ。自分でアドリブで振りつけて踊る、彼は踊り慣れたもので、身のこなしが様に成っている。ストリップパールの様な挑発的な踊りだ、ダンサーの動きを即興で創作しながら踊ってみせる。それを見て、ディレクターが「それいいな、いいよ、それで行こう」舞台中央の高い椅子に手をつけて、後ろ向きになって、お尻を突き出し左右に腰をくねらせ、セクシイに踊って見せる、時折、衣装の下から白い下着がちらつくので、指で押し込んで隠す。ダンスの打合せが出来た。

ことの成り行きを、舞台下手サイドのボックス席から私は見ていた。その前に座る場所

が

決まった時、一寸したいざこざがあった。四人掛けのボックス席、舞台寄りに岡本さん、右隣が私、私の前に例のおっさん、その右隣に栩野さんが座った。

私から見て左手が舞台で、舞台の上手、入口付近の通路にカメラを設置。私達が写ったとしても、ダンサー役のウメちゃん越しに、わずか横顔が写るくらいだろう。席に着くや否や、例のメガネのおっさん、「俺が写らんやないか」「どこ座っても一緒や」「カメラの位置あそこやで」照明が眩しいばかりに照らしている。確かに栩野さんがかぶって、おっさんは影になっている。いじけて「……何か眩くおっさんに「変わるか」と、私が言ったら、「いい」おっさん拗ねて、黙って横のボックスに移った。三人顔を見合わせて、含み笑い「変なやつちや、すねてしもたで」「まるで子供やな」そのシーンの撮影が終わった。

2カット目、リハーサルで「愛ちゃん」の掛け声が途切れて間が開いた時「途切れずに交互に声を掛けて下さい」と、ダメダシと注意があったにもかかわらず、本番になって、掛け声が尻すぼみになり、その場の雰囲気は白けた。私はこれはマズイナと思った矢先、雷が落ちた。「お前らやる気あんのか」、しっかりと声出さんかい、お金もろてるんやろう」そこまで言うかと思えるような言葉で、監督は声を荒げた。そして、リハーサル二度目、

その時、スタッフも模範を示すように一緒に、「アイチャーン」と、大声で叫んでいた。「今の調子で」そして本番、半分やけになってみんな頑張った。「OK」このカットは舞台正面から撮影した。私の席は青年部と一緒にシヨールを真つ正面から見る位置だった。カメラは私達の背中後ろにセット、舞台奥の壁は全面鏡張り、私達全員が嬉しそうにシヨールを覗いている顔が鏡に写っていた。カメラのフレームに入っていたのは確かだった。

3カット目、店の奥サイドから、ハーフ嬢五人の踊っているところをナメ越しに、入口の柱にもたれて腕組をして、中の様子を伺う石野さんを撮る。

私は2カット目と同じ場所に居る。私の左手、店の奥側のボックス席が二段になっていて、一段高い所にカメラがセットされた。私の右手側にもボックス席があり、奥のボックスは一段高くなっている。その前に通路があり出入り口が見える。フロアデイレクターが全体の流れを打合せしてから、「ハイやってみまーす」リハーサル前の練習が始まった。ハーフ嬢が舞台に出てくるやいなや、「リナちゃん」やけに大きな声が掛かった。

声の主はメガネのおっさんだった。いつの間にか、石野真子さんの左肩越しの位置に居た。証明のライトが石野真子さんと、おっさんとを照らしている。カメラ目線に陣取った彼は、我が意を得たりとばかりに、人が変わったように、リハーサル中も大張り切りだ。

身を乗り出し手を振り「リナちゃん」の連呼。彼のお蔭か、エキストラ全員盛り上がり、リハーサルから、本番へと順調に進み撮影は終わった。

彼のはしゃぐ姿、無邪気な顔、実に嬉しそうだった。その光景がやけに印象に残った。

一日掛かりの撮影も無事終了。急いでゴルフ練習場に戻る。既に生徒達は練習をしていた。いつもと違う服装を見て「何処かへ行って来た帰りですか」「チョットね」ミナミの帝王の撮影現場に行っていたとは言えない、生徒はそれ以上は聞いてこないが、内心言いたくて、うずうずし「実は、ニューハーフの店でミナミの帝王……喉の奥まで出掛かっているが、現状ではエキストラばかり、とても映画に出たとは言えない。

「ふうん」と、言われるのが落ちだ。レッスンはみっちり十時まで続いた。生徒が打ち終わるまでは、私だけ先上がるような事は滅多にしない、帰り際に、「お疲れさま」

「じゃまた来週」「お願いします」さようならの挨拶を交わしてレッスンは終了する。

「長い一日やったなあ、今夜は、よう寝れるぞ」手帳を見る。明日は祝日か、小学校の先生二人十時からのレッスンは「よし」。

ベッドに身体を横たえると、背中が吸い込まれるように、寝付きが良かった。

『甘辛しゃん』（NHKの朝ドラ全国放送蔵人役に出演？）

十二月も後僅か、NACでもクリスマスマスパーティがあったが参加しなかった。参考までに出演したギャラ、幾らだったか紹介しよう。

山陽電機、企業CM、七月八日、七千二百円。

NHK、生前の予約、EX、四千三百二十円。

平成九年五月から、知らなかった世界に入って、色々な事を経験した。ある意味で人生の勉強にも成っていると思う。

自分の生き甲斐の一つ、人生の糧と成るよう頑張りたい。

「新たな明日に向かって挑戦だ」「仕事が来ますように」

『新年を迎えて』平成十年一月元旦、代わり映えしないお正月だ、何にもする事がない？。

初詣以外に何にもないから正月なのかも、楽しみは、年賀状だ。生徒のメッセージを読む、

「今年こそシングルになるぞ」「不詳な弟子ですが今年も宜しく」「私を見捨てないで」

「ハンディ8になりたい」「90を切りきたいな」等々、みんなに逢えるのは五日からだ。

十五年来初詣出は、近くの東天神社に行っている。近年異変が起きている、昔はそうだったのかも知れないが、阪神大震災が起きた翌年から参拝する人が急激に増えてしまった。

鳥居まで三重、四重になって長蛇の列、境内に入って鈴を鳴らし賽銭箱にお賽銭を入れて二礼二拝一礼、手を合わせ願いを唱え終わり去るまで、行く人帰る人でごった返す。それまでは毎年参拝客はまばらで、すつと行つてさつと参つてすつと帰れた。

どうしてだか真相はつかめないが、まさか、神戸の人が大勢こつちに移り住んだからか？、或いは、神戸方面の神社が地震で壊れ再建中だからか？、どちらも、的はずれな憶測だ。ひよつとするとバブルがはじけてから、京都の伏見稻荷神社や平安神宮、奈良の春日大社に橿原神宮、お伊勢さんと親しまれている伊勢神宮などへ足を伸ばす人が激減し、近くの神社で、地味詣出で済ます人が増えたせいなのかも知れない、案外これが正論かも？。で、今年も0時を回つて新年を迎え、賽銭を持って一人ぶらぶら神社に向かった。

途中、信号機のある交差点の右角が伊丹警察所、向かいが中古車展示場、電灯の光でそこら一帯は明るい、神社に向かつて歩いている道は旧西国街道である。

大きな屋敷や古い家並が残っている。震災後建て直し、今は以前のような面影はないが、日本建築の伝統的な塀と白木の板を使った立派な門構えの家があり、時代劇に出てくる、代官所の役人の家の様な作りだ。暫く行つて稲野小学校、神社に向かつて歩いている人もすれ違う人もまばらだ。少し先の酒屋の角を右曲がれば鳥居まで一直線、百メートル程だ。

曲がった途端、参道までが、人人人の列で一杯だ。驚きとともに、一瞬やられたと思つ

た。最後尾に着いたが「どうしよう」かと参拝をためらった。

「どれくらい掛かりますかね」前の人に訪ねた。「一時間半かな」それを聞いて直ぐに諦め、きびすを返し、とぼとぼ帰った。新春から思いを遂げられず、縁起でも無いと思つたが？、時間をずらして又来ればいいやと、自分に言い聞かせた。

一旦床について、七時過ぎに起きて、顔を洗い出直しの参拝に行く。境内は人がまばらで、出店も閑散としている。家族連れがお参りをしている、子供が「ぼく、やる」と、言つて、つま先立つてすずを鳴らす。下の子が私もとせがむ、父親がダツコして一緒に鳴らす。

何とも微笑ましい。小さな子オが、下から私の顔を見上げ、さも得意気に笑つた。

「ガラン、ガラン」「パン、パン」「一礼二拝一礼、「どうか………お願ひします」

小さなお金で大きなお願い、一寸虫が良すぎたかな？、記帳を済ませ、傍らにある銀色の錫器の急須に入ったお酒を陶器で出来た真白な盃に注いで一気に飲むと、美酒が喉を潤し魂まで清めてくれる。酒には強くないので普段は飲まないが、毎年この一杯が楽しみだ。縁起物の破魔矢を買つて、おみくじを引いてみた。

第三十一番 小吉 このみくじにあう人ははじめ 思い事叶いにくく、急がず 心静かに時を待てば神仏の御加護ありて幸せの路開かれる、と、出た、まざまずかなあゝ

『スタジオでのレッスン』

一月は、八日松尾監督、十五日北見、二十二日荒井監督、二十九日義永照明（カメラマン）毎週真面目にNACのレッスンスタジオに通った。

松尾監督のレッスンは言葉のイントネーションの勉強。北見先生のレッスンは台詞の練習。

「おい一寸、黙って黙ってるよ、何か聞こえないか？、変だな、今たしかに人声が出たようなんだけど、シーツほらやっぱりそうだ、こっちの方だよ、みんなで

手分けして行つて見よう、俺はここを真つ直ぐ行くから君達はそっちから行つて、ほらたしかに、吉田君の声に違くない！気をつけてな」（山中で道に迷った友人を探す）

この台詞を一人づつ立つて、アフレコのように、台詞を言つて、登場人物を表現する。その場面をイメージして台詞を喋る。何度もダメダシが出て繰り返し言い直させられる。

まず「おい」の言い方だが、山中で、五、六人で探し歩いてるとき、それを静止させる。「おい」は、聞いている先生が山中での「おい」に聞こえないと駄目、次は女性の「ねえ」

であるが、北見先生は何度も注意説明をして言い直しをさせる。

生徒が「ねえ」と言うと、先生は「怒ってるんか？」と、ツッコミ返す。生徒「ねえ」

「うん、甘えているように聞こえるな」生徒「ネエ」先生「もう一寸」生徒「ねえ」

先生「うん、うん、その感じ」「ほら」はもつと感情を込めて、嬉しさを出すように。

「気をつけてな」別れ際の気をつけてな、とは違います、その場をはなれるが、無事戻ってくるように気づかった声掛けであるからその気になってください。

三周目やつと最後に「良くなりましたよ」北見先生にほめられるなんて…、

「うれしい」その時は夢中になってやれた、自分が山の中に入っている感じがした。

『時代劇のレッスン』

荒井監督は、股旅ものだ。(渡世人) 追分の修五郎

先生がプリントの台詞を

通して読んだ後、一人二ページづつ読む、何度か順番に読んで、物語の全体の流れと、発声の練習をした。渡世人の言葉(時代劇)が、すごく気に入ってしまった。

「いなさるかい」「ありがとよ」なんて時代劇のセリフがすごく気に入った。

義永照明(カメラマン)は、題して被写体のマナー教室。

写真を撮る予備知識について、カメラのレンズについて、光、フラットライト、

スポットライト、照明について、私と女性一人が被写体(モデル)になって、写真を撮る

撮る。モデルの心得と光の照らし方の説明があった。人物写真は、光を直接向けないで、天井に向けてパラソル、白い物で反射させる、斜め四十五度から照らすのが標準だと教えてくれた。対角線が八十五ミリから百三十五ミリの中望遠で開放にして撮るとドラマ制を出す、ボケて人物が奇麗に写る。レッスンを受けると何でも勉強になる。プロカメラマンに、二枚も写して（ポロライドで）貰って得した気分だった。

スタジオを出て帰りに際、事務所から指令の電話が来た。

明日神戸メリケンパークホテルロビー十五時三十分集合、代議士のパーティーに参加、服装は三月のスーツで、村野さんも一緒だった、明日のことを二人で相談して、

今回は車で行くことにして、スタジオを後にした。いつものように、阪神高速に愛車を走らせて帰る途中で、携帯電話が鳴った。事務所からの電話だった。「ハイ」

「世森さんの携帯ですか？」「はい、そうです」「明日の件ですが変更です」一瞬、撮影が無くなったのかと？ガクツと来たが、「NHKに行つて下さい」「ええ」

NHKメイク室前十四時、蔵人役、ジャージを持参して下さい」「ジャージですか？」「そうです」「トレーナーでも構いません」「はい、了解、OKです」明日はNHKか、

「甘辛しゃん、甘辛しゃん、楽しみやな」何と言っても神戸の仕事は、その他大勢だ、こっちは二人だけ、写る確率が高い、でも足とか背中だけということもあるからな？？エキストラは自然の木や石、草と一緒に、出演者のバック役、製作には欠かせない存在、端役のその又端といった処だ、が、しかし、ワンシーンの撮影でも、作品（ドラマ）の製作に参加できた満足感はある。「明日は、やるでエー」その晩はよく眠れなかった。子供の頃、遠足の前の晩、明日が楽しみで眠れなかったころのことを思い出す。

正直いって興奮と不安、プレッシャーで眠れなかった。優勝目前のプロゴルファーが「夕べ寝不足でね」と、言った様な、格好良い話とは随分違うが、思い込みの激しい性分だから…、トレーナー（ウインブルドンのロゴ入り）は、あったが？おそらく、派手なブランド入りは断られると思って、ジャージを買うことにした。

スポーツ店に行つて見たが値段が高くて止めた。ユニクロでやつと買い求めた。

『NHK朝の連続ドラマに『甘辛しゃん』に出演？』

NHKに充分余裕を持つて着いた。受付嬢に来意を告げ勝手知つたるメイク室へ向かう。メイク室前のソファアに、既に一人座つて待つていた。「お早う御座います」

NACの青年部である事が判った。たばこを吸いながら、初対面同士、話はするが会話が續かない、ギクシヤクして、お互いに気を使いながら聞いたことに答え、又聞く、面白くもない事を一方的に喋られるのも困ったものだが、場を持たせる会話はもつとつまらない、全く関係の無い人と居る方が楽だ。

そうこうしているともう一人来た彼はゴールドの十五期と言った。初めて会う後輩だ。

何時も現場で会った人の名前を手帳に書き留めているので、「世森です宜しく、すみま

せんがお名前は」「寺岡です」寺岡四十四才と手帳にメモる。寺岡さんとは会話が弾んだ、笑うとき目を細くして目尻にシワをよせ、とても人なつつこい、又一人知り合いが増えた。

「東俳」というタレント事務所から二人、NACから青年部二人に私と寺岡、全部で六人、化粧室前の廊下にあるソファアに座って待つ、「お早う御座います」「おはようございます」製作側からサブディレクターらしい人が来た。「作業着に着替えて下さい」メイク室に入る。

酒蔵人の作業服を各人が受取り、ロッカーを借りるサインをして、ロッカー番号と名前を記入、ジャージに着替え、榊酒造と胸にネーミングのある作業着を着て、その上から榊酒造と書いた防寒着を羽織る。これで蔵人の格好に成った。

テレビで見ていたドラマの蔵人に今から私が成るわけだ。

全国放送だから、もし田舎で見た兄達や親戚の人が、私が写って居るのに気づいたら驚くだろうな、おやじとおふくろが生きていたらな、見せたかったな…、などと考えていた。みんなの着替えが済んでソファアにまた座る暫くしてサブDが来て、演出のコンテを説明し始める、「震災の後、お酒が蔵に無事残っています。その酒を出荷する事になりました。蔵からお酒を運び出しますが、泉ちゃんが待つてエ〜と言って止めに入り、言い合いになるシーンを撮ります」珍しく細かい説明で、真面目そうなADちゃん。「はい、解りました」神妙な面持ちで聞いている。「待たせて済みませんが、もうワンシーン撮り終わったら呼びに来ます、それまでお待ち下さい」一生懸命、一言一言、丁寧に喋るサブDさんであった。若いけど仕事に関してはしっかりしている、私のようなおっちょこちよいでは製作の仕事は無理だろうな…。「フアーア」出待ちに疲れて、アクビが出だした。

あれから何時間経っただろう、話をするのも疲れた。廊下の長椅子で長時間待たされた。「もう六時前か」「おしてるな、まだかな」「待つのも仕事か？」エキストラはツライ。

先ほどのサブDがやつと出て来た。「お待たせしました。つき撮りますが、撮影の前に食事を済ませて来て下さい」「エッ」他のスタッフや出演者は出て来ない、食事抜きなのか？。

とりあえず地下の食堂へ、六人がただらと歩いて向かう、今日で三度目だから、食堂

のセルフサービスにも慣れたもの、NHKの職員並みのだんどりでテーブルに着く、寺岡さんと喋りながら食事を済ませ、廊下をウダウダと話しながらメイク室前に戻ると、紅萬子先生が喫茶室から出て来たのと、ぱったり鉢合わせ、先生は珈琲を飲んだ後だった。

「一緒に飲みたかったな」「今度コーヒーおごるわ」「何おっしゃいますコーヒー代ぐらい出させてくださいよ」「二人同時に、「小銭は任して」顔を見合わせそう言つて笑い合った。

「お疲れさまです」と、別れる。紅萬子先生も甘辛しゃんの収録に来ていたのだった。そしてまた、メイク室の入口に向かつて、左手にあるソファーに腰かけて待った。

「スタジオに入ります、着いてきて下さい」「ああやれやれ」「おつ、やつと出番か」

ようやくお声が掛かった。疲れてやや腰が重い、メイク室に入り下に降りると、休憩所に古い長椅子があつて右にトイレ、今まではここまですしか入ったことがなかったが、もう一階降りてそう広くない廊下を突き当たって左に入ると、そこには毎朝テレビで見ていた酒蔵と母屋と納屋がへしやげて崩れ、物の見事に、震災被害あとのセットがあつた。

「凄い」思わず固唾を飲んだ、「暫く、ここで待つて下さい」と、制するように言う。

セットの中央で万作さんと、元杜氏が腰かけて話し合っているシーンを撮っている、万作（大場）の台詞の声が、奇麗に聞こえる、映画のシーンで聞く、あの声と一緒にだった。

「カット」OKが出て小休止だ。二人が私達の待機している側を通る「お疲れさまでし

た」声を掛けると、軽く頭を下げ、「お疲れさま」大場さんは爽やかな笑みで答えてくれた。オールバックに白髪混じりの頭、顔はどうらんを塗って浅黒いが、すつきりした男前だ。いよいよ私達六人もセットに入るように促された。

『震災の後のリアルなセット』

庭の大きなクスノキもある、スタジオ内は土煙で充満している。ときどき小型の散水機で水をかけるが役に立たない、スタツフの中には、マスクやハンカチで、口を覆ったりして居る者もいるが、出演者は誰もそんなことはしていない、あら、よく我慢が出来るな、これがプロ意識か、状況を具体的に説明すると、地道を車が走ると土煙りが上がるが、あのホコリ臭さと同じなのだ。超リアルなセットには本当に驚いた。大道具、小道具さんの技術と舞台美術担当者との結集であろう。実際に阪神大震災で目にした被災にあった後の、古い家が崩れていたのと全く同じ光景だった。やがて、蔵の入口に六人が集められた。

『すったもんだの撮影』

サブDが先ほどの説明に動きを付ける。台本片手に事細かく、一人一人に立つ位置、行

動を指示する、台本には、トがきとセリフそしてそのカットの絵コンテが書いてある。

中庭にお酒のケースが積まれてある、二人（私と寺岡）は、此処に立って、二人（青年部）は入口の、ここです。後の二人、（東俳）は蔵の中でスタンバイ、ヨーイでお酒を持って、スタートで、このお酒が積んである所に置いて下さい。二人は蔵に入っていこうとする、はい、中のふたりお酒を持って出てくる。泉ちゃん（佐藤夕美子）が「待って」と言ってくる。蔵に入ろうとしているのを「おいちよつと」呼び止める。何があつたんや！

どうしたんやと、はい出て来て、ここ、ここから、どうなつたんやろう？といった表情で見る、泉ちゃんの「風が入っただけや」の、セリフの後、二人は、（指を差して、ケースが二段積んである）こっちに移動して、そのビンを持って調べる格好をして下さい」

身振り手振りを織り交ぜて演出をする。一応段取りは飲み込んだ。後は「やるつきやない」

その間に、一方では俳優さん達との打合せだ、チーフディレクターが演出のコンテを出すセツタを履たチーフDがぱたぱたと歩く度にはこりが上がる。

スタジオ内は、こんなにも大勢のスタッフが要るのかと思われるほどの人数と俳優さん達でこつた返し、土ほこりが充滿している、農園で殺虫剤を撒くような、噴霧器で霧状の散水をしたところで何の役にも立っていない、目も鼻も口も開けていられない。

上着の肩はほこりで白くなってきた。私の左側に大きく下まで崩れた屋根の軒先の傍らで、堀ちえみさん、馬淵晴子さん二人が立ったままじつと、演出家の指示を待っている。酒のケースの積み具合をチェックする。横、縦、高さを三段にすると役者とかぶりすぎるので、二段に決まった。リハーサ前にあらゆることを検討する。チーフとサブが、演出のことで、険悪なムードで言い争っている。それも、喧々諤々、互いに言い分を譲らず、真剣なやりとりを繰り返している。

製作に取り組む姿勢の現れだ。サブ「だったら今日の蔵人さん要らないじゃないですか！」チーフ「じゃ、こうすれば良いんだろう。何言ってるんだよ！」緊迫した空気が流れた。何日間も続いた撮影が大詰めに来ている、時間が迫るは気がせくはで、苛々してくるのも無理はない、実直な態度でディレクターの逆鱗に触れないようにしなくちゃと私は思った。このカットはランスルーと言って、通しで撮って見ることになった。

「はい、ちよつとそこ」ダメダシが出た。一回目だから当然チェックをして、立つ位置、動きを変える。泉ちゃんがでて「待って」と、言う台詞の間と蔵人の動きが合わなかったようだ。チーフとサブが又、何か話し合っている。蔵人の動きが緩慢なようなので。

もつと短い動きにしたようだ。結局、私は、しゃがんで置いた格好から、三人は中に入ろうとする中の二人は蔵から出てケースを持って立っている、私は頭の中で反芻した。置いた、戻ろうとする、泉の声、呼び止める、怪訝そうな顔で見る、傍のケースに行く、ビンを持って、中身を見る、撮影は、足ったこれだけである。「リハーサル行きます」

「5、4、3、2、キュー」、バタバタ！俳優さんのセリフ、ほこりのことなど忘れて、演技に夢中になる。「カット」ダメダシが出る、また、NGが出て誰のせいなのか見回す。積み重ねているケースの周りに立つ人の位置を変える、「その人、かぶっているから」手で左に寄るように指図される、メインカメラは積んだ箱から真っ直ぐ私に向いている。通しの最後はカット割り撮る事になり、ビンを調べているシーンが別撮りになった。

「本番」「本番」場内シーンと一瞬の静寂、「スタート」「OK」「チェック、OK」

「フー」一段落、この続きを撮る。みんな啞然とし、困った顔でビンの中を見る。

リハーサルで私の一升ビンが当たる音がした。NGだ！「始めから持っていて下さい」

「はい」二回目は一升ビンを持った状態でリハーサルして、本番は一発で終わった。

「OK」がであと、すかさず、次の撮影の準備に取りかかる。

先ほどの撮影に使った物をあつという間に片付け、中庭の真ん中に、焚き火用の一斗缶を置いて、半円を描くように、一升ビンを六本入れるケースを逆さにして椅子変わりに七

席、傍には、おにぎりとお味噌汁の鍋、カメラが四、五台、次のシーンの用意をしている間、私達は。サブDの説明を聞く、震災後の寒い朝です。火を囲んで炊き出しを食べています。

そこへ、「水が来たぞう」と走ってきます。知らせを聞いて、三人が、声がした方へ向かう。もうワンシーンに出れるんだと思うと嬉しくなってくる。

この気持ち「わかるかな？わかんねえだろうな？」余裕だよ余裕。

「こっち来て座って下さい」六人と俳優一人が腰かける、走って来るのは課長役の人で、おにぎりは堀ちえみさんが配る、お味噌汁は堀ちえみさんの旦那さん役の人が持って来る。ここでまた。サブと口論になる。座る箱の位置でもめている。

チーフ「台本をもう一度よく見ろよ」

サブ（絵コンテを見ながら）「ここ、こうなってるじゃないですか」

チーフ「全体の雰囲気を言ってるんだよ」。結局、箱を二つ後ろに下げて決着が付いた。おにぎりも、味噌汁を入れる発泡スチロール製の丼も、サランラップで覆ってある。

堀ちえみさんがおにぎりを配る。チーフDが旦那さん役の俳優さんに味噌汁を注いで渡す。

二杯目の時に課長さんが走ってくる。リハ前のそれを見て、課長さん役に走ってくる所

を、

実際にやって貰う、その動きを見て「それでいいです」「一回やってみます」リハーサルだ。「キュー」おにぎりを食べる仕草をする。堀さんが「お早う御座います、寒いですね」と、小声で言いなが おにぎりを配っている仕草、旦那さんが二杯目の味噌汁を配ろうとする、課長が走って来て「水が来たぞう」その声を聞いて「おう」「そうか」と言って走って行く。

「はいカット、二人は座ったまま残って、後の三人が走りましょうか」

ここは、こうしよう、あそこは、こうしましょうと、再度チェックが入る。

「もう一度」と、言った時に、二杯目注いでからでは間にあわないので、先に一杯目は渡しといて、注ぎょうとしているところから走ってきます。「それで、行きましょう」

「リハーサル」「スタート」おにぎりを食べ始める格好をする。声を聞いて走って行く。

「カット」「戻って」また席に戻る。また何やらもめて、チーフがサブを怒っているようだ。

そのとき横からタイミンク良く、「一生懸命なんだから、そんなに怒らないで」やんわりと優しい声で堀ちえみさんの旦那さん役が言った。その長い顔を見て私はほくそ笑んだ。

「ハイ、スタート」もう一度、リハーサルが繰り返され、おにぎりを一噛みしただけで、本番が終わった。本番が撮ったが、課長役が、走って来て止まる位置を何度もやり直す。

停止位置に靴のかかとで、ばみる（線を書き印をつけること）。皮靴のせいで、ほこりの

上を滑ってオーバーランをしてしまう、が、わずかなことだ、それでも決まるまで撮り直す。

念のために（オンリーと言って声だけを演じる）「水がきたぞう」息せき切って言う。

チェック、テイク2「OK」が出た。馬淵晴子さんが井戸のふちにじつと立って、落胆、憔悴の顔を演る、そのアップを撮る、一度目撮ってダメダシ、二度目は、チーフDは頭を馬淵晴子さんにペコペコ下げ、もう一度お願いの体、不機嫌そうな顔が良かったのか？

アップ撮りOK、「おう」「そうか」「水か」「来たか」みんなの発声と走ってカメラを横切るところだけを撮る。走って通るを三回もやらされた。

撮影は終わった。今、撮った映像をモニターテレビで見る。私が画面に写っていた。

（ニヤツ、嬉しい）「お疲れさまでした」「お疲れさま」スタッフ全員に挨拶をして帰る。

私達の演技を担当した、サブディレクターは、少し納得の行かない様な疲れた顔に見えた。

「ガンバッテや」と心の内で呟く。「フー」NHKでの撮影の仕事が終わった。

オンエヤーでは十分ほどのワンシーンを撮るのに、一日がかりだった。

明日は一月最後のゴルフレッスン日（土曜日）だ。お母さんはたまにしか来なくなったが、そのお母さんの中学生の息子さんを教えている。彼は現代っ子には珍しく、無口でおとなしいが努力家である。随分スイングが良くなって、ボールが飛ぶように成った。僕の言う事を身に付けようと、懸命になって練習に励む、明日また教えるのが楽しみだ。

『スタジオでレッスン』

二月五日、オーディションの書類審査が通らず撮影はNG、六日第一木曜、松尾監督、井上ひさし作、（アイウエ王） 発声・発音・音声の練習、O印は大きく息を吸うところ、このテキストはよくできていて面白い、子供達にもおすすめの発声練習テキストだ。

- 昔あるところにカタカナという国がありました
- その国の王様アイウエ王は幼い王子を残して、お亡くなりになりました
- そこで腹黒い大臣カクケ公は王子を亡き者にして
- 王位に就こうと悪企みました
- とところが名僧知識の誉れ高い和尚サシスセ僧がそれを知り
- 王子をタチツテ島へ逃がしてやりました
- タチツテ島にはナニヌネ野という広い野原があり

○ このナニヌネ野に住む白髪の仙人がハヒフヘ法という魔法を王子に教えました

○ 王子はさつそく魔法ハヒフヘ法をもつてカキクケ公を打ち破り

○ ラリルレ牢という堅固な牢屋にカキクケ公を幽閉し

○ 自らワイウエ王と名乗りめでたく即位の式典を挙げられました

○ 国民はみなよろこび

○ 喇叭主はラツパをぱびぷ。べばびぶ。べばびぶ。べばびぶ。べば

みんなで読んだ後、一人づつ立って読む、アナウンサーのような訳には行かない。

ロレツが回らない舌が邪魔になる、スラスラ読めない、何度も読んで練習をしなきゃ。

十九日第三木曜、月形先生と荒井監督、両方受けた。

活弁士。大昔の投機無声映画の活動弁士の名文句を読む。

『プリントから名文句を抜粋した文章を朗読する』

「観じ来たれば往時は茫々として夢の如く、国亡びて山河あり、

星移り年変わり春風秋雨ここに二千年、今尚渡る旅人の話歌にのぼる物語。

アントニー・エンド・クレオパトラの一遍は、この場面を以って大団円であります。」

「花の都は巴里かロンドンか、月が鳴いたかほととぎす。さて、ここに御清覧に供しまするは泰西に大活劇、題して「ジゴマ」の一遍であります。」

「前篇はポーリン探偵、後篇はニック・カーターの巻、詳しくは云わぬが花の吉野山、写る画面の回転に……。それは美しい春の宵でした。」

「一刻千金の春の夜や振り揚げば、星月夜の空あざやかに、今を盛りに咲き誇る

桃花の梢を白く残して夜は更ける、白く残して夜は更ける。春や春、春南方のローマンス、題して、南方の判、事全巻の終わりであります。」

「伊豆の山々雪とけて、水量まさる下田の港、吹雪にくれて吹雪にあける、なれぬ獄屋の夜半の風。夢はいずこに巡るらん、男度胸の渡り鳥。鯉名の銀平、全巻の終わり。」

まだまだ、あるがこれくらいにしておこう、活弁の名文句ですなっ！。

『CMのオーディション』

オーディション前日の夜の七時頃、明日の二十時に、NACのスタジオでサカイ引つ越しセンターのCMオーディションがありますという電話が入った。受けることを了承した。翌日の二十日金曜日、注文をしたスーツを受け取りに行く、「LANCEL」のダブルとシングルの二着、カラーシャツとネクタイもコーディネートして貰い張り込んで買った。

さつそく、ダブルのスーツを着こんで、天満のオーディションスタジオに向かった。車を運転しながらCFを考えた。良いのが出来た、大声でセリフを何度も練習する。着く頃には完璧に云えた。「素人では、ダメです。専門家に任せなさい、電話一本で、引越しをサポートする、エキスパートと云えばサカイ引越センターでしょうが」「バッチリ」これをオーディションで絶対言うゾー。

『サカイ引越しセンターのCMオーディション』

NACのスタジオに入ると既に他の連中も来ていた。NACから十二名、他の所属事務所からも何名か来ていた。コマージュ出演のオーディションを受けるのは、始めてである。来ている連中の顔ぶれを見渡す。何人か顔身知りがある。「お早う」軽く挨拶を交わす。服装を見るとラフな格好をしている奴が多い、オーディションに慣れたそぶりに見える。「みんな手ごわそうだ」雰囲気に飲まれたら負けや、勇気を出して頑張らなきゃ女性の担当者が入ってきて「これに書いて下さい」審査員に渡す用紙を机の上に順に並べた。世森友・五十一・百七十・九十七・八十・九十三・二十五と体の各サイズを記入、得意なものに、ゴルフ、出演作品に、絆・甘辛しゅんと記入した。書き終わりに提出したら、ポラロイドカメラで顔写真を撮る。出来た写真を提出する用紙に貼って、女性に渡す。

隣のスタジオでオーディションだ。六人呼ばれた「入って下さい」私は六人目だった。

「お早う御座います。お願いします」ドアの右手の壁際に、椅子が六脚並べられている。端の席に着く、トップでなくて良かった。前の人のやることを見て、要領を掴むことが出来る「シメシメ」と、思った。「例の創作CFを一丁やったるか」意気込みはあった。向かって右側にプロデューサーか？ディレクターか？三人座っている。

皆若い三十代に見えた。一人が立っている。斜め前にモニターとカメラが設置してある。向かって左手に机と椅子が用意してある。その上にサンングラスが置いてあった。

一番の人が呼ばれて、前に出る。「ハイ」机の前に立って自己紹介から始まった。審査員が、「えーとですね、貴方は評論家です。今、何かについて討論しています。

その内の一人が言っている事が取り留めの無い、何の解決にも成らない事を言っています。それを聞いた貴方は、ところで、『何を言っているんですか？』と、呆れた態度、無視した態度で言っして下さい。「ハイ」と頷くと、すぐに「はい」どうぞと、すぐにキューがでた。サンングラスをかけて、机に手をつけて、「ところで、何を、言っているんですかあ」

「サンングラスを取って、もう一度お願いします」もう一度、同じセリフを言っただけで終わり。言い終わると、審査員が、「はい」と、言っただけで、うん、うんと、頭を上下に動かして頷く。そして、手で引き取ってもいいですよと、促される。次、二人目、同じ段取りである。

オーディションだというのに、一言も自分をアピールしたり売り込むような場面が無い。要らぬことを言ったり、したりしてはいけないのだろうか？行動も言葉も言われた通りやらなければいけないのだろうか？、受けてる人が机の前で、セリフが言い終わると、「おたく、九州ですか」と、問われる、「いえ、四国です」少しなまっていたのだろうか？、私には。そのセリフの言い方のどこが違うのか、よく把握出来ていなかった。三番目の人が言い終わると、「ハードボイルド風だね」「もう一度」同じことを言わされる。審査の三人が納得したように頷く、四番目、「大阪弁の言い方ですね」と、言われ狼狽する。やっぱり私には、どこが変なのかが、はつきり解らない。正しいイントネーションと発声のレッスンを受けたのに駄目だ、難しもんだなあ、私の出番が近づいてきた。

自己紹介は「そのこの事務所から来ました」（スタジオのドアの隣がNACの事務所なので）そんな冗談言うたろかな、それから私の名は世森友、無名です。と、言うたろかな、でも、考えてきたCFを言おうかな、CMの企画内容とハズレとつたらアカンかな、要らんこと言うの止めようかな、思い切って言おうかな、受けると思うけどな、頭の中で色んな思考回路がぐるぐる回り緊張感が襲って来てドキドキする。

先までの余裕は、何処行っただんや、五番目の人が済んだ。私の番が来た。

済んだ人は部屋から出て行く、入れ替わりに次の人が入って来て、椅子に腰掛け自分の出番を待っている。待っている人達の視線を感じる。

落ち着け胸を張って堂々としろ、審査員の前に立って名前とスリーサイズを書いた用紙を胸の前に持って「私の名は世森友…、NACタレントセンターから来ました…。宜しくお願ひします」一礼して用紙を渡して、机の位置に座る。

イメージを浮かべ少し間を持って相手を見た。審査員が「どうぞ」手で合図を送ってくる。私は両手を机について、偉そうに振る舞い、「ところでエー、何を言ってるんですかアア」すかさず「お宅、どちらですか」と、審査員。「おかしかったですか」（やってしもうた）頭に手をやり「能登出身ですわ、分かりました」「それでか、なまってるなあ」と、頷いて、「サングラスを取って、ところで何を言っているんですか、もう一度、言ってみてください」言われて、イントネーションの違いにピンと気づいた。ハッキリと発音の違いが解った。何をの「な」にアクセントがあるんだ、何をの「を」が強くて高いのは間違いだ。「ところで何を言っているんですか」今度は間違わずに、ちゃんと言えた。「結構ですよ」「フー」終わったか、手応えは無かった。「クッソウ」何にも言えなかった。やらなかつた自分を悔やんだ。張り切って行った割りにはアカンかった。考えたCMのセリフを言わせて下さいと言えなかつた自分を叱咤する。断られてもともと、と思つて、

今回は絶対思ったことを言ってやるぞと自分を奮い立たせる。「アア残念だあ」それから二、三日、頭から離れず時おり、「何を言っているんですか」が、口を突いて出る。その後、CMの撮影の連絡は来なかった。オーディションは見事に落っこちた。

♪明日と言う字は明るい日と書くのねえ♪若いと言う字は苦しい字に似てるわあ♪
「あーあ、若くもないか？」

二十六日木曜二月、最後のレッスン。美人の岡田先生だ。

軽い準備運動から始まって、一組六人づつ輪になって座り、尻取りゲームをする。

これは記憶力と集中力の訓練になる。例えば、りんご・ごりら・らっぱ・ばらそる・るすばんでんわ・わし・しかい・いぬ・ぬりえ・えんぎ・ぎんこう・うま…などと、続きます。自分の番がきたら、最初の人と言った単語から順番に全て言ってから尻取り単語を言う。一周、二周、三周、だんだん記憶があやしくなってくる。

前の人の言葉が浮かばない頭が真っ白、それは私だけの現象ではなかった。

ずっと調子良く言えてきたのに隣の人の言った事が「ええーとええ、なんやったかな？」他の五人は解っているのに、自分の番になると記憶が飛んでしまう誰もがそうなる。

この言葉ゲームは面白いですよ不思議なんだなあ「一度お試しあれえ」

物語の分析についてと演劇についてのお話があった。

「この年でまだまだ勉強、頭も身も引き締まるねエ」私は高卒だが、授業を受けていると、別に幼稚な事を習っている訳でもないのに、小学生に戻った気分になるのはどうして？、芸能界の一年生だからか無理もないか？。

岡田先生が演技問題のテーマを言う、生徒が即興で演じる。

演目が出てから五分間考え、出来た人から手を上げて前に出て演じていく、思いついたことを即興でやるわけだから。まるでテレビの「落後のごこみ」みたいだ。

生徒のする演技を見て先生は一緒になって、一喜一憂している。可笑しくて笑い転げたり、成るほどと感心を示したり、もう一寸、ここをこうすればよかったわねとか、ダメだしも真剣だ。やる方は、度胸がつくし、演技をする難しさ、楽しさを味わえる。素人集団の、大阪のおばちゃんや、いきなりやる演技を見ると、ほとんどが天然のお笑いコントだ。いい天然のキャラクターが出ている、面白いよ、是非一度このレッスン風景を観劇させて上げたいね、天然の笑いが満ち溢れている。先生もその時間は楽しんで居るようだ。

次のテーマは。「面白くて性がなかったこと」「怖かった体験」場所は何処でもいいです。親しい人になつたり出会い、そこで「伝言を言う」「口げんか」今までにやった題目である。「伝言を言う」と、「口げんか」この二つは、空前絶後、笑い沸騰、もう日頃の井戸端会議の実力發揮、亭主をののしつたり、やりこめる怒り口調は、リアルで今にも頭がプツンと切れそうな迫真の演技（あれは地だよ、きつと、女は怖い）だった…。

三月五日松尾監督、娘と若者の会話、セリフの練習。

娘、「鼻の愛護デーってあるの？」

若者、「あるよ」

娘、「いつ？」

若者、「女のくせに知らないの」

娘、「知らないから聞いているんじゃないの」

若者、「いやになつちやうな。八月七日だよ」

娘、「八月のハに七日のナか、平凡ね」

若者、「そのくらいのは常識だよ」 未だ台本は続くがこんな感じだ。

141 決められたセリフを自然に言うのって難しいよ、何度やってもぎこちない。

『テレビ出演のオーディション』

九日月曜日の夕方、NAC事務所からの電話が鳴った。

「世森さんですか？」「はい、そうですもしもし」

「明日十七時四十五分、関テレの正面玄関に行ってください」いきなりのミッション、

「はい、どんな内容ですか」「再現VTRの出演者を決めるオーディションです」

（ひよっとしたらテレビ出演か？）「あっハイ」「受かった場合は、十二日が撮影日です」

「日にちがないですね」「その日も必ず空けといて下さい」「エエハイ了解しました」

（ヤッター8chのオーディションが来たア）今度こそ受かりたい「明日はやるぞオー」

『テレビ番組キヤスティングオーディション』

十日朝からオーディションのことで頭が一杯だ。

買ったばかりのスーツを出し、ネクタイ、カラーシャツを念入りにコーディネートをする。

グレーのシャツに紺地に白の小さな水玉のネクタイ、渋い感じで決める。電車で向かった。

午後五時には関テレに着いていた。関テレの受付嬢に挨拶をして、来意を告げ終えてから、

広いロビーの片隅にある椅子で待たせて貰う。鞆から碁の本をおもむろに出して読む…。

暫くして女性二人が傍らに來た。「やあ、お早う御座います」NACのスタジオレックスで御一緒した事のある津田さんだ。もう一人は何となく見た顔だが、三人で色々話し合っている内に、NAC事務所のサブマネージャーの越知さんが見えた。

いったん関テレの外に出て皆を集めて、点呼確認をする。若い女性三人にシニア二人、若い男性四人にシニア三人、全員で十二人か、やけに少ないな、と、思った。

受付のカウンター前に戻り、関テレの製作担当者から、一人一人に首にぶら下げる札、許可証を渡してもらい、部屋まで案内された。青色の壁と赤色でふちどられた窓の建物の関テレは建てて間もない社屋だから何処を見ても奇麗だ。

入った部屋は大きなテーブルがありに洋画に出てくるようなひじ掛け椅子に十八人座れる、小じんまりした会議室のようだった。暫く待っていると、制作担当の川村という人が來た。

「今、準備してますから、待っている間、何か飲み物をどうぞ」みんなが遠慮していると、「どうぞ、どうぞ、電話したら持ってきてくれますから」一人一人に注文を聞いてくれる。

私はホットコーヒーを頼んだ。やがて何種類かの飲み物が部屋に届けられた。こまめに動く川村さん、一人づつ注文の飲み物を配る。

「後は、やりますから」

コーヒーをポットから注ごうとする川村さんに、津田さんと私が言った。

川村さんが、「いいですよ、そのまま、座って居て下さい」

私が、「ホットだけに、もう、ほっといていいですから」と、ダジャレをいったら、川村さん、「うふ」と笑った。「もう一つ、やったね」と私が自分でノリつつこみを入れた。暫くの間、コーヒーを飲みながら、何が起きるのか、ウキウキしながら、喋っていた。

「こちらへ来て下さい」青年部の女性が呼ばれ次に青年部の男性、そして私達シニアの順、別室に呼ばれオーディションを受ける。ディレクターからドラマの内容の説明が始まる。

「純子さんが高校二年生で隆浩君が高校一年生の時に知り合って、付き合いが始まり、純子さんが大学に合格した後に、妊娠していることに気づき、別れる決意を一旦する。

ある日、突然「子供が生まれる」と知らされ、両親と病院に駆けつける。その日から高校生がパパになってしまった。今迄の事を、ご両親に感謝をしてお礼を言いたい。

番組のタイトルは《あなたにありがとう》です」

私は、お父さん役なのかな、お母さん役に二人しか来てないのどういうことだろうか？。デスクの向こうには、ディレクターも含め製作側の三人が座っている。

そして、三人の傍らに立っている川村さん、書類選考（写真付き）の用紙が置いてあり、時折それを見ながら話を進める。突然キャスティングオーディションが始まったようだ。

「ええとです、子供が生まれる事を知らされた両親、そこへ隆浩君がやって来る、隆浩君を見て「いったい、どうなっているんや、と言って見て下さい」

私は二人目に座っている。川村さんが隆浩君の役をする。頭をかきかき、バツわるそうに、少し歩いて近づいて来る。傍に来るのを見計らって台詞を言う。

短いけど感情を表現するのは難しい、私の番が来た。隆浩君役の川村さんの顔を睨みつけ、「いったい、どうなっているんや…、お前は何をしてくれたんや…」、唇が自然とワナワナと振るえ、親の思いを込めて言えた。

「はい…」と言う三人の目を見て、「やったア」と、手応えを感じた。

審査結果はその日の夜、八時以降に、NACの事務所に電話をすれば解ることになった。八時過ぎを待って電話を入れると、「世森さん、受かりました。OKですよ」

「そうですか」schannel、関テレの番組に出演するんだ！。ヤッター。

「十二日十五時四十分、野田阪神駅南改札口に集合です」

「梅田からのアクセスは？」

「千日前線に乗って野田駅まで直ぐですよ」

「用意するものは？」

「普段着とカジュアルのツーパターン持って行って下さい」

「OKです。了解しました」

「世森さんは、タカヒロのお父さん役です」

「そうですか解りました」

「それじゃ…」

「はい、どうも…」、ヤッターアー！、初めてまともな役が回って来た。

その他、大勢のエキストラとは違うぞ、明後日が楽しみだ。(浮きワク)そして当日が来た。

ワツ偶然とはいえ、まア不思議やな、前にもこんな事が有ったが、大勢の人込みの中で会うなんて？、私が乗った車両に、一緒にオーディションを受けた中の一人が座席に居た。

「おはようございまあす」今までに行ったことの無い所なので、早めに来たのだと言った。二人の思いは同じで、私も緊張と不安で早めに家を出て来てしまったのだ。

駅を出て、目的地の集合場所に向かう。暫くしてお父さん、お母さん役の四人が揃ったが、事務所の方から誰も来ていない、待ち合わせの約束の時間はとうに過ぎている。

やっと、NAC事務所のサブマネージャーの越知さんがよっこらよっこら近づいて来た。全員待ち合わせ場所が間違ってた事になかった事に安堵する。「お早う御座います」

「遅くなって済みません…、実は、事務所に連絡があつて、純子と隆浩のカットの撮影がおしているとの事、何時になるのか、現場の担当者で連絡を取つてみますので、何処か近くで待機して居て下さい」と、越知さんが手をすりすりしながら、私たちに伝えた。

「なんだよ、まったく、どれだけ待たせるんだ」「いつものことだもんね」

待ち合わせ場所の直ぐ近くにあつた。マドレーヌという喫茶店の二階に陣取つた。

越知さんが、制作側の担当者に、私達が待機している喫茶店「マドレーヌ」の電話番号を知らせてから、事務所に帰つてしまい、私達四人は喫茶店の二階で待つことになつた。

「一時間後に連絡が入ります、その指示に従つて下さい、私は事務所に帰りますけど、後は宜しく願ひします。」だつてさあ、いやんなっちゃうねえだ…。手帳を取り出し、

「えーと、済みません、お名前は?」「西野さん八期ですか、大先輩ですね」

「済みません、そちらは」「十一期の田村です」もう一人は、十期の津田さん、話を聞くと、お母さん役の二人は書類選考で決まつていて、純子と隆浩の、どっちのお母さんにするかを決めるだけだったのだ。私と津田さんが隆浩の両親で、純子さんの両親が西野さんと、田村さんということになっていた。会話が弾まず、とつとつとし、時間を持て余していた。

「NACの方に、電話です」ウエイトレスが呼びに来た。

下に降りて電話に出ると、

「どうも済みません、遅れまして、もう後四十分ぐらいでそちらに行きますので…。」

「もう四十分かかるて」「エッまだ」「フーン」「ソオ」暫くはそのまま座って居たが、店内が混み合ってきた。「これ以上ここに居たら、店に迷惑が掛るから外に出ましよう」店の外で待っているが、どつちから来るか解らない、私と西野さんが二手に別れ見張った。なかなか担当者が来ない、六時近くになって向こうから走ってくる人が見えた。

「川村さんだ、来たよ」「大変お待たせして、済みません、こちらです」後を付いて行くと、三分程で現場に着いた。産婦人科の猿渡医院に着くと直ぐ撮影の準備が始まった。院長さんに場所を提供して頂き撮影の許可を取っていたので、まずお礼を言っていた。

『いよいよ撮影開始』

「なるほどな、セットを作るよりも、借りたほうが安くて早いわな」看護婦さん達は撮影機材が運ばれて来ている中、邪魔になつてはいけないと、とまどっている様子だ。

撮影機材が運ばれている場所を回事で通る度に邪魔になりはしないかと、気を使って頭を下げながら通る。制作する側の方が、医院の仕事の邪魔をしているのに…。

やつとと言うか、いよいよ撮影開始だ。医院の通路を使って、田村さんが医院に駆け込むシーンから撮影、ワンカット終わり。ツーカット目、私と津田さんが廊下を急ぎ足で歩き、待合所の席にうなだれて、腰かけている純子さんの御両親に近づき、挨拶をするところまで、ここでも、前日に買ったばかりの春先用のコートが役に立った。

「コートを脱ぎながら」「脱ぎ終わる手前から」「脱いで抱えて」コロコロ指示が変わる。スタートの位置に止まる位置、ダメダシにチェック、動きの確認、台詞は無い、

このカットはナレーションが入って無音声になることを聞いたので、純子さんの御両親に「純子さんの御両親ですか」と、ロパクで言った方がやり易いんですけど、言ったら、「それで結構です」「ハイ本番」合図の顔を見合わせスタート、緊張で顔が引きつる。

「OK、いただき〜」(OKの後にいただきと言うのが面白い) ツーカット目終了。

スリーカット目は、気まずそうに伏目がちな目で両親の横に座る、四人が神妙な面持ちで、待合所の椅子に腰かけて居るアップと引き、カメラマンが机の上から撮ったり大変だ。

次の撮影は。廊下を走って来る隆浩。カメラの斜め上に上げた拳を見て啞然とする。

四人のアップ、気まずい空気で座っている四人を四方八方、上下にカメラの位置を変え、

「本番」「OKいただき〜」「本番」「OKいただき〜」終了。

田村さん、純子さんのお母さん役が隆浩の家に電話をしているシーン。田村さんは自然に演じた、その演技力を見て、「うまいな」と、感心した。

フオーカット目、隆浩が慌てて廊下を走って来る、私達の前で立ち止まる、これも何度も繰り返しリハーサル、本番では彼も疲れて息せき切っている感じが出て、とても良かった。フアイブカット目は。出産シーンは若手女性の出番だ、分娩室で撮影している。

私達の出番は撮り終わって、川村さんが「どうぞロケバスで、お食事をして下さい」喉が乾くでしようと言って、飲み物が出るは、美味しいお弁当を用意してあるは、さすが扱いが違うな、リハーサルでも指示の出し方が「お願いします」と、来たもんだ。エキストラ扱いとは、偉い違いや「気持ちエエー」医院での撮影は全て終わった。

大正区まで移動をする。ロケバスの中で、矢野愛ちゃんに前山直樹君か、手帳にメモる。矢野ちゃん携帯で「お母さん、私、主役やで、ほんま、テレビに写るよ」と連絡をする。この子も今日のような体験は初めてなのだろう、それを聞いた母親は、自分の娘がテレビ番組の主役で出ると聞いて、どんな気持ちなのだろうか、本人は、はしゃいで大喜びだ。親子の短い会話を聞いて、笑いながらも、胸が熱くなった。「愛ちゃん、良かったね」

医院内での撮影の合間に、看護婦さんが、若い二人に、サインをねだったらしい、

「サイン言われても、初めてやし、ひらがなで書いといたわ、ハハハ」無邪気に笑った。

ロケバスは三十分程走って、ビデオワークの末吉さんの紹介の川上様宅に到着した。川上さんと御両親が中で待っていた。「お早うございます宜しくお願ひします」

和式の応接間に通された。床の間があつて、立派な置物が飾つてあり、六人入れる大きなコタツがある。おそらく撮影の為に、部屋があつちこつち気を使って片付けたんだろうな、「これでいいですか？」と聞いていたご主人の言葉に、そんな思い入れを感じた。

「はい、有り難う御座います」スタツフが丁重に頭を下げる。部屋の中は人人で一杯だ。照明さんを見てみると、大変な経験と技術と感が要ると思つた。なんだか手間どつている、その時「あつブレーカーが飛んだ」古い民家だから無理もない、どうにか準備が出来た。カメラマンとチーフが、このシーンをどういうふう撮ろうかと、話し合つている。

時計の逆回りで、津田、私、前山、矢野、西野、田村、の順にコタツに入りスタンバイ。チーフがひらめいたようだカメラマンに、こう伝えた「コタツわらう、カメラ入る、左からなめて右」これでどうだと言わんばかりの顔だ。「それで行きましょか」 決まつた！。私は小道具に思つて、たばこを用意してコタツの上に置いていた。

ワンカット目、「世森さん一寸、たばこに火を付けてエ」ほら来た。たばこに火を付ける。一発目で「OK」チーフが「キマズーイ感じが良かったですよ」やつたあ、嬉しいなあ。

タバコを用意していて、正解。いよいよコタツがのけられカメラがセットされた。六人がカメラを囲んでいる。私のすぐ目の前にカメラがセットされた。

この日渡された台本は。十枚綴りのプリント版で、「再現ロケスケジュール」と書いてある。産婦人科医院に着いた時に渡されていたが。余りにもあわただしい撮影だったので、現場の指示を仰ぐのに精一杯で、台本に目を通す時間が無かった。

ロケバスの中でお弁当を食べてる時に、中を広げてみて、私にセリフがあることを知った。私たちのような立場で、セリフを貰えるなんて大変な事なのだ。

と書きに、家族会議 家族六人揃う そして両家六人集まって家族会議が始まったとある。純子さんの母「どうか、この子を不憫に思って、ここで一緒に住ませてやってください」

隆浩さんの父（私の台詞）「私たちは、こんな所でよかったら来ていただいても結構なんで

すけど、ようは、隆浩の気持ちですよね」

隆浩へズームイン （隆浩さんの決断が迫られた・・・）

あっさりど… 「じゃあ」 このシーンは、たったのこれだけである。

ラストシーンのリハーサルと、撮影が始まった。

田村さん「どうか、この子を不憫に思つて、ここで一緒に住ませてやってください」
チョット待ったのチエック、彼女がNGを出したのではなくて、西野さんの頭の下げ具合にクレームがついた、お願いしますと頭を下げる度合いやタイミングの指示があつた。

その間、「困つたな」と私は変な違和感を持つた。田村さんの声を張り上げる演技というか、声のトーンに圧倒された。セリフが下手ではないんだが、普通はそんな大袈裟な大声では言わないだろうと、感じてしまい、私のセリフの声の出し方のイメージが浮かばない。

田村さんの、必死で懇願するような台詞は、張り上げ声が出しやすい、感情が伝わるから声が大きくても高くても良いのだが、それに会わせて、張り上げるように、「私達は」と、あの強さ大ききさで声を出すイメージはどうしても田中角栄の、「私はウソは申しません」あの演説口調が頭の中を駆け巡る。「どうしよう…」セリフを上手く言えそうにない。

田村さんが、レンズの左ちよい横を見て、リハーサルのQ、セリフを言い始める。

田村さんのセリフが終わつた。「うまいな」。カメラが三人をなめながらターンして、私の50センチ前にきた。レンズの右ちよい横を見て、私がセリフを言いはじめる。

「私たちは、こんな所でよかつたら来ていただいても結構なんですけど…」、次のセリフの言葉が出てこない、頭が真っ白つて、このことだ。一瞬、お母さん役の津田さんと、顔を見合わせるが、セリフが出てこない。NGだ。「ようは」が出てこなかつた。

「スママセン」と謝る。一から、リハーサルのやり直し、田村さんに申し訳ないと思った。「ハイスタート」「フニヤラ、フニヤララフニヤラフニヤラ、フニヤラララフニヤラ」

私の番がキタキタ、お母さん役と目を軽く合せ承諾の合図の演技をして、セリフだ！。

「私たちは、ラララララララララララ、ようはフニヤラララララ、早口になってしまふ。

「世森さん、そんなに慌てなくていいですよ」シマツタ緊張すると早口になる悪い癖が

出てしまった。頭の中のイメージは、「ようは」と言つて隆浩の顔を何うように見てから

田村さんに「隆浩の気持ちですよね」と余裕を持つて言うつもりでいたのに、うまく

言えない、自分の下手さ加減に「バカ」と、膝をたたいた。普段の会話のように、相手の

セリフをよく聞いて。日常的に自然に振る舞えばいいんだ。今度はバツチリ決めるぞ。

私のせいでもう一度リハーサル、田村さんの目や顔を見てはいけない、目の前のレンズの横を見て言わなければならない、より目になっていないかも、気になってやりにくい。

六人座って家族会議、カメラ、音声、照明、全てOKだ。最終チェックも終わり、もう一度だけ、リハーサルをして仕上げだ、「はい」スタートの合図が出た。

田村のセリフ、カメラがターンして私のセリフ「…ようは、隆浩の気持ち次第ですよね」セリフを間違えて「次第」と言つてしまったが、リハーサルだからOKが出た。

続けて本番「スタート」……何とか思ったようにセリフが言えた。

「ヨシ、出来た」という感触は弱かったがNGはまぬがれた。「ハイOK」

チーフDさん「いただきます」と言って両手で指パッチンをする。面白いノリの人だ。

もうワンカット、隆浩の「じゃあ」と言ってる顔のアップを撮ったら、撮影は終わる。照明さんも大変だ。

ズームイン隆浩のアップ、ところが、彼の顔以外は写らないようにするために、明かりがもれないように周りを暗くしたい、顔だけに照明を当てる。

その光を切る作業に手間取って、照明さん一人悪戦苦闘三十分を要した。

「じゃあ」のきっかけの、「ようは、隆浩の気持ちですよね」を、何度も繰り返す言う。横に座っている、純子さんのセーターが白だったため光が反射してしまふ。

私のセリフが終わるや否や身体を避けることでなんとか撮り終わった。「フーッ」

「お疲れサマ、でしたア」「お疲れさまでした」その後まだ隆浩の顔のアップだけを

押さえ用に撮っていた。私と西野さんは「失礼しまゝ」と、川上家の人にお礼を述べて外に出た。やれやれ、やっと撮影が終わった。心地好い宵の空気に触れ思わず一句読んだ。

「やよいづき われひさかたの ここちよき」なんてね、大伴駄作。

今日のスタッフはずっと和気あいあい、温厚そうな人達ばかりだった、今迄のような、

キンキン、カリカリするような事は無かった。すつごく良い経験をさせて貰った。

今日一日だけの経験で終わるかも知れない、俳優のはしぐれの撮影は無事終わった。

関テレが手配してくれた。タクシーで梅田駅まで無料で送ってもらった。

時刻は十時を廻っていた。帰路の途中、じわじわと胸が高まり満足感で一杯だった。

「あなたにありがとう」か、「アー」一日がこんなに長く感じたのも久し振りだなあ。

二十六日は二組のラウンドレッスン、その後カラオケを唄って、そこでゴルフの

成績発表を兼ねた。終ってから大阪へ向かうつもりだったが疲れたので行くのを止めた。

五人生徒が増え一寸忙しくなつて、三月はあれ以来毎日ゴルフのレッスンに明け暮れた。

好きな碁を打つ機会も少なかった。そんなある日とうとう、一部の生徒に私が秘密にして

いたことを打ち明けてしまった。「なんや、ずつと何んか？変やなあと、思とつてん」

「先生、芸能人やつてんの」生徒の反応は思つてた以上に興味津々だった。

「いやいや、そんなんじゃないけど…、まだそこまでは行つてへん、タレント事務所つて

言うか、養成所かな、そこへ、ほとんど毎週勉強しに行つてるんや」「俳優の」と聞かれ

「まあな、今んところ趣味程度や、とてもじゃないが、ライフワークにはならんわな」

ゴルフ誘われても断つたりレッスンを断つたり、遅れたりしてみんなに迷惑を掛けるし、

いつまでも一寸野暮用でと言う訳にはいかなかったからNACの事を話したのだ。

「今迄、何んか出たん？」「うん、ちょこちょこな」「どんなん」私はだんだん調子こいて、得意気になり、ペラペラと饒舌になる。芸能界なんてことを言ったら「アホなことを」と、思われはしないかと、内緒にしていた反動が出たようだ。「実は撮影があつたんや」

「四月四日十二時、8chの番組、あなたにありがとうに、お父さん役で出てるんやけど」「見る見る」他にも、こうなつたら止まらない、カクカクしかじか、あれやこれやと喋る。

「もうじき映ると思うけど甘辛しゃんの蔵人役にも出てるよ」「エッ本当甘辛しゃんに！」

「毎朝、あれ見てから出掛けてんねん」。さすが、全国区NHKの番組は関心度が違う。私は撮影した時の話をする「こうして、ああして、ペラペラペラペラ、おもしろいで」

「先生、頑張つてヤ」「またなんか出たら教えてや」実態は芸能人にはほど遠いのに「うん」運良く、オーディションに受かって、テレビ番組に出れたから、もうそろそろ、言ってもいいかなと思つたんやけど、他は映っているかどうか分からない、エキストラやからな、「先生の出てる甘辛しゃんは、いつですか」「震災のシーンが始まったから、明後日位かな」「見るのが楽しみやな」「二、三秒しか映ってへんから、まばたきしたら見逃すでハハハ」生徒も「ハハハ」それからというもの、「先生、今朝見たけど」「うんまだやな、明日かな」結局写っていたのは、二十八日と三十一日だった。「見た見た、先生の顔、映つとつた」

皆が喜んでくれた。まだまだ、これからもっと演技の勉強をして頑張るぞ、きっと、その内に良い仕事が来ることを信じて、果たしていつかな、明日も明後日も日明後日も撮影の仕事は入って来ない、待つ身は辛い、ひたすら待つ、電話かかって来るのを待つ。

四月九日JR京橋からツイン二十一MIDタワー展望室、もう一度大阪城を上から見たく
なつて行つてみた。あれから一年が経とうとしている。大阪城を手帳にスケッチした。

悠久の美、大阪城、何の形容の言葉も要らない眺めているだけで十分だ心洗われ魂が蘇る。
自分が明日から変わるような気がする。人は生まれ変われないが、人生は変えられるのだ！。

この日は。三時半からNACスタジオに行きレッスンを受けた。

雪代恵子先生、大川橋蔵と共演、東映の大スター女優の授業を受けるのは、今日で三度目、
立食パーティーの作法をあれこれと教わった。スタジオを後にして帰る途中携帯が鳴った。

「もしもし世森さんの携帯ですか」電通テックで、オーディションがあると連絡が入った。
電通と言えばCM製作の大手会社の、あの電通だ。「しめた」運が向いて来たかも。

大阪城を見下ろして感じていたことが…、「まさか、まさか」

電通テック6F十七時三十分集合、関テレ8チャンネルのCM、今テレビで流れている。カンテレってCMだ。CM・オーディションには、一つ条件があり、高所恐怖症の人は、はなっからオーディションは受けられないのだ。

十一日オーディション当日、十時から三時までゴルフレッスンをこなして、服装はゴルフウェアにジャンパー、ラフな格好のまま向かった。

受付の処理は用紙に書いて写真を撮る。前の時と同じ手順、その担当者はサカイ引越しのあの時の人だった。高映企画の佐藤さんである

ことが解った。今日は三十分づつ三回に別けて行う、私は一番早い時間に申し込みを済ませた。次々来る顔ぶれはNACの青年部、それもバリバリの若手ばかり、なぜか？おっさんは私一人だった。暫くして青年部三人と私が狭い部屋に招かれた。

ドアを開け、入って左側、四人分の折りたたみ椅子、窓を背にして、審査する人が三人、順に自己紹介、私が一番、年を食ってる割には下手な喋り方だと思った。青年部の三人は端的にはつきりと、上手に喋っていた様に思う。でも演技は負けへんで、何を言うのか？、何をするのか？、恥かいてなんぼや、「やるだけやったらやないか」

審査員「高い所は大丈夫ですか？」四人「はい、大丈夫です」

審査員「ビイビイビイ」と言つて、電波を飛ばしてください」どう飛ばせと言うのか？、

中身の無いまたしようなない。ホームンス、最近のCMは物語制がない、以外制というか、インパクトだけや…、青年部の一番の人、両手を前に伸ばし左右に振り身体を動かして、「ビイビイビイビイ、ビイビイビイビイビイビイビイビイ」

「今度は、立ったまま動かないでやってみてください」

彼はもう一度、指を広げ腕を前に出し左右に振りながら、ビイビイビイを連呼する。

「はい結構です」「次の方」どうぞと言われて、私、前に出て両手の一差し指を立て、頭のとっぺんから右に左に前に後ろに、飛び出していく電波の光が、各家庭に届いて行くイメージで、あつちにこつちに身体を動かし「ビイビイビイビイビイビイ」

今度は前の人と同じく立ち止まって、指先だけで飛ばす。「はい、結構でしたア」

しようもないことさせやがって、私の脳裏に冷めたモノ、一寸白けた感じがあった。相手もそのことをよく解って、見抜い上での、「はい、結構でしたア」に聞こえた。

※演技とは心をよせかける事である。

※演技とは表現ではない、心を投げ出す事である。

※演技とはおのずと内から湧き出る表れなのである。

岡田先生にそう教わったけど…、そう簡単にいくかい、私の感情、価値観、キャラクターが合う合わないがある。オーデイションに、受かりたい気は失せていた。

次の人、「二寸、危ない感じでもいいですか」「あつ、いいですよ」彼は肩を上げ、首をすくめ、肘を軽く曲げて、腕をだらしなく胸の上に出し、指を広げて、指をぶるぶる震わせながら、「ビイビイビイビイビイ」まるでその格好はゾンビ版だ。

四人目は若い女性、「ビッビッビッビッ……」演技をやり終ると、審査側のいいぐさ「可愛いくて、ビイビイビイの音が奇麗でしたよ」

「何、ぬかしてんねん、そんな悠長な電波があるか！」

なにはともあれオーデイションは済んだ。カンテーレのCMオーデイションに落ちた。

「そんなコマーション出たくもないわ」と不機嫌なままゴルフ練習所へと帰った。

七時からのゴルフのレッスンはどうにか間に合った。もしも遅れたらいけないと思い、生徒には連絡をしておいた。生徒「あら、早く終わったんですね」「うん、かくかくしかじか」今日の、オーデイションの愚痴話を聞いて貰って、少しは気が晴れた。

私のやったのと、危ないビイビイを真似してやって見せると、大笑いして面白かった。その後、カンテーレのCMが流れているのを見たが、出来上がったCMは、ビルの屋上で男が突っ立って、両腕を伸ばし、手と指を震わせている映像が流れていた。引きといて、遠く離れた場所からの撮影で、人物が小さくて、誰が演じているのか、解らなかった。

『西村京太郎の自宅広間で撮影』

撮影の仕事は。その他大勢のエキストラばかりが来る。嫌な事もあるが良い事もある。良い事とは。それは、普段行けない場所や建物、滅多にお目に掛かれない場所での撮影だ。

テレビ番組、『おどろきももの木二十世紀』四月二十四日のロケ現場は「西村京太郎邸」京都市東山区清閑寺雲山町三十四番地の二、隣が山村美紗邸、西村京太郎邸の大広間。

ここでのパーティシーンの撮影である。私達エキストラは編集社側やジャーナリスト役、山村美紗さんが派手なドレスを着て階段を降りて来る、茶目つ気たつぷりにお披露目！。

「どうお」と、ポーズをとる、見上げている皆は拍手を送る。推理作家の西村さんは私の真後ろ、『行き先のない切符』私が読んだことのある本を書いた作家が傍に居る。

そしてパーティをするために作られたような広い部屋、私など、作家の家に招かれることなど有り得ない、修学旅行生気分で大感激に浸っている。芸能人とは呼んで貰えないD級タレント、エキストラの仕事ばかりだがやって良かったと思う。D級からA級に近づく日は永久に来ないのか…、サクセスはありえない、又明日のところだあ。

『五十からの明日』（エキストラ物語）

五十歳過ぎてからつくづく思うようになった。今日一日、そして明日はどうしたものか、刺激も感動も無い毎日、どうつてことの無い日々の繰り返しである。

色々なジャンルのスポーツ選手が、明日の試合のことを聞かれインタビューに応じているのを見聞きして、羨ましく思うことがある、優勝した人勝った人の感動と喜び、嬉し涙、感激の余り涙が出る、私もそんな体験がしたい。

明日に夢を託す、明日に人生を賭ける、メイクドラマが待っている、そんな明日はそうざらにはない、でも目的を持って向かっていけば、いつか夢が叶う明日がきつと来る。今日は嬉しいことがあった。嫌なことがあった。仕事が上手く行った。無事過ごせた。今日一日、どう過ごそうと一日は一日、さて明日はどうなることやら、屁こいて寝よう。

♪明日があるさ♪明日があるさ♪明日があるさ♪と今は亡き坂本九さんが唄ってましたが、「明日が楽しみなあ」と思える人生、夢と希望と理想、目的意識のある明日を永続的に向かえられたら、何と素晴らしい人生か、そのテーマが『五十からの明日』なのだ！。

生きているから明日が来るのか、明日が来るから生き続けているのか、何れにせよ溜め息が出ない明日がよろしい。日々の仕事、雑ごとに追われ、マンネリと妥協、あたら無駄な時間を過ごし溜め息と愚痴をこぼし、それが当たり前のように毎日が過ぎ去る。

「もう嫌だ」人生諦めたらアカン、そんな思いから『五十からの明日』の、チャレンジが始まった。ある人がこんなことを言っていました。

「人は年を重ねるから老いるのではない、理想を失った時から老いるのだ。」と、そして、一年発起、オーディションを受けて、NACタレントセンターゴールドシニアに所属しました。毎週木曜日、NACのスタジオで、レッスンを受けています。

各先生方々は。月形先生（俳優）、岡田先生（女優）、雪代先生（女優）荒井先生（監督）松尾先生（監督）、紅先生（女優）、千葉先生（俳優）、田中先生（俳優）、北見先生（俳優）芸能界のベテランの先生方に、外郎売り（ういろううり）で発声の練習をしたり演じるとはどういうことか、演技について教わったり、映画や舞台の物語を抜粋したテキストで勉強をする。動きを付けて台詞を言ったり演じ方を教わる。今までに経験したことのない側から見せる側に回った訳です。始めは恥ずかしいと思ひ、照れ臭いばかりかと思ひ、止めようかと考えたりもしましたが、だんだんふっきて自分を出せるようになり、未知への挑戦で良い経験になり人生にプラスに成っていると思えるようになりました。

それで今、こうして経験した事を忘れないようにと、綴っているわけでございます。

エキストラの仕事は。事務所から携帯に指示が来て、OKだったら撮影現場へ行ったり、映画、テレビ、Vシネマ、CMなどの出演やオーディションを受けたりする訳です。これまでに撮影の現場に行ったのは。

『サンヨー電気のコマーシャル』『生前の予約』『甘辛しゃん』『浪花のべっぴん刑事』

『ミナミの帝王』は二回、『陽炎』『絆』『真昼の決闘』『驚きもものき二十世紀』

『さんまのカラクリテレビ』『二つの愛』『やんちゃくれ』『公共広告機構』は二回、

『日本盛りのCM』『京都出雲殺人事件』『赤かぶ刑事』『余命半年』と、撮影の現場体験をしてきましたが、ほとんどが、その他大勢のエキストラだ。

少人数の時でもおいしい役は貰えない台詞も無い、現場に行つて、制作側のサブDかADの指示でお客になったり、通りすぎる人をやつたりだ。

撮影現場は興味深く楽しい、待たされるのが一番辛いけど…。

「リハーサル」「テスト」「はい本番」「OKです」「はい、チェックします」「OK」

「お疲れさまでした」やつと帰れるうゝ、開放されるこの緊張と緩和が癖になるんだなあ。撮影が終わつた。瞬間の喜びがたまらない、「やったあ」という達成感がいい。

あえて言うならば、間違いなく、製作に加担した一人である。出演したことは確かなのだ。そして次は、何か役が来るように願う。「気持ちを持ちよう、物は考えよう」なんてね!。世森友の『五十からの明日』マンネリ人生を打破しようとの試み、新たな挑戦はどうなることら?…。関テレの新番組『あなたにありがとう』は主人公の父親の役で、セリフもあつて初めて俳優らしい仕事をさせて貰いました。しかし、テレビ放映を見て、ガックリ、編集で、撮影したほとんどがボツ、父親役の私は、どう見ても五十点以下の出来だった。「恥かいてなんぼじゃない」とは言うものの、反省しきりで、悔しいくクヤジイくなあ。

コマーシャルで思うこと…。

サッカーの中田選手、タイガーウッズ、それに、有名俳優達、CM契約のギャラも高いが、ネームバリューも知名度も高い、私は年齢が高い「ハハハ」笑ってる場合じゃないか、世森友は誰が見ても、タレントの価値、魅力、憧れ、人気度も著名度も何も無い、何も持っていない、勝るもの無し、タレントセンターに所属と言っても、エキストラ、D級芸能人の端くれ以下なのである。

無名のド素人タレントを逆手にとって、コマーシャルに起用するもの有りだと思う。

そのいい例が、1994年4月、NACタレントセンターに所属しユニクロの

オバハン下着編、日清製粉のコツのいらぬ天ぷら粉、揚げ上手、東レのトレビーノ古館伊知郎と共演など、30数本のCMに出演している。辻イト子(つじいとこ)さんだ。コマーシャルを見た人が、あの人誰や、芸能人かな、あんな役者居たかな、タレントさん?、有名人でない以外制がいいのではないか?、世の中が不景気な時こそ、売れていない人が役に立つ、世間の関心が向きやすいのではないだろうか?!。

知名度が高い人、旬の人、時の人、俳優、タレントやスポーツ選手に、色々なジャンルの有名人、文化人など、CMのほとんどが、そんな人達で作られている。

しかし、見る人の関心を掴むのはCMの内容による。無名であるが故に親しみや日常的な、生活感を感じ易く、CMの内容と現実とが重なり、商品のPRにつながるのではないか?、最近では素人が出ているCMも増えているように思う。でも、エキストラではねえ…。

その後も、NAC事務所から指示に、なるべく断らないようにし、撮影現場のエキストラ、CMのオーディションなどを、次から次と受けていた。こなしていた。

アサヒビール生一丁のCMオーディション、株クリエイターズユニオンで受けたがダメ。でもくじけず、めげずに、気長があくに、頑張ってみるでエ。

やらせて番組を作るな、「さんまのからくりテレビの撮影現場」、あれはやらせだった。

四月二十六日九時四十五分、JR大阪城公園駅を出て、階段を降りて行くと、左手にある電話ボックス前に集合。さんまのからくりテレビのインタビュアーに出る、服装はふだん着、これが事務所からの指示である。いつものことだが、撮影の詳しいことは解らない。

「了解です」私は引き受けることにした。最近、事務所からの指示に対して、行くのか、行かないのか、内容の有無を問わず、スケジュールが開いてる限り、速やかに受ける事になっている。どんな役などと聞いたところで、エキストラは所詮エキストラなのだ。

撮影が終わって落ち込んだり、今日は良かった。来た甲斐があった。全て経験として受け止めなければいけない。今日のエキストラの出来は良かった。飲み込みが早くて、良いものが出来たとか、監督やスタッフの撮りたい絵の一部として、与えられた仕事をする。

制作する側から、コイツは使えたなと少しでも思ってもらえればいい。これがせめてものエキストラスピリットだ。私は中途半端で、卵でもひよっ子でもないが、陽のあたる場所に出るまで、下手な鉄砲数撃ちや当たるじゃないけれど、撮影現場へ行くしかない。

気持ちのどこかで冷めてしまうと、何でこんな所に居るんやばかばかしいと思ってしまう。その一方で、今日は、面白かったなあ、楽しかったなあと、感じることも多い。

事務所側も派遣する人選や人数の確保に一人づつ電話をかけまくり大変だろうと思う。

あんまりNG（断ること）が多いと事務所側に心証を悪くしてしまう恐れがある。しよっちゅうNGを出してたら、そのうちほされるぞと、周りは言って脅かす。

この日、私は電話ボックス前に、集合時間の三十分前に着いた。

駅の売店で、ファイブミニを買おうと思い、陸橋の上に差し掛かると、龍登さんが現れた。「お早う御座います」現場でベテランのNACの先輩に合うと何故かホツとする。

やがて青年部の池ちゃんが現れ、事務所の安田さんも来た。これから何が始まるのか？、解らぬまま、不安に駆られる。まな板の鯉状態でテレビ局のスタッフが来るのを待った。

「インタビュするって、何を聞かれるんやろう、インタビュに弱いんだよなあ、苦手」
「世森さん何言うてんの、いつもおもしろいこと言うてるやん」

「そんなこと言うても、テレビカメラの前で、受け狙いで喋るのって、難しいでエ」
三人それぞれワクワクする気持ちと、プレッシャーを感じながら、立ち話をしている。

やがて外タレが来た。テレビで見たアイツや！、後ろからクルー達が、続いてやって来た。元気に作り笑顔で愛想良く、大きな声で「お早う御座います」と挨拶を交わす。

外タレニコニコ顔で近づいて来る。全員揃ったところで、撮影内容の説明が始まった。大阪城公園の広い入り口付近での街頭インタビューの撮影が開始された。

私は早く終わらせ帰りたいだったので一番にインタビューを受けた。

さんまのからくりテレビを毎週のように観てたけど、「あれもやらせやったんかいな」と、思いながらも、「笑わせよう、受け狙いや、おもしろいこと喋らな駄目や」と、言い聞かせた。「オウ、テレビに出てる人やね」外タレ「ハイ」私「ナイスミチュー」つかみはOKと、気持ちはテンションを上げるのに必死や、何か言わなければと、焦り、ワキ汗が出る。「今、急いでるんやけど…」外タレ「少しの時間、いいですか」英語で言い返す「リトル」親指と人差し指で、チョットのジェスチャー入り、「リトウル」とやり返し乗ってきた。前振りも、OKと、フリップを持って「あなたの自慢は何ですか？」「二人の息子」と、答えると「どうしてですか？」「どうしてって、長男は体格が良くって次男はハンサムで、二人とも格好いい子なんですよ」外タレが英語で「ナアウ××××イングリッシュ」私は番組を毎週のように見て知っていた。例の如く来たなと思いつつながら、簡単な英単語が頭に浮かんでこない、言えずにしどろもどろ、挙句の果てにとんでもない天然の英会話が飛び出すのがおもしろい番組の狙いが頭の中で渦巻いている。身振り手振りで喋った。ハンサムとビックとナイスバディ、英会話が出来ない、素に戻る自分に、がんばれえと、言い聞かせ、できんでええ、おもしろかったらええ、落ち着けえ、このへんから、頭の中は真っ白で単語が出てこない、長男はアメリカに五年間留学していたと、日本語で言うところ「何処に」と、言われ、「アリゾナと、えーと、ほらケントデリカットの出身地、うーん…

ユタ州、それと……もう一カ所、オレゴン州がド忘れして出て来ないし、笑わす余裕など何処かえ消えて行つてしまつた。エイこうなつたらもう知らん、編集に任せ、ヤケクソや、「アメリカの歌知つてるで」「題名は」と問われても、「こんな歌や」と、いきなり歌う。周りをみると、いつのまにか野次馬の人だかりに囲まれていた。「恥かいてなんぼじゃい」「プリーズルックミアウエイ　ダウンタアロンザデエイ　ヒヤインサアイ　ウエアハイ　ウイズマイロンリネエス　アイドンケワツゼツセイ　アイウオントステエイナワールド　ウイズアラアブ」相手も笑顔でリズムを取つてノリノリだ。なかなか止めようとしないうしよがないから途中で止めて「ユウノウ」と、聞くと「アイノオ」と言い話が途切れる。もつと、なんとかして広げてくれよオ、困つた困つたノリがそがれて、会話が弾まない。そこで、一瞬ひらめいた。こうなりや最後の手段、怒り突つ込み返しやあ。

「日本のことわざで、業に入らば業に従え、と言うのをしってるか」と、怒つて、言うつと、それを英語で説明してと、言ってくる、業がどんな単語か判らない、もうお手上げだ。頭の中でバンザイ、天然のおもしろキヤラが欲しいんだらうけど、私には無理ムリだ。」「こんなやつたら英語の勉強もつとしくんやつた」とぼやいて見せると、そこでまた。外タレ「勉強を英語で」と、返してくる。「勉強、ラングウエッジ」と、言つてしまい、ス
タデイやつたかなラーンかな頭の中はグチャグチャだ。野次馬がどんどん増えていた。

とつさに、急いでいた事を思い出したように、腕時計に目をやると、「スンマヘンナ」と、外タレがすかさず言ってくれた。「急いでいるからもう行くわ」「どうもありがとう」で、その場を去って、私の収録撮影は終わった。カメラは目の前、マイクは頭の上、ぶっつけ本番で、結局上がってしまい、後で悔しくって、帰路に着く電車の中で、ずっと、こう言え、ああ言えば、おもしろかったのにとアイデアがグルグルと次から次と渦巻いていた。龍登さんは「英語苦手やこの場を逃げたいわ、中国人の真似をしてやろうかな」、などと、プレッシャーで落ち着いていれなかったが、オンエアーでは、外タレを煙に巻く、グッドグッドの連発で、見事に面白く演じていた。私と池ちゃんはボツだった。

オンエアーを楽しみにしていたのに、ガツクリくりだ。天然ボケのキャラクターを求める番組には私は向かない事がよく解った。ちなみに外タレはセイン・カミュさんでした。街頭インタビューを、やらせで番組をつくるなあ、それはねっ造だ間違ってる。

実にくだららない、内容のコマーシャルのオーディションを受けに行った。

絵コンテを見ただけで、オーディションを受けに来ていた誰しもが、「なんじゃこれは」

稚拙すぎて、なんと馬鹿馬鹿しいコマーシャルなんだ、出たくもないと、思った。

オーディションでは、三人づつ酔っぱらいの踊りをさせられたが、受かりたくはないと思う気持ちは皆同じだった。この企画はボツになったことを後で知った。「当たり前だ」五月十五日おどろきももの木二十世紀をテレビで見た。撮影のカット数が多かったのにはほんの一瞬しか写っていない、エキストラはこんなものかと残念だった。

五月二十五日ミナミの帝王心齋橋ハーゲンダッツ前九時十五分集合。

この仕事はエキストラを人間として扱っていないひどいものだった、こんな製作会社の仕事は二度としたくないと思った。人格を無視した扱い方には腹が立った。

『エキストラをなんと心得る！。最悪の撮影現場』

この日私はいつものように猪名寺駅から電車に乗った。JR大阪駅から御堂筋線に乗って心齋橋へ行くつもりだったのに、尼崎駅でホームの反対側から出る松井山手行きに乗ってしまった、北新地駅で間違いに気付き、慌てて降りて、どうしたらいいか駅員に聞くと大阪駅まで戻るしかないと言う。それでは集合時間に間に合わない、タクシーで行こう。

駅構内から出口へ向かって走った。外に出るとタイミング良くタクシーが来た。飛び乗り行き先を告げる。「時間があまり無いんですよ」運転手は「まあ大丈夫、間に合いますよ」

御堂筋を車が走る、信号に引つかかる度にイライラする。その時、携帯電話が鳴った。

「糊井ですお早うございます世森さん今何処」と、マネージャーからの電話だ。「わっ」やばい怒られる、私たちにとって、事務所のマネージャーが一番怖い人、この人に心証を悪くすると後々仕事を回してもらえなくなり、困ることになる。

「御堂筋線、夕、夕、タクシーの中、スミマセン、もうすぐ着きます、近くに来てます」電話の向こうで糊井さん、なんとなく、笑っているような感じ、「急がなくて結構ですよ、待ち合わせ時間が午後一時半に変更になりました」ホツとするやら、ガツクリするやら、

「ああ、そうですかあ」喜んでいいのか？「ありがとうございます。了解しました」

一応遅刻の烙印が付く汚名は免れた。運が良かったかな。間もなく指定の集合場所に付いた。十人ぐらいがすでにボケーとした顔で待っている、「お早う御座います」みんな一応に待ち時間変更の戸惑いが見え、どうしようと顔に書いてある。糊井さんもまだその場に居た。とりあえず何処かで時間潰しをしなければならぬ、私と糊井さんと後三人がすぐ近くの喫茶店に入った。色々と話題が尽きず、こりない大阪のオバはんの面白い話が四、五十分飛び交った。その中でも、糊井マネージャーの話が、聞いて呆れるほど面白かった。

岩下志麻さんとのロケ現場、それはのロケで、観光旅行に来て砂浜を歩いている設定の、大阪のおばはんのエキストラ六人、そこへ、岩下志麻さんが一人で前方から歩いて来る。

エキストラのおばはん六人とすれ違うシーン、テストの時、列の先頭の二人のおばはん、

岩下志麻さんとすれ違うタイミングで、どんどん近寄って行く、ディレクターが怒鳴る。「その二人、まっすぐ歩けえ、近寄ったらダメ、お互い知らない者どうしなんだから」もう一度テスト、こりないおぼはん二人は、またもや近寄って行く、「ハイ、カット」

ディレクターはプツン寸前。それでも気を取り直して、出しゃばる二人を一番後ろに、下がらせて歩かせることにした。「本番行きますヨーイスタート」一歩二歩三歩四歩五歩、岩下志麻さんに近づくにつれ、またもやおぼはん二人は前に出てカメラに写ろうとする。こりないオバハンに、唾然とするスタッフ、監督はプツン「マネージャーはどこや〜」携帯電話で、現場にすぐ来いと、呼び出された糊井さんがすっ飛んで行った。

「お前んとごどんな教育してらんやあ」「すみません」

「こんなエキストラ、二度と使わへんど、仕事にならんやないか」「どうもすみません」平身低頭、必死になつて謝りたおし、途方に暮れる。

スタッフの一人が「糊井さんを責めてもしやあない、あの二人を使わんかったらええねん、今後、二度とこのようなことがないように指導してや」と、言ってくれて、何とかその場は収まったと言う。とんでもない話だ。エキストラといえどもプロ意識が足らんなあ。

このロケ現場の事件を聞いて、大阪のオバタリアンは常識では計り知れんなあと思った。

本番中にどうせ写らへんからと居眠りしたり、お菓子をバリバリ食ったりやりたい放題、

次から次と問題を起す。まいきよにいとまがない、まいきよに「イ」と「マ」がある。なんて、そんな冗談言うてられへん、事務所側も制作側との対応に苦労してるんや、

我々現場の人間は気い付けて頑張らんといかんなどつくづく思った。喫茶店を出て、さて何処へ行こうか時間はたっぷりある。松倉と岡本はパチンコ屋に行った。私と森と森山の三人は、森の案内で淳久堂書店へ一緒に行くことになった。えびす橋で、地下が虹の町、吉本興業のNGKブランド花月が左にあつて、その書店は、一、二、三階とフロアが有り、片側の通路には椅子と机が並んでいて、気がねなしにくつろいで読書をする事ができる。立ち読みなんて無粋なことをする必要はない、「時間潰しにはもってこいやなあ森ちゃん」大阪商人の発想には感服した。梅田辺りにある本屋は店内の狭い通路で鈴なりになって、立ち読みをしている、通常の光景である、人込みでごったがえし、立ち並び、体を横にして蟹歩きをしなければ通れない、この書店は整然としていて、通路が広いので身体がぶつかるようなことはない。ゆったりと本を物色して居たが、ものの一時間程で飽きてきた。

「世森さん、そろそろ昼飯でも食べましょか」と森ちゃんが言った。

書店内を探しても、いつの間にかやら、森山さんは居なくなっていた。やむなく二人で外に出て、ぶらぶらと歩いた。松竹浪花座、くいだおれと大きな看板が目につく、中学三年の修学旅行を思い出した、ここか、修学旅行の時の記憶を懐かしく思い出していた。

中座の横の路地を入った処に、ラーメン屋「神蔵」（かむくら）、名前からして北海道から進出してきたラーメンチェーン店であることは直ぐに察しがついた。

「ここにしますか、うまいですよ」と、森ちゃんが、目をお大きくして、手で促す。

「ああ、いいですよ」入口で注文し、料金を済ませ席に着く、狭い店内に客がとところ狭しと座っている。目を引いたのは。調理場と客席が通路を挟んで別れていて、そこを店員が行ったり来たり、調理場の入口付近に、今時珍しい縦にはしごがある。上が物置になっているようだ、田舎で見たはしごをこんな処でお目にかかるうとは、私は思わずほくそ笑んだ。狭い立地条件を有効に、そつなく使う工夫がされている。間もなくラーメンが目の前に運ばれて来た。

森ちゃんは私と体つきは、ほとんど変わらないのに、ラーメンの大盛りにおにぎり二個、私は普通のラーメンだけ、食欲が旺盛なものには恐れ入った。神蔵のラーメンをそれほど美味しいとは思わなかった。又来て食べたくなるほどの味でもなかった。

腹ごしらえを済ませ、ボチボチ集合場所に戻ると他の連中も、ボツボツと戻ってきた。

「パチンコどうやった」「勝ったでえー」松倉も岡本も得意満面、ぺらぺら喋っている。集合時間が過ぎてもスタッフは姿を現さない、毎度のことだが、何も文句は言えない。

逆らえば仕事が来なくなる。じつと耐えて待つしかない、こんな事は序の口だ。

♪待って、待っているのよ、一人でいるわ〜♪ 都はるみの唄が口をついて出る。

慌てる様子もなく、待たせたことを詫びる訳でもなく、「お早うございます」を言うように歩き出した。ぞろぞろと後ろをついて行く、「あいつは、機嫌悪そう」私はそう感じた。着いた処は水商売の店がひしめく雑居ビルの一角、狭い通路の入口付近に待たされる。邪魔にならないように両側の壁にへばり付くようにみんな立って待たされた。

スタッフが撮影器材を運び入れる、狭い階段を慌ただしく上り下りしている。

発電機から太い電線ケーブルがによろによると階段をつたって登っている。

やっと、私たちに声が掛かった。「上がってください」スタッフが先導して順に着いて階段を上がって行くと、三階のおどりば付近から、通路は足の踏み場がないくらい撮影器材が占領していた。

「足もと、気い付けてよ」とスタッフが言った時、突然

「アホか、いっぺんにそんなようけ要るかあ」偉い人の怒鳴り声、全員訳も分からず、ビクツとなり後ずさりをする。他のADさんが声を荒げて、先導していたスタッフに、四人だけ部屋に入れるように言った。「あらかじめこのシーンはエキストラが何名で、どのような配置なのか把握してへんかったんかいな、だるいやっちゃ」と私は思った。ため息がみんなの口から漏れてはいないが、物扱いしやがってと顔に書いてある。

四人が選ばれ、私は先頭に行く癖があるから、上がる時も一番前だった。部屋の中はラウンジのような雰囲気、ボックス席に座るように言われた。

遊びに来ている客の役だ、あつ役じゃないよな、客の代わりをしているだけ、演技をしているんじゃない、客の振りをしているだけだ。岡田千代先生の教えを思い出した。

「演じるとは日常の再現である」写っているかどうかではなく、このシーンに必要な絵で、大切な背景の役割を担って、作品作りの撮影現場に参加しているのだという、プロらしい自負心を持って頑張ろう。それが、私たちエキストラの心構えだ。

監督が、いちいち、演技指導をしたり、エキストラに気を回すなんてことはありえない。ADさんがこうしろああしろと指示を出すだけである、名前すら呼んで貰えない。

「おとうさんはここに座って」と指図され、後は客の振りをする。小道具と称するタバコを吸うだけ、これから撮るシーンを通して全体の動きの説明があつてリハーサルが始まる。「ヨーイ、パン」手の合図で、私はたばこを出して口元へ、ホステス役が火を点ける。ふかしながら同僚の客役のおっさんと口パクで会話を続ける。

メインのセリフが終わると、お客役の一人が席を立ち、その場から去って行く。

「カット」ホステス役の一人にスタートから歩き出す位置とタイミングに駄目出しが出た。念入りに監督がセリフの言い回しにチェックを入れる。音調とか間が難しい、台詞に気

が入っていないとその場の雰囲気やリアルな感じが伝わってこない。

監督の熱のこもった演技指導の説明に納得した。側で聞いて居てなるほど勉強になる。本番が撮り終わるまで緊張感が続くが、不自然では駄目だから、普通にやればいいのだが、この普通にすることがカメラの前では難しいのだ。短いシーンでもカットでも、演技がうわずつていては駄目だ。心の底から気が入っていないと、セリフも動きもリアルでないカメラを通してモニターに写し出されると、演技の良し悪しが、はっきりと見えてしまう。カメラマンと監督がモニターを除いている。その横にスクリプター、そして音声さん、プロ集団の目と耳が、映像が完璧かどうかを、チェックをしている。

「お疲れさま」開放された時は緊張の後の緩和、日常では味わえない気持ちになる。OKが出るまでタバコ5本を使い勿体ないことをした。撮影した部屋を出て階下を下りるとほされた連中が通路で待っていた。何と！この日の撮影はここ一カ所で終わり解散。

「何をしに来たのか解らない」と愚痴る気持ちは察するに余りあるが何ともしがたい。「ギャラは一緒やからええやん、しょうもない撮影やった」と慰めを言う。

うなだれてぞろぞろ歩きそれぞれの帰路に向かう。いつか私も干される時があるだろう。でもそれは仕方がない、事務所の指示に従い現場では製作側に任せるしかないのだから、

ほんまに辛いのは、エキストラは・・・。「ガンバレ！エキストラ」

六月に入り、松尾監督のレッスンを二回、茨木先生のレッスンを一回、受けに行つた。授業内容は余り興味深いものではなく、卒業するための単位稼ぎのようなものだ。

先生方もマンネリムード、無論私達ゴールドシニアを本気で、芸能人に育てようなどとは誰も思っていない、先生方は、自分の与えられた仕事を無難に、消化しているだけなのだ。授業の内容には誰しも不満を抱いている筈だ。

その方針に誰も文句は言わない、会社側もそういった指導内容に関してはノータッチで、先生方の采配にお任せしている。先生方の横のつながりにも一貫性がなく、ばらばらで、カリキュラムもノウハウもメソッドも無い、今のやり方では、セリフや動きや演技力が、いつまでたつても上達しない、表面的に一部分をかじつても、演技力の向上にはならない。スカウトされた新人は、いきなり主役に抜擢され、現場で演出家や監督の指示を受けても、宝石の原石なようなものだから、磨けば光りだし、俳優としてものになつていく。

演じる事を基本や型にはめ、作法的な決まりごとのように、ここはこうしろ、発声や調音、台詞の言い方を教われれば教わるほど、個々の天然のキャラクターや持ち味が出なくなり、面白くもなんともない。決まった演技は、歌舞伎やアナウンサーに任せておけば良い、

われわれ芋タレントは。その場にハマっているか、エキストラは映像的に適合似してい

かが大切なのであって、タレントはある意味で、自由人でなければ味が出ないと思う。演技が下手でも、下手クソなりに、使える人も居れば、ちゃんと出来る正統派の人もいる。それでいいと思うし、その人の持ち味を活かし、感性を重要視すべきだ。

レッスン風景は天然の笑いで一杯だ。収録しといて、そのままテレビに流せば、視聴者は腹を抱えて大笑いするだろう。私も含めレッスンはド素人のおっさんおばさんの集まりだ。演じる事の訳も解らず懸命になつて、演技を大真面目な顔で習っている姿は実に面白い。お笑いの専門家は何をやってるんだと腹を立てるかもしれないが：？、

「こっけいだよ」身勝手な言い方だが年齢的に努力をするパワーが乏しい。

すぐに結果を求めたがる年齢だ。基礎になる訓練も大切でしょうけど、直接現場で色々な経験を積んで、直していかないとなかなか身につかないと思う。アカン人は、自然に去らざるを得ない、飲み込みの悪い人、器用にこなす人、色んなキャラがあつてタレント社会は成り立っている。撮影現場の即戦力になるような、刺激のあるレッスンを受けたい。

六月十九日。日本暴力地帯の撮影で、初めて松竹撮影所へ行った。

早朝五時起床、八時半京福電車の帷子ノ辻（かたびらのつじ）改札を出た処に集合。

新伊丹駅から要した時間は二時間十分、この駅の改札口はホームの地下にある。階段を上つて外に出た時一瞬、地下鉄に乗つて来た様な錯覚をした。

早く着きすぎたので、駅の階段を出てすぐ、通りの向かい側にある。喫茶店KAMEYAでモーニングを取つた。松竹撮影所は近くにあり、二分程歩いたら着いた。

門番に挨拶をして、建物の中に入ると、担当者から、十五番控室で待つように言われた。控え室と聞いただけで、嬉しくて光栄だった。その部屋で全員待機する。

しばらくすると、担当者がノックをして入つて来た。「衣装さんの所へ行つて下さい」

衣装室に入るのは勿論初めてである。部屋の中は衣装の在庫で一杯だ。通路も一人通るのがやっとで、足もとにはあぜ道のように狭くなっている。五、六人が一度に入ると身動きがしづらいぐらいいだ、後ろからキャスティングをする係がやつて来て、命令口調で言う。

「医者役だけ着替えて、三人は衣装を持って、現場に着いてから着替えてや」と、言つて出ていった。「医者の方がいいな」と、思いつつ患者の衣装を受け取つて部屋に戻る。白衣姿で聴診器を持つて医者役が満足しきつた顔で控え室に入つて来た。

「はまつてるやんか、そんな医者いてるで」「よう におてるやんか」

「どつちか言うたら産婦人科やな」と、言つて冷やかす。今日のロケは亀岡迄行つて、病院と、もう一カ所お寺で撮影が行われる予定になっていた。私はロケバスに乗つて遠

い処まで行つて戻つて来て、電車に乗つて家まで帰る。この行程だけで心身共に疲れる不安

を案じていた。その時「天候待ちで出発が、遅れていますしばらくお待ち下さい」と、若いのが知らせに来た。外は本降りの雨、風も次第に激しくなり、風と雨の音が、部屋の中まで聞こえる。がやがやとよもやま話が始まった。撮影が待ちどおしく張り切っている。やがて、場内アナウンサーが流れた。「シツ、静かにして」みんな目を点にして聞き入った。「本日のロケは中止になりました。ロケは中止です」

「せっかく朝早くから起きて来たのに、残念やな」
私は心にも無いことを言いながら、とつとと、帰る身支度をする。

医者役は、さも残念そうに「延期か、この分の撮影いつやろ」と名残惜しそうにしている。患者役は「又、来んとあかんのやろか」

「今日のギャラは出るんやろか」この時ばかりは中止になって私は嬉しかった。後に聞いた。中止の理由は、病院のシーンと、お寺を借りて、葬儀のシーン、二つの撮影をいっぺんに済ませたいが、屋外の撮影はこの雨では無理、亀岡を二度も往復するのは、ロスと判断し、日時をずらす事に決定したのだった。

184 次の日、NAC事務所から「昨日中止になった日本暴力地帯の件ですが」と、電話が来

た。

昨日と同じ顔ぶれでないと駄目なのかな…と思いつつも、ロケ先が亀岡と遠いのが辛くて、体調不良を理由に断った。「このNGは事務所の心証を悪くしたかな」と少し心配した。後日、松竹のロケ現場に参加した連中から話を聞いた。患者の格好の衣装の人は死体の役で安置所へ運ばれるシーンの撮影だったと聞いて…。

「そうやったんかいな、行かなくて良かった」体調不良のNGが正解やたと、手を叩いて嬉しがると、患者役は喪失顔で「えらい目におうたわ」と愚痴をこぼしながら、私を見て抜けたあんたはずるいわと、いった目をしていた。

「エキストラばかりはつらいよな」「おいしい仕事はないもんな」と、なだめた。

この話を側で聞いていた他の一人が、「現場では、何をさせられるかわからんもんなあ」「この間、首領への道のロケ現場へ行ったんやけどな、雨のシーンの撮影でな、ホースで水をジャージャー撒いて、その下をなんべんも走らされて、終わったらびしょ濡れや、寒くて寒くて、風邪引いてしもたわ」

「えっ！、びしょ濡れかいなあ！、着替えはどうしたん？」

「上は借りた衣装やったけど、下着までは用意してへんがな」

「ロケ現場に、下着類まで用意して行くことはないもんな」

「新品の真つ白なパンツ一丁づつ配ってくれただけやがな、まいったでえ」
「ほんまあ、そりやえらい目に遭ったなあ〜ウワツハツハ〜」と、笑うしかない。
他人事だから、面白がって笑えるが…、明日は我が身か？。

平成10年 1998年6月 NHKの水曜シリーズドラマ 『ふたつの愛』

主な出演 .. 田中好子、沢田研二、河合美智子、桂米朝、菊池隆則、角野卓造、

香川京子、國村隼、田尾佳澄、阿佐愛子、都倉浩、佐川満男

大人の男女の哀しい心の遍歴を通して、ふたりの男の間でゆれる女の「愛の形」。

一度は過去を葬り、四国の山中に逃避したヒロインが再び現実立ちむかう時、

彼女が下した愛の選択は…。1998年6月、伊野原雪子（田中好子）は開通間もない

明石大橋を渡って、神戸へ向かっていた。雪子の失踪から4年目のことである。

4年前、高名な医師の妻であり、夫を愛しつつも、一方でその夫の闇の部分暴露こうと

した青年に惹かれてしまった雪子は、自らの心を恥じ、過去を葬り去るため、記憶喪失を

装って、四国の山間・祖谷溪に身を隠していたのだ。

一方、雪子の夫、亨（沢田研二）と、元検事（現在は弁護士）の滝沢章吾（菊池隆則）は、

互いに雪子の行方を追いつつ、亨の医療ミスをめぐる裁判を闘っていた。

原告側（章吾）は、亨の良心の仮面をはぎ取ろうと、その人格や人間性を問う作戦に出る。十九年前、雪子の妹、華世（河合美智子）が亨の医療ミスによって、足に障害を残す身となってしまったこと、更に、亨の追求する理想の小児科医療も、T R製薬との新薬治験をめぐる癒着の上になりたつものではないかと章吾は糾弾する。ふたりの男の闘いは、医療ミスをめぐる闘いでもあると共に、雪子をめぐる人生をかけた闘いでもあった。そして、裁判の決め手となる真相は震災の日、傾きかけたマンションの一室から、雪子が持ち出した亨の日記の中に隠されていた。

今、その一冊の日記を手に、雪子は、夜闇にかかる橋を渡って、現実の世界へ戻って来ようとしている。果たして、日記の中に隠された真相とは？過去から逃避することをやめた雪子の決意を促したものは？。雪子は、「ふたつの愛」のどちらを選ぶのか？

ドラマは意外な結末へと向かって、急展開して行く…。(テレビドラマデータベースより)

『二つの愛』（沢田研二主演 テレビドラマの撮影現場）

今日のロケ現場は月日亭という料亭だが、ドラマの中では、四国の山間・祖谷溪の旅館の設定になっている。奈良県にある、「月日亭」を四国の旅館と想定しての撮影である。

「月日亭」は奈良県では知る人ぞ知る有名な料理旅館である。お忍びで利用する有名人

多いらしい。JR奈良駅を出て、噴水の近くにあるタクシー乗り場で、タクシーを待った。「タクシーでロケ先へ行くんかいなラッキー」間もなく緑色のボディーのタクシーが来た。運転手に行き先を告げるが、同じ屋号がもう一軒あり、どっちなのか判らない、事務所の友本さんが急いで携帯電話をかけ調べ直し「こっちのつきひていす」「解りました」と、運転手が答える。市街地を抜けると公園が見えて来た。若草山が左手に見えた。

なだらかな山裾を左廻りで車は登って行く、若草山の裏手付近から右の山道へと進入する。アスファルト道路から地道に変わり、轍のあるゆるやかな坂道をタクシーが登っていく、急に山の中へ入った感じだ。車窓からの景色が一変した。右下は浅い溪谷、大きな岩や、石つころの間を水がさらさらと流れ、杉の大木、もみじ、桜、ぶなの木々が道を挟む様に生い茂っている。駅からそう遠く、離れてもいないのに、素晴らしい自然が残された場所に来た。山道は大きな木々の枝や葉がおおいかぶさり、天井が緑色の大きなトンネルの中を走っているようだ。緑のトンネルの天井を見上げると幾重にも覆われた葉の隙間から、キラキラと陽光がこぼれ落ち、生い茂った木々の葉が緑色に輝き、青い空の色がチラチラ透けて見える。しつとりとして落ち着きのある自然の光景にしばし満喫した。

「ええとこやあ」感嘆！。しばらく行くと道が広くなりその先の門柱に月日亭の文字が、

見えてきた。タクシーは門の手前の広場に止まった。

初めて訪れた素晴らしい場所に、目はキョロキョロ、心はワクワク、足は踊る……。ロケ隊より先に着いたのでまだ静かだ。門からはコンクリートの急な坂道である。

一步一步腰を折るようにして登って行くと、バックザファイチャーじゃないけれど、昔にタイムスリップしていくような感覚になる。庭先に一步足を踏み入れると、歴史を感じさせる。純和風建築の佇まいが、「春日山原始林」と、呼ばれる、自然のなかに静かに溶け込むように建っていた。

桜の木や大きな杉の木、庭木すべてが時を経て落ち着きのある風情をかもしだしている。都会との縁を拒みつづけ物静かに、昔の風情をかたくなに保ち続けていた。

女将らしい人が出迎えてくれた。私達三人を別棟の部屋に案内してくれた。

景観に目を奪われている私を見て、「紅葉の時期はとってもきれいですよ」と言った。

機会があつたらもう一度来てみたいと思つた。「夕べお客様が大勢いらつしやつて、

今は、こちらの部屋しか開いていないのです、恐れ入りますがここでお待ち下さいませ」女将さんの心配りに恐縮しながら「いいえ有り難う御座います」と言つて部屋に上がった。

女将は撮影の関係者と判断して、待つ間の、控えの部屋を提供してくれたのである。

このような待遇を受けることは滅多にない、エキストラにはまれなことで嬉しかった。タバコに火を点け一息入れ、いい気分になり浸りたいと思っているのに、マネージャー代りの友本さんが、振る舞いに気を付けるように、色々うるさく言うから落ち着いていられない、この業界の厳しさや掟に神経質になり過ぎて友本さんが、おどおどしているように見える。メインの役者が来た時に、この部屋に私達が居てはまずいんじゃないか、先に占領していると反感を買うんじゃないかと心配なのだ。彼は気付いていないようだが実によく喋る。訂正言葉を使つては会話が長く、事務所には融通の利かない、石部賢吉ガチガチ男完璧主義者なのだ。ところがある日、NAC事務所内でのエピソード！。

「はか行つて来ます」と真顔で言っている。「はか？」と、聞き返すと、予約してるのだから、言つて、人差し指で歯を差している。それで、「歯科」と、解り、他の人は呆れて笑うのをこらえるのに必死だったと言う。滑稽な話。

それ以来、彼が真面目に喋っている時でも、心なしかこっけいに思えて親近感を覚える。ゆっくりとくつろぐ間もなく、外が騒がしくなつて来た。ロケ隊が到着したようだ。二度と入れないかも知れない、部屋でゆっくり情緒を味わう暇もない、

「スタッフと女優さんの、控室になるから早く出よう」と友本さんがせきたてる。

そんなことを言われるまでもない、バックを持ち、慌てて玄関の上がり口に出るやいな

や

一行が、ドヤドヤと入って来る。「お早う御座います」「おはようございます」の連呼だ。次々来る人に挨拶を交わしながら、急いで靴を履き、あたふたと外へ飛び出た。

女優の「香川京子」と、もうすぐ春ですねと歌っていた。「田中良子」あのスウーちゃんにすれ違った。庭内は人と器材でごたごたしている。若い連中が着々と準備をしている。スタッフ、それぞれの役割のプロであり、職人的でもある。

撮影準備の邪魔にならないように、庭端の桜の木の下で待機していると、スタッフの一人が近づいて来て、愛想のない顔で、「呼ぶまで下のロケバスの中で待つて下さい」

決して、丁寧語には聞こえない命令口調。そこは仕事の邪魔になるからあっちに行けって言われたように取ってしまう。エキストラの扱い差別待遇に不満を持つ私のひがみ根性がそう思わせるのかも知れない。でも、今回は座って待てるのだから、ひじょうにらくだ。

三人がロケバスのシートに腰かけて話をしていると、タクシーが一台到着し、男が降りた。「沢田研二」だ！。二日酔いか、寝不足のように、ヨタって坂道をだらだらと登って行く、ジャケットもタクシートの背もたれで、シワができ、よれよれ、ダーリンダーリンと唄い、どこか気だるそうな雰囲気に見える。「うーん、今日は沢田研二も一緒かあ」と思った。

バスの中で待つこと、およそ三十分、ロケバスの運転手のトランシーバーに連絡が入っ

た。

「すぐにながらって来て下さい」やつと出番が来た。

カメラマン、照明さん、音声さん、全員が勢ぞろい、監督以下総勢二十七人のスタッフ、一瞬緊張感で身体が金縛り状態になる。

先ずは、衣装のチェック、衣装係りのイメージに程遠い、大柄な岡さんが近づいてきた。この人は苦手だ……。何かを言われたらどないしようかと内心どきどきしてくる。

(事務所からは、時期は六月、旅行をする格好をして行って下さいと言われていた)

初めてNHKの衣装室に入った時、不機嫌そうな口調で、ぶっきらぼうな言い方に、ムカつとして、苦手意識があった。ところが私の服装をいちべつしてすぐOKが出た。ところが、日野ちゃんも引かかった。「なんや そのカツコウわあ」と、怒られた。

今時の若者ファッション、超ミニスカートは、岡さんのイメージとは合わなかったようだ。こっぴどくチェックされる。「これこれこうなんだからね、こうしないといけないよ」などと、やさしく言ってはくれない。

「旅行カバンはそれか、上着は、遊びに来たんじゃないんだから」と、キツイダメ出し。スタッフの女性に、着替えがないかと聞き、険悪なムード、日野ちゃんがシユンとなる。本気とも冗談ともつかない突拍子もないことを言った。小道具さんの女性に向かって、

「お前の着ているモノを脱いで着替えさせろ」周りのスタッフが「ウフフツ」と含み笑い、日野ちゃんの顔を伺いながら「無茶言うなあ」と私は思っていたが、周りのスタッフのリアクションを見て、仕方がない、これでいくしかししょうがないか、しぶしぶ許すことを、八つ当たりのようなフリで、現場の空気を穏やかな方へと戻したことに気付いた。ぶつきらぼうでつつけんどな奴やなと思っていたが、厳しい言い方は業界の常、何事も真剣にやる心構えを身に付けさせる為であろう。この一件で彼の人間性、彼の優しさを少し垣間見た。そして、小道具さんがてごろな旅行カバンを用意してくれた。

その時ADさんのツツコミ、「こんな不倫のカップルもいるやろ」と笑って言った。

今時の援助交際じゃないけれど、私たち二人は不倫のカップルに仕立てられたのである。設定も役どころも事務所から何にも聞いていない「不倫の役か」悪くないじゃないか。五十過ぎに二十過ぎの愛人、料理旅館のお客の役を演じることが、やっと今、解った！。日野ちゃんと顔を見合わせいい感じ、にわかカップルだが彼女もノリ気になってきた。

不倫役で、朝帰りシーンの撮影現場。田中好子、香川京子、世森友と日野の共演シーン。

香川京子さんが登場、「お早う御座います宜しくお願いします」と丁寧挨拶を交わす。

監督からこのシーンの動き全般の説明が始まる。私達二人は玄関の上がり口に腰かける。靴を履いて、料亭の玄関を出るシーンから、旅行カバンを持つ接待役は物本の仲居さんだ。スタンバイOK。香川さんが玄関先を出たところで、「OOちゃんお客様のお帰りですよ」と、田中さんと呼ぶ、横の路地から小走りでやって来る。近づくタイミングに合わせて、靴を履いて、二人寄り添い、玄関を出る、香川さんと田中さんが出迎え会釈を交わす。

「ありがとうございます」「どうもどうも」五、六歩、歩いて去って行く。

その後、女優二人がセリフを交わす。香川さん、玄関から中へ、廊下を進み、カット、私達は上り口から、腰を上げて、十歩ほど歩いたらそれで終わり、以上が撮影内容だ。

しかしそう簡単にはいかない、テレビの画面ではあつという間に終わるシーンであっても、撮影は、NGが何度も出たり、他にもなんやかやと時間が掛かり、手間暇を要するのです。テスト、テスト、チェック、本番、ダメ出し、テイク、本番、OK。とだいたいこうなる。今日の監督は怒鳴ったりしない優しい温厚な人だ。

私達の動きに指示を出す時も、優しく、解り易く、丁寧、「靴を履いておきましょうか」

「あなたはカバンを持ったまま、二人が立ち上がったら歩き出して下さい」と言った具合。

それから女優二人の立つ位置や、一瞬立ち止まり会釈を交わす足もとの位置をチェック、小走りで来る田中さんの姿は、私達には見えないので、ADさんが、近づくタイミング

を

見計らって、手に持った台本を振り下ろす。その合図で立ち上がり指示通りの動きをする。テスト、テストで「ハイ、本番」五秒前4321でカチンコが鳴る。

「OOちゃんお客様のお帰りですよ」「はい」小走りをして来る下駄の音が聞こえる。ADさんの台本が振り下ろされた。私と日野ちゃん立ち上がる、仲居さん、二人のカバンを持って後に付く、日野ちゃん、私の右腕を抱え寄り添って四歩進み、香川さんと田中さんの前で挨拶をして、五、六歩進みカメラマンとマイクさんの間をすり抜ける。女優さん二人台詞を交わす、香川さん、玄関から廊下を進みフェイドアウト、「ハイカット！」。

「チェックします」監督とカメラマンさんが、しばらくモニターを覗き込んで、「NG」廊下の奥の方から、こちらを覗いている作業着姿のおじさんが写ってしまったのだ。「ああ残念」テイク2「でものはれものないか」不自然な物が写らないように声を出す。「ストップ」壁に集音マイクの影が写っていた。

「手直しOK」「スタート」私達の演技が終わって、やれやれと思った瞬間だった?!。「ブーブーブー」と、大きな雑音、「なんだ?なんだ!」音声さんが腰にぶら下げているブースターのような物から突然に奇妙な音がした。「スミマセン」と謝る「NG」だ。

このアクシデントの時でも、音声さんを怒らせずに監督が笑ったので、スタッフ一同も笑

う。

色々あったがこのシーンの撮影は無事終了。

NHKの水曜シリーズドラマ『ふたつの愛』の前編はすでにオンエアされていたのです。後で知ったことだがこのシーンの設定は、阪神大震災で、医師で夫役の沢田研二が被害にあった人達の治療に専念していて、妻である田中良子さんが神戸から四国に移り、とある旅館に身を寄せ、記憶喪失を装い、女将さん役の香川さんの元で働いている。

そこへ、沢田研二が妻を案じて訪ねてくる。その日の朝、客が帰るのをお送りする場面に、出させてもらったのである。奈良での撮影だったが、物語では四国の旅館になっていた。「二つの愛」この連続テレビドラマを見ていたのに自分の出たところは見落とした。

まばたきをしている間に終わったのか、もしかしたら、ボツかも知れない、ビデオ録画をしておけば良かったのにと、後悔していた。ところが、数日経ってスタジオに行ったとき、「世森さん、写とったで」「見た見た不倫してるとこ」「バツチリ似合ってたでえ」

例のNACのエレベーター前の待合場所で同期の女性が言ってきた。見た人がいたのだ。大した事でもないのに変に嬉しかった。「ありがとう、見てくれたん、うれしいなあ」出演の経験のした者にしか解らないだろうなこの気持は。だが所詮一人良がりなのだ。

七月二日、荒井監督のレッスンを受ける。

『赤猫』監督のレッスンは楽しい、顔は一見怖そうに見えるが、生徒の演技の仕方に注意をしたり、教えたりする時に、漫才の突っ込みのように面白いから、皆に人気がある。

この赤猫とは牢屋が火事で燃える事を言うのだそうだ。女囚の物語である。

牢屋に新入りの主人公が入られるところから始まる、火災で牢屋も危なくなり一時釈放、明朝には御番所前に必ず戻る約束なのだが、その夜、事件が起きる。物語の山場である。

主人公からお金を奪ったスリの女と揉み合いとなり、土手から転げ落ちた拍子に、誤って短刀が刺さってしまい茫然と立ちつくす。ここまでのセリフと動きを指導して貰った。

監督が撮った映画の台本を見て演技をするのだが、まるで、学芸会だね「下手クソ」

十二月四日、十六時四十分谷町四丁目駅八番出口に集合、(株)クリエイターズユニオンでCMのオーディション、福井県の家具屋さんのCM地方版だった。

あらかじめ書類選考で選ばれた男性四人と女性二人でのオーディションである。

オーディションルームは何処へ行っても、事務所角部屋六畳程の小さなスペースである。男女一組の即席の夫婦になって寸劇をやらされた。

娘の結婚を控え結納品のタンスを物色している設定である。台詞も動きもアドリブだ。

机が前にあり椅子に腰かけて、説明を聞いている状態なので、その場で立ってやらなく

はいけない。私の番になり、二人立って、おもむろに洋服ダンスの扉を開け、中を見て、「丁寧な仕事をしているなあ。これに決めよう」と言つて、二人顔を見合はす。

「はい結構です」で終わり落ちた。後日連絡なしオーディションの結果は落ちた者には何の連絡もない、NACの事務所からも無いこれが通説です。

残念、ああ言えば良かったか？、こう動けば良かったか？、と反省をする。

もつとオーバーな表現を百二十パーセントのリアクションをやらなきや駄目だ。

ディレクターの求めているものは何かを見抜いて、期待通りのキャラを出してぶつける。素人の出ているCMは。天然のキャラがCM内容とマッチしないと採用されない。

タレントは個性、人間性、その人のイメージ、著名度、そして人気度で使つて貰える。

私たち、タレントはその場の一発勝負で決まる。短い演技、その一瞬でディレクターに

「これや、この人や、この顔や、この動きや」と、直感的に思わないとダメなのだ。

オーディション経験者は「オーバーかなあと、思うぐらいやらんとアカンなあ」と言う。人の好みとか相性もあるやろ、くじ引きみたいなもんや、運不運もある。しゃあないと、思っている方が気が楽かもしれない、明日があるさ、又チャンスがあるさ。

「一日歳とつたなあ」ふとそう思つた「健康で寝れるつて幸せなことちや」

「どっこいしょ」ベッドで横になり、「いや！親父やお袋の居る天国に一日近づけたんや」
「そうや、そうや」なんて感謝の気持ちが出る。そう思えば明日を元気に迎えられる！。
少しは悟ったような境地で…、心地よい眠りに付くことができた…。

十二月十日「梟の城」(ふくろうのしろ)「司馬遼太郎」昭和三十五年直木賞作品の映画化。

監督は岩下志摩さんの御主人篠田監督である。京都松竹撮影所時代劇セットでのロケ。

この日は早朝五時起き七時半に撮影所集合。どんな仕事になるか？、何の役がもらえるか？、
♪心わくわく胸はどきどき♪はやる気持ちで出かけた。定刻前に着き控室に手荷物を置き
早速衣装さんの処へ、いつもの衣装室ではなく外のプレハブの建物の二階だった。

東京から来た。時代劇専門の着付け師が一人づつ役柄にあった時代劇衣装を着せていく、
紐の結び方帯のしめ方、伝統を引き継いだプロの仕事である。着付け師がボヤいた。

「京都は時代劇の本場と聞いていたのにさ、東京のエキストラは着物は自分で着るよ」
この時、私も他の者も、その事に無知であり教わっていない事を恥じた。

用意されたその役どころの衣装を順次手際よく着せていく。

私の番が来て、「えっ、あなたがこの役」私と衣装が合わないと思ったのか？、すぐに、

マネージャーを何やら話していたが、頷くと、仕方なさそうにその衣装を着せてくれた。

私を含め五人が薄茶色の裾の短い着物に、白いきやはん人足風（作業着）の格好である。他は白装束の刀鍛冶職人、町民、武家、大店の主人と番頭、浪人風やら遊び人風の町方、着付け師「今日は一年分の仕事をしたよ、一度にこんなにはしないよ。主役クラスを一人か二人着付けただけだよ、この仕事覚えるのは大変なんだから、私の師匠はこうしろとは絶対に教えてくれなかったの、見て覚えろ、厳しいんだから、ある日、いきなりさ主役の着付けをしろと言われてさ、初めてだよ手が振えてさ、間違えないように、必死になってなんとか着せることが出来て、主役が部屋を出た時さ、師匠が満足そうに、良くできたよ、褒めてくれた。人前で言わなかった心配り、一人前の職人としての扱い、主役の着付けを半人前がするなんてことは失礼なんだよな、そう言う事なんだよ解る。嬉しかったよ〜」何で？、初対面の私にそんな話をするの？と思ったが、良い苦労話を聞かせてもらった。忙しくて気持ちのやり場がないから喋ることで、イライラを発散して居るのかも知れない。屋外のセツトに集合して、小道具さんの所で、地下足袋、草履、刀、巾着、かぶり物などそれぞれの格好にあった物を受け取る。堺の鉄砲鍛冶屋、入口が広く大店の風情である。入口の土間の右手側が商談をする応接間で奥が鉄砲鍛冶の作業場になっている。そのセツトの前に火のみ櫓があり、広場になっていて、一斗缶の焚火が用意されていた。そこに、時代劇の衣装を着たエキストラ全員がたむろし、スタンバイしている。

この一角だけがタイムスリップしたようで、私達の他にポルトガル人の格好した外国人や、町娘やらで徳川時代に戻ったようだ。中井貴一、小沢昭一さんらが登場する。

篠田監督が指示を出すよいよ撮影開始だ。当時の堺の町を行き交う人々の撮影から。

この日は渡辺謙さんのテレビ時代劇『御家人斬九郎』の撮影と一緒だった。

「梟の城」の篠田組が、「本番」と言うと、斬九郎側がシーンとなり、斬九郎の撮影組が、「本番行きまーす」と手をあげ合図を送って来たら、篠田組が、シーンとなる。

篠田組が、本番の最中に、ガターンと大きな音を出してしまった。物が倒れたようだ。

呆気にとられ思わずにが笑い、「おおい、頼むで〜」とスタッフの一人が声を掛け本番再開。

最後のカットまで私の出番がなかった。て言うか、一斗缶の焚火の側でスタンバって、居たのですが、ADさんが来てこのカットに誰を使おうかと見に来て、声を掛けられ

ないように目を合わさずに避けていた。人足風の格好が気に入らず少しすねていた、私。

それで選ばれ無かったのだ。それでもギャラは同じ、他のエキストラは、当時の雰囲気を出す人々の役を指示に従い配置に着いて頑張っていた。

板の間でじっと座っていた木村さん、屋敷の前を通る行人の田村さん、鍛冶屋の格好で

金槌を振っている寺岡ちゃん。他の役どころのエキストラもOKが出るまで真剣に撮影

に

参加していた。寒い日だったので、私は焚火の番をしながら一部始終を見ていただけ、松竹撮影所の屋外セットでの撮影は終わった。

A Dさんが「彦根でもう一シーン撮るんですが、行く人、遅くなっても構わない人」皆に聞いた。その時も私は目立たない様に後ろの方で身を隠すようにうなだれていた。

三人が選ばれ参加した。選ばれた人は満足気だった。「良かったなあ〜頑張つて来いよ」と、しらじらしい声を掛ける。この日は、自分でも嫌になる、もう一人の白けた自分が居た。貸衣装を返しに東京から来た着付師が居るプレハブに戻ると、衣裳を脱いだエキストラが脱いだまま返し、私服に着替えたら「お疲れさあ〜ん」と言つて、そそくさと立ち去る。

脱いだ物を丁寧に折りたたんでいる着付け師さんの傍で、衣裳のたたみ方は知らないが、浴衣をたたむ要領でたたんでいると「こんな時に人柄が出るんだな」と、笑顔を見せた。「ホサレでした」と言うと、やっぱりといった表情で、「お疲れさんでした」言ってくれた。私も「お疲れさまでした。お世話になりました」と大きな声で挨拶をして部屋を出た。

帰りは寺岡ちゃんと一緒に「篠田監督どうやった」と聞くと、エキストラ一人一人に、「やさしく演技を付けてくれた」と言つて、満足した顔で嬉しそうに笑つた。

梟の城の撮影は始まったばかり、又、いずれエキストラの仕事が来るだろう。その時は

張り切って頑張ろうと思いを馳せ帰路に着く。

十二月十八日、山陽電鉄東二見駅構内でスチール撮り。午後からずっと駅構内に止まったままの電車に缶詰、夕暮れを待っての撮影だった。くだらないほど長い時間が掛かった。

『映画 絆（きずな）のロケ現場』（主演役所浩司）

その日は午後からJR米原駅西改札口集合に間に合うよう大阪駅へ向かった。

新快速特急長浜行きに乗り換えだ、いつものことだが電車はどうも苦手で不安で性がない、事務所にアクセスを問い合わせ駅員にも聞いて確かめる念の入れようだ。

一人心細くホームを歩く、ふッと目が合った二期生の岡本秀樹さんだ、「おうおはよう」「おはようさん」こんな人混みの中で出くわすとは、ただの偶然を大袈裟にも運命的なものに感じ嬉しかった。旅の道連れが出来てお互いに心強いと、安堵した。

「初めて行く所だから早めに出て来たんや」京都、大津に停まって次の停車駅が米原だ。岡本さんとは大阪ドームで、ご一緒したが、その時は顔を合わせた程度だった。

その後、レッスンに行き、NACのエレベーター前の待合所で合うと話す様になっていた。

二期先輩だが、同僚の仲だと私は思っている。同じ世界で同じ夢を求めているライバルか

知れない、現状はともじやないが…、ライブルというようなことでもない。

このロケの二ヶ月程後に、岡本さんが象印の電子ジャーのCMに出ているのを偶然見た！。

「岡本さん、ヤツタなあ〜よかつたあ〜」と、コマージュを見ながら私は喜んでた。

何日か過ぎ、NACのエレベーター前で岡本さんの話が出て、亡くなったことを聞いた。

話によると、出れた喜びも束の間、CMが流れた翌日、心臓発作で他界していたのだ。

彼は一日にたばこを二箱も吸うヘビースモーカーだった。

現場で喫煙場所を見つけると、嬉ウマそうに吸っていた岡本さんの顔を思い出す…。

「役所広司が出る、絆（きずな）の撮影と聞いたけど、シャルウィダンスに、うなぎ、と続いて役所広司、凄いな」

「当たってるな」

「売れてる時が、花やで」

「ほんま」

「今日撮影現場に来るんかな」

「けへんやろ、まさかこんな処へ」

「ほんまやなあ」

「今日は、乗客の役らしいな夫婦で」

「ええ」

「相手は山田さん、名前も聞いてる」

「へえ、そうか」

撮影内容は詳しく聞いてはいないが、世森さんの相手は、おしとやかで綺麗な方ですよ、粗相の無いようにと言われていた。

話が弾んで退屈もせず、米原にあつという間に着いた。まだ他の人は来ていない、待合所の長椅子に腰を下ろした。

次の電車で女性三人が到着、私は「NACの方ですか」何となくそうだろうと思った。「そうです」集場所に着いて、直ぐ同類達に会うと安心する。電車が着く度に続々と集まってくる。これから夫婦役を演じる相方の山田さんと言う女性と挨拶を交わした。

「宜しく願います」「こちらこそ」「んー」事務所の前振りとは少し違った。

女性の言う綺麗な人は…、ホントいつも当てにならない。期待してた訳じゃないが、暫くはみんなと談笑しながら待った。

改札口に切符売場、きよすく、米原駅は意外と小じんまりしている駅舎である。

それに比べ駅前広場（ロータリー）は照明がぎょうさん光り輝き大都会の様相だ。

狭い待合から外に出ると、空は薄暗く、照明灯とネオンの明かりが煌々と光っていた。バスターミナル、タクシー乗り場、一般車の進入路、道路は区画整備されている。

真つ正面に広い道が一本通っている。道路沿いの歩道も幅が広く余裕がある。

ロケバスだ。スタッフが撮影機材を車から降ろしている。「お早うございます」「…？」

さり気なく挨拶をする。小腹が減ってきた。私は近くのスーパーマーケットに入り、カロリーメイトのビスケットを二種類買って駅に戻った。

「今回の交通費は出るんやて」

「ええ？」「引き受けるときちやんと聞いたもん」と、私が言うと、「出るの」

「うん、領収書を忘れずに貰って来るように言われた」ポケットから往復分の領収書を出して見せた。「ほら」「どうしよう」「切符売場の駅員に頼んでみたら」

駅員は、みんなに大阪駅から米原までの領収書を書いてくれた。

長い長い間またされて、ようやく製作側のスタッフの一人がやって来た。

「大阪駅までの各駅に乗って頂きます、切符を渡しますからコチラに集まってください」帰りの片道切符の料金は向こうが持つてくれた。

着いてくるように促され改札口を出て、大阪方面のホームの端までぞろぞろ着いて行く。

駅に着いてから一時間はゆうに過ぎている。

スタッフが一人一人撮影機材を持って階段を降りてくる。

後ろから真つ赤なベンチコートを来た男が現れた。

ディレクターAD、演出家の何人かが付き添ってやって来た。

線路向きに立ったまま待っている私達の後ろを、避けるように何やら話ながら通り過ぎる。

「あれ役所広司とちがうか？」役所広司だとは直ぐに解ったが、誰一人としてお決まりの

「お早う御座います」の声をかけられなかった。

「おつ、役所広司や！」ようやく気付いた人達も振り向いて見ただけである。

「我々の様なエキストラが居るからこそ映画の製作も成り立つんじゃないか、今日の撮影

でエキストラを、呼んである事ぐらいは知ってるやろ、ちゃんと挨拶を交わせよ」と、

言いたかった。駅のホームの震えるほど寒い処で、いつまでも待たされて苛立っていた。

「これから映画を作るために、一緒に仕事をする仲間やないか」

エキストラ二十人、スタッフ十人、カメラマン、AD、ディレクター、演出家、役所広司、

三カ所に別れて、撮影用に連結する車両が入ってくるのを待つ。

ロケ先で、まだ駆け出しの俳優は、しおらしさがまだ残っているから、現場で会う人毎に

挨拶を交わすが、売れてきて有名になると偉そうにしている。

NHKでもそんな奴（芸能人）が居たのを思い出した。そんな奴に限って極周り（上）の人にだけはぺこぺこしているのだ。離れたところからしか見てないが、喋っている顔が、にやにやと愛想笑いをして媚びている様に見えた。

その笑顔で私達に「お早う」と、言えばいい男なのになあ。なんて、独り言ちっていた。世の中の仕組みはそう出来てる。「勝てば官軍、負ければ二軍」なんてねっ、悪い冗談癖が出てしようもないことを言ってしまった。「アーア」やっつと電車がゆつくりと入ってきた。連結された二両を使って撮影が始まった。

私を含めて八人が呼ばれて前の車両に乗る。残りのエキストラ全員が後の車両に乗った。指示された席に腰かけて撮影のセッティングをしているスタッフの働きを見ていた。

それぞれの持ち場、役割を緊迫した雰囲気の中で実に手際が良い、プロ集団が製作に携わっていると言える。その間、役所は昇降口ドアの横にある手すりを握り、うなだれて俯いたままじっとしている。照明係は網棚に上がりうつ伏せになりライトを構えている。カメラは入口に近い通路にセット、その後ろにモニター・テレビ、ディレクターと残りのスタッフがひしめいている。音声さんは入口の座席の後ろでしゃがんでいる。

私は通路側の席で窓側はNACの浅野さん、お名前が山田さんではなかった。私の前には、新人の女優さんがスタンバって臨月に近い妊婦の格好をしている。その隣がNACの男

性、

通路を挟んで隣に二組の夫婦が配置され、もう一人は吊革を握って立っている乗客役だ。二両目では乗客に扮した残りのエキストラが配置された。ほとんど、足しか映らない。さあ、全ての用意が整った。スタンバイOK。撮影の準備が整った。

その間、一言も喋らず、役所は俯いたまま、その場から身動き一つしなかった。彼はリハーサル前から演技に集中していた様子だ。

それを見て彼の役者魂に感心し、さっきの事は忘れた。「リハーサル開始」

「一寸待った」照明にクレーム、照らす範囲を絞るらしい、電球に直径5cm程の穴があいた黒くてごわごわした熱に耐えるボール紙のような物をあてがった。

私達は乗客、座っているだけ、いつの間にか電車はホームを出て走り出していた。

映画「絆」の列車の中の撮影。ディレクターが台本を持って二人にシーンの説明をする。一回目のリハーサル。

監督の「ハイ」、の合図で、妊婦役の若手女優さん、席を立ちながら、役所さんを見て、

◎ 妊婦、怪訝そうに「どうかしたんですか」

◎ 役所、振り向く、「…」

◎ 妊婦、手で促す「座ってください」

◎ 役所、頭を下げ「大丈夫です」

◎ 妊婦、「立っている方が楽なんです」

◎ 役所、虚ろな眼で「次の駅で降りますから…」ドアが開き、よろけるようにホームへ。

『たったこれだけのシーンの撮影なのだが・・・』

リハーサルが、指折り数えて六回だ、このシーン全てを覚えてしまった。

座っているだけで、暇だったから当たり前か、だからといって私は、何もしていなかった

訳じゃない、これでもD級芸能人の端くれだあい、演じましたよ、ソレナリニ…ねっ、

車窓の外に目をやる、何が起きたのか？驚いた顔で妊婦と、役所の方をどうしたのだろうか？

この人はといった不審な目で見る。夫婦で電車に乗っている乗客の役を自分なりに考えて、目と顔の表情だけで演じていたんです。

「笑うなよ」私達には何も言ってくれない、指示は無し。み・て・る・だ・け、

「あっ、思い出しました」浅野さんに「もっと左へ」窓際に寄るように指示があった。

リハーサルのやり直し、チェックするのは監督というプロの厳しい、目と耳だから完璧を

求めるが故に何度でもやり直す。

解らなくもないが、映画を観ても気づかないであろうぐらい、差し障りの無いことだ。

「座ってください」このセリフで「ください」がアクセントの違いで、命令に聞こえたり、頼んでいるように聞こえたり、催促しているように聞こえたり、色々と変化する。

氣遣って「座りませんか」そんなニュアンスの言い方をことをダイレクターが教える。

妊婦役の彼女は私の前で、その短いセリフを小声で繰り返し何度も練習していた。

なんとかその雰囲気「ください」が言えた。

ところが「楽なんです」ラとク、ラの発声にアクセントをつけて高く言ってしまった。

監督のダメ出し「ド田舎に走っている列車の中ですよ、そんな氣取った言い方しないで、もっと普通に、楽なんですよと、言ってください」キツい、ダメ出し。

「エッハイ」女優はとまどいながらも返事をして、暫くイメージをつかもうと薄目をして、らくなんですよ、ラクなんですよと何度も口を動かす。

ラとクは同じ高さでラクなんです。なんですのナを強目で言う。(そう簡単には言えないよ)緊張するのは、プレッシャーは掛かってくるのは、NG出したら皆に迷惑を掛けてしまう。

そんな状況の中で、銃弾で傷ついている役所さんに言うセリフ。

私はただ座って目の前の彼女の演技を見ているだけだった。

一生懸命やろうとしてる。背もたれにつかまる手の位置、立って背もたれに手を置き、

お腹に手をやる、動きまで不自然になり、事細かにチェックが入る「うわー大変」だあく演じることは日常の再現であると、習ったことを思い出す。考えているうちは駄目だ。

何か、ふっ切れた時に役に入り、お腹の大きい田舎の姉ちゃんに成れるのだ。「頑張れ」
「立っている方が、楽なんです」やっとりハーサルでの「OK」が出た。

メイクさんが妊婦のお腹の出具合を直したり、髪を直す。

二両目の連中は、カメラのフレームに入っている範囲で立つ位置を無線で指示を出す。そしていよいよ本番が開始された。

「はい本番」「本番」「本番」「4、3、2、1、スタート」カチンコが鳴った。
一瞬の間、電車の騒音も窓の外のこととも緊張の余り忘れていた。

一回目、妊婦が男を気にして振り向いて見ているところから、ホームにふらつと降りる処まで、通しで撮影した。「カット」モニターを見て、チェックに入った。

ホームに降りた役所さんが、直ぐに戻って来ない、慌てて戻るようにスタッフが叫んだ。
「戻って、早く早く」車内にどつと笑い声、慌てて乗ってきた役所さんもニヤツと笑い、

バツ悪そうにして居たが、お茶目な冗談だったのか？、現場の雰囲気が一瞬和らいだ。
もう一回の「本番」で「OK」が出た！。電車から降りるカットや声を収録して終わり。

各駅停車の車内で、リハーサル、本番、ワンカットを撮り終わるまで見る事が出来た。

「お疲れ様」そのまま、車内で解散（現場バレ）、そのままJR大阪駅に帰り着いた。みんなと別れて新三田行きホームへ、「絆か、どんな映画が出来るんだろう」と呟いた。どれだけ写っているのか、あのシーンがどれだけリアルに出来ているか観てみたい。封切りはいつかな？、明日は月曜日、手帳を見ると午前も午後もレッスンは入って無い、七時から例の歯医者さん連中だけだ。「ようし碁会所へ行つて遊ぶか」

『いつもぶつつけ本番のゴルフとNACの同期達』

INスタートでスリー連続バーディー、OUTでワンイーグル、だったのに結果は7オーバー出入りの激しい内容で大反省。ラウンドレッスンを無事に済ませたその足で、そのままNACスタジオのレッスンを受けに行った。

六時から八時までの夜の部、一日の仕事が終つてから、スタジオ入りする男性が多いため、久し振りに会う顔ぶれ、津田、清水、松倉、家辺、人羅、私はこの方々一人一人のことは余り知らない、全然知らないに等しい、自分のことは喋ろうとしない、入った時から私は友達のように人なつっこく、心を開いて話しているつもりだが、気さくに話せる奴は家辺と、午後の部で、よく一緒になる廣野ぐら이다。この二人は何でも喋る、他は自分のことはあまり口にしない、一線を引いて構えている。馴染めない、話はするが、あくま

で

社交辞令的な会話しかしない。それが大人なのかも知れない、と感じているのだが……。スタジオレッスンの方は久し振りに月形先生に習った。

七月九日 NAC スタジオ松尾監督のレッスンを受ける。

七月十六日 ニッセンのCMのオディションでハル企画へ行く。

七月二十二日 NHK やんちゃくれのロケで大阪天満宮にいつて境内で通行人役、

花桔京さんと主役の二人とすれ違うシーンを撮った。午前中で終わった。

七月三十日 北見先生、セリフの言い方、表現のレッスン。

八月六日 NAC スタジオ、荒井監督「明日はあの山」セリフの読み稽古。

八月十六日 森の宮プロフィールにNACの生徒達による。晴の舞台公演

「ロクタンロール自治会」を見に行く。面白くもなんとも内容の薄い脚本だった。

八月二十八日 二十九の両日公共広告機構のCM撮り。電車内の吊り広告スチール撮り。
同月三十日 日本盛りのCM撮り、私は写っていない。

九月五日 研なおこ、別所、羽田みちこが出た。「京都出雲殺人事件」のロケに行った。

214 京都の三軒坂で通行人。南禅寺の奥で記者。神光院でお葬式の参列者、一日で三役。

バレたのが二十二時。映像京都林組の撮影隊は柄が悪く最悪の連中だ。

人に対する言葉使いに、エキストラへの思いやりのかけらも無い、チンピラだ。

橋爪功さん主演「新赤かぶ刑事」第七話の撮影に、松竹から亀岡のロケ現場へ行った。その日は、亀岡の奥「馬酔木の郷」（あせびのさと）までロケバスに乗って向かった。

「松竹から遠かったなあ、そして暑かったなあ」一日中警察官の制服を着たまま辛かった。尊敬と憧れでリスペクトしている橋爪さんは流石だ、側で見ても演じているとは思えない。赤かぶ刑事と言う刑事本人が、自然そのままに撮影現場にいたといった感じだ。

橋爪さんがNGを出してみんなを笑わせたエピソード。

「本番、五秒前、四、三、二、はい」橋爪さん、つい先程、撮ったカットのセリフと同じセリフを言い出す。相手役は「それは前のセリフ」とダメ出し、橋爪さん頭を抱えて笑う。周りのスタッフもエキストラたちも笑って、一瞬現場が和んだ、計算なのかな？、一瞬！部屋の中の暑さも忘れた。殺人現場で警察官の役。撮影は夜迄かかり八時半アップ。私がロケでチョットだけ運転した。パトカーで大宮まで送って貰って帰途に着く。

客の格好で座っているだけのつまらない撮影現場になった。

ホステスのお姉さま方は、言われるまで判らなかつたが、鳳プロからの派遣エキストラで、NHKでメイクしてもらい衣装を着させてもらって、お弁当が出て三千五百円もらえるんだってさあ、全員がモノホンのおみずかと思っちゃった。その他大勢ではつまらん…。

声優か？声だけのオーディションを初体験した。

九月二十四日、茨木先生のレッスン終了後、声のオーディションでサウンドフォーラムへ行った。CM公認会計士「日本チャチャチャ日本チャチャチャ」FM放送のラジオ番組のような狭いブースの中で、隣の部屋からの指示（キュー）に従いセリフを言う。

「ニッポンチャチャチャニッポンチャチャチャ」この言葉をシチュエーションを変えて、スリーパターン、言わされて終わり。少しだけ声優の経験をさせてもらった。

十月二日、さんまのイメージ大検証、撮影現場がえらい遠かった。梅田駅から御堂筋線、難波で泉北高速鉄道の準急、南海和泉中央行きに乗り換え梅美木田（とがみきた）駅改札出て直ぐのUCCカフェプラザの前で、十八時三十分集合。サラリーマンのスーツ姿で

参加。東京、名古屋、大阪の各喫茶店の雰囲気、客の違いを面白可笑しく収録し、番組

で

検証しながらトークをする趣旨の内容の番組。後で知ったが、この企画はボツになった。出演者二十人はるばる遠くまで出向いて撮ったのに残念だった。

その収録現場の内容はこうだ……！。

やらせでわざとらしく大阪のオバハンが大声で喋らされた。

打合せ通り大声で大阪弁でまくし立てる。

そんなこと、喫茶店で大声出すなんて、なんぼ大阪の喫茶店でも平常ではありえへん。

大阪人の乗りとテンションの高さが欲しいのは解るが不自然なことである。

店内のざわついた音の大きさを何ホーン出たとか言って計測している。

スタッフは喜んでいたが、大木ひびき・こだまの漫才師のネタの言いぐさじゃないけれど「そんな奴は、おらんへんでエ」現場でもそんな声が囁かれていた。よってボツは当然だ。

十月のある日から突然。パステル画を描き出した。それも初めて手にした画材である。

チョークでもないクレヨンでもない、わずか2センチの短さ一本百二十円、

使用上の注意書き、口や目に入れないこと。使用事は保護マスクを着用のこと、使用後は手を洗うこと。子供の手の届かない所に保管すること、小さな文字の注意書きがある。

原材料を読んでみると、ジスアゾ顔料、モノアゾ顔料、アントラキノン型顔料、塩素化銅フタロシアニン顔料、酸化チタン、天然土、酸化鉄、ピラゾロン顔料、アルミ酸コバルト、キナクリドン顔料、チオインジゴ顔料、と主顔料も色々、顔料と明記してあるのに吸うと人体に悪影響を及ぼすらしい……。？解せない。

画用紙はキャンソソミータント、表面がざらざらした紙、通称はキャンソソ紙
第一作目は満月を背にし、木の枝に止まってこちらを見ている全身青色のフクロウだ。
パステル画を描くことがマイブームになった。

時間さえあればパステルを指で画用紙にこすりつけていた。昼夜問わず朝から夜中まで、さすがに遠慮して、お客が居る間だけは描けなかった。

『新第三の極道』（中条きよしの撮影現場）「ヤクザの密会シーン」

「新第三の極道」Vシネマ撮影に出演。京都撮影所、下鴨泉川亭で撮影。

中条きよしの相手役がセリフをかんでNGをだしてしまう。やり直しは上手く言ったのに中条きよしさんが相手が間違わないかと、気を取られて自分のセリフをど忘れして失笑しNG連鎖で大笑いしていた。やくざ役のエキストラはただ並んで座っているだけだった。

下鴨泉川亭は部屋から見下ろすほど下にある深い庭園が素晴らしかった。

『Vシネマの撮影現場』

伏見桃山城の広場から石段を上ったところで、初めてピストルを撃つシーンをやった。夜の撮影で寺岡ちゃんと私がピストルを撃つ悪役に出演。二人とも上手く

演じ切れなかったので、もう一回本番をしたかったなと悔やんだ。

やる方もやられる方も難しいもみや、悪役で殺られるのは見ている以上に難しいものだ。

キヤッスルランドで迷彩服を着たエキストラとヤクザの格好をしたエキストラと撃ち合う

シーン、この時は出番なし一日中振り回され帰り電車に間に合うかどうかどうか心配だった。

アップが十時半、途中まで送って貰い、最寄り駅まで早足で歩いてどうにかこうにか、

丹波駅十一時十七分に乗り、東西線京橋駅から十一時五十五分発新三田行きに間に合った。

十一月二日、NACスタジオで図書券カードのテレビコマーシャルのオーディション、カメラの前で自己紹介とPR売り込みをしてから、男性三人一組で演じた。

◎ 本を読め読め子供達：（なんで）

◎ ロクな大人にならへんで。女性二人

◎ 大人になったら遊びましょ：（いややわ）カッコの中は後で子供の声を入れる。

男性十人女性十二人がオーディション受けていた。私は落ちた。

十一月九日、アース製菓のゴキブルCMオーディション三人ずつ呼ばれてオーディションルームへと行って狭い部屋だ、そこで各自自己アピールの後、絵コンテを手渡される。設定は色っぽくてデカパイのOLに、部長役で抱き着く、その時のセリフが「吉田クーン」動きは胸元目がけて突進し抱きすが。OL役はADの女性が嫌だと言うので、代わりをガツチリとした体格の男性ADがOL役をすることになった。エロっぽくも何ともない。私の番が来た。用意していた黒ぶちのメガネを掛け、代役のADの胸元に「吉田クーン」抱きついた。勢いよく当たった弾みでメガネが壊れて落ちた。オーディションも落ちた。イヤラシク演技が出来なかった。おシャレ用の伊達メガネを一個、損しちゃった。

実にくだらないオーディション、アース製菓のオーディション（くだらなすぎてボツ）アリアースのCMに採用する女性のオーディションも同時に行われた。隣の部屋から聞こえてくるCMソング、シモネタでくだらない内容だ。

オーディションを受け終わった女子は落ち込んだ顔をして出てくる…!?

CMソングの歌詞の内容はこうだ。（隣で、繰り返し、聞いているうちに覚えちゃった）巢穴の奥に突いて突いて、奥の奥まで突いて突いて、突いて下さい最後までアリアース。CMの内容で時々思うが、ボキヤブラリーが、貧しい、乏しい、下品だ、くだらない、

だからボツになるケースが多い。

CMのコンセプトをもう一度ちゃんと考え直して欲しい。

奇抜なアイデアばかり目に付く「何とかせいでいいよ」と言いたい。

何度も見ているCMなのに、あれ何やった？、メーカーは？、なんてことになる。

「でも出てみたいなあ、何と言ってもCMはギャラがいい、おいしい仕事や！」

十一月十五日。京都松竹撮影所NHKの「活動写真の女」大正時代の撮影現場の再現。女優の森口さん、橋幸夫の息子さん、その他が出演、松竹の屋内第二スタジオで撮影、私の役は証明係りの一人、大きなライトの側で撮影シーンを見ているだけである。

撮影に入る前に衣装に着替えなければならなかったが、そこでこんな事が…。

松竹に書いて衣装室に行った時NHKの衣装係り、例の大柄な岡ちゃんが来て居た。

岡ちゃんが、当時の撮影現場のニッカポッカの衣装を選んでエキストラに渡していた。

「お早う御座いますヨロシクお願いします」と、わざとらしい丁寧な挨拶をする。

私の衣装、下はあったが適当な上が無い、いかにも古そうなジャンパーを選んだ岡ちゃん

「どうせ写らへんのやから、これでええか」「そうだよねえ」と愛想笑いを返した。

悔しかつたけど、エキストラはこの世界では人格まで低く扱われる。

それだけ、エキストラはつぶしの効かないヘンな奴が多いという事なのかもしれないとその時ふと思つたが、このような扱いは毎度のことだから、作り笑いで諦めるしかない。撮影は案の定あの岡が言つた通り、カメラのフレームに入ったのは足もとだけだった。

十一月十九日、荒井監督「明日はあの山」舞台劇の立ち稽古のレッスンを受ける。スタジオレッスンは面白いし楽しいんだけど…。

観客の居る本舞台を踏む訳じゃないから気楽にやっているが、とてもじゃないがどの役になつても演じる自信がない、頭では解つていても、実際はイメージの半分も表現できない。

「演技が本当に下手くそや」、演者として、心の内なるものから自然に出るセリフ、既存の役者さんのどの人にも、かなわない、自分のキャラがそのまま受け入れられる役どころにでもハマればいいけど、例えばオッチョコチョイで、あんぼんたんで、ええかつこしいで、下手クソな演技が面白いとか、あるいはセリフのド忘れ、とちったりするから受ける。自由にアドリブが言えたりしたら面白いと思う。

演出家の思い込みで、変なこだわりとお決まりの演出がなしなら…、自然なキャラが出て、世森友らしさが出るかも…。

十一月二十四日「首領への道」松竹撮影所

京都市内のとあるマンションのテナント部屋を借りて、ヤクザの組事務所をセットして、乱闘シーンの撮影、エキストラ担当ADの「井上」生意気そうな奴で苦手なタイプだ。

「おっちゃんいらんわ」と言われる。

もう一人のADの「千葉ちゃん」は優しそうでいい人、相性が合いそうだ。私に氣遣って、「どうなっているの」と聞きに来てくれた。

「このシーンにはおっちゃんいらんって言われた」「…すみません」

「いやいや、気い使わないで下さい、事務所の指示で来てるだけですから」
隣の空き部屋で一人干された私は撮影が終わるまで待つて居た。「トホホホ」
待つのも仕事のうち、ギャラはおんなじ…!？。

十一月二十六日、NHK朝の連続ドラマ「やんちゃくれ」でマスターの役、

その日はいつもと違った。長い間、待たされるのは当たり前なのに、メイク室前に待つているとADさんがすぐに来た。「衣装に着替えてスタジオに入って下さい」と指示。

ロッカーを借りて衣装さんの所へ、紺地のカラーシャツに深紅のベスト、バーテンダーの格好、NHKの朝の連続ドラマ「やんちゃくれ」で、スナックのマスターの役だ。

私は前もって所属事務所のチーフマネージャーにスナックのマスターの経験が

あります。マスター役の仕事があつたらお願いしますと売り込んであつた。

今回の抜てきはそのお蔭か……。龍登さんと二人地下のスタジオに向かつた。

中に入るとテレビで見ていた餃子屋があり隣にスナック、入り口付近に観葉植物を置き、店が並んでいるようなちやっちいセットがあつた。

私が毎朝の楽しみで見ているドラマのセットを見て、ここで撮つた映像が茶の間に届くのかと思うと、けっさくで笑つてしまう。騙されたような気分になつた。

原田大造さんの社長室の裏はベニヤ張りで、傍らにセットされたままだつた。

スタッフは相変わらず大勢居る。カメラも照明も用意されていた。スナックのドアの前で監督が、マスターと客とのトラブルをアドリブでちよつとやつてみて、言い終わるや否や、

「はい、テスト」ほとんど具体的なネタ合わせも何にもなしで始まつた。

「ヤッター、おいしい仕事が来た」先輩の「龍登さん」と二人で演じることになつた。

「全国放送やで、CMより長い時間写るんやで、凄いことやで、気合が入るなあ」
一分三十秒ぐらいの二人の掛け合い、アドリブの口喧嘩である。

客に扮した龍登さんが「お前のとこ、高いやないか」

私「先月のつけまだ残つてるやないか」訳も解らず口喧嘩を始めた。

しばらくやりとりを続けていると「はい」監督が近づいてきてダメ出し、「だいたい、二千円位のツケで、つまみのことにも文句を言ってみたら」と、喧嘩の内容と盛り上がりを要求して来た。

カメラ五台、前後左右と上から、撮っていますからと、カメラの位置まで説明をした。「うんうん」阿吽の呼吸で頑張って面白く仕様と目と目で領いた。「今日は写るでえ」リハーサルなしでいきなり「本番」のキューが出た。

◎ 龍登「お前のとこ、高いやないか」

◎ 私「場所代、家賃が高いんや二千円ぐらい払えよ」

◎ 龍登「ボトル減ってるやないか、おかしいで」

◎ 私「あ・ん・たのボトル・で・す」

◎ 龍登「うすめとんちがうか、味おかしいで」

◎ 私「そんなことするはずないやろ」

◎ 龍登「つきだしのピーナッツかて湿ってるやんか」

◎ 私「何をく先月のツケまだ残ったままや、払うてから言え、払うてから」

◎ 龍登「えらそうに言うな、なんやこれ赤いもん着て、てんとう虫か」

◎ 私「これはマスターのコスチュームや、なんやこのハゲ」(ハゲ頭を小突く)

◎ 龍登「何すんねん」（掴み掛かってくる）

◎ 私「貧乏人はこんなところるな、屋台で飲んでたらいいんや」

◎ 龍登「偉そうに言いやがって、二度と来るかい」

監督「ハイOK」

何を言ったか全てを正確には覚えていないが、この様な内容を喋りまくった。

終わるとすぐに笑い声と拍手があった。モニターテレビの傍らから糊井マネージャーが、こちらを見ているのに気付き、会釈したら良かったよの、笑顔が返って来た。

こっちからも笑って頭を下げて返した。「やったあ」ワクワク気分がおさまらない。

モニターを見終わって「OKです、後で声だけ貰います」監督も満足気だった。

その後もセットで、レギュラー人が餃子屋でのワンシーンを犬も出てランスルーでの撮影。それを横で見ながら二人でアドリブ喧嘩のネタ合せ、声取りのリーハをしていた。

龍登さん、私がこう言うからこう返して、ネタを色々考え口喧嘩の段取りを練っていた。しかしそれは徒労に終わった。声取りはしなくて良い事になり、あっけなく終わった。

今度はもつと面白く上手くやろうと張り切っていた二人は一瞬愕然としたが、安堵もした。「お疲れさま」廊下を歩きながら「ヤッターアええ仕事やった」と喜びを噛み締めていた。

このシーンの、オンエアは百から百二回の間とマネージャーから教えてもらった。

うきうきワクワク気分でNHKを後にし、その足でNACのスタジオレッスンに向かった。松尾監督のレッスン「木船殺人事件」立ち読み稽古、京都弁のイントネーションは難しい、女性のセリフの時が面白くて笑ってしまう。「ほんまにレッスンはおもしろい」

真剣になって、慣れない京都弁で発声をするからなおさら滑稽だ。

「木船殺人事件」の台本の一部をコピーしてあるテキストを見ながらセリフの勉強だ。

芳枝「あのう、滝沢様ではご予約を頂戴してまへんのどすけど」

すみれ（東京弁で）「ここで落ち合う約束……」

芳枝「さあ、どうぞ。ここでどうぞすやろ、うちで一番いいお部屋どす」

すみれ（東京弁で）「いいわ、気に入った」

オバさんたちの京都弁のイントネーションにダメ出しが出れば出るほどギクシヤクする。

松尾監督はチェックを入れたり、その調子と言って乗せたり、笑いをこらえるのに一苦労、オバさんたちの個性のある「どすえ」の言い方に、笑いを堪えるのに必死で腹が痛くなる。

芳枝に成りきろうと一生懸命にやる生徒のオバさんに相づちを打ったり、面白くて楽しい。松尾監督の二時間のレッスンも終わりスタジオを出る。

『CM選考のオーディション』

南森町にあるアームズへ向かう、アサヒ生ビールのCMオーディションだ。

「今日は忙しいなあ、嬉しい悲鳴」CM内容は居酒屋に野球チームが居る、居酒屋のおやじが生ビールを出す。その時に台詞を言う。

私は自己PRの時に「本業は炉端焼で居酒屋のおっさんなら地でいけます」と、言った。オーディションルームに入り、説明を聞き、CMの絵コンテを見せて貰い順番を待つ、
「世森さん」「ハイ」決められたセリフで演技をする。

「ご機嫌さんやな（バットを振るマネ）勝ったんかいな、はい生ビール一丁」
「はい結構です」と審査側から愛想笑いが返ってくる。∴私は落ちた。

誰が受かったかも知らない。このCMは流れていない、またもやボツか？

『ミナミの帝王』（主演、竹内 力）

七時三十分東西線天満宮駅一番出口近畿銀行前に集合。ロケ現場が大阪の街中だった。なんてことはない、通い慣れたNECから五分足らずの場所がロケ現場だ。

見たことのある顔ぶれがぞろぞろとロケ現場に集まって来た。

ビル一階の事務所を借りての撮影だ。私は債権者の役で、雇われたやくざ風の二人に、七、八人の債権者役のエキストラが貸した金を返せとこぜり合うシーンを撮影する。監督の説明を受けて早速リハーサル。

債権者の一人「二百万返せ、ど、どうしてくれるんや」

やくざ「やかましいわい、とつとと返れ」

私とその他アドリブでその場の雰囲気を出す。

「金返せ貸したもん返えさんか」

やくざ「帰れ帰れ、痛い目に合いたいんか」(言い争いがあった)

例の黒塗のベンツから降りて、主役の竹内力さん登場、つかつかつと、債権者を割って、入って来て私の横で「ゼニカネはガクの問題と違うんじや」と台詞を言う。

リハーサル後、ガク、額、がく、がく、がくの問題と違うんじや?。しきりにアクセント、イントネーションの違いをチェックしている。「ガクは絵の額ですな」と、私は言った。

「ガクの問題と違うんじや、これで大阪弁完璧やな」と言ってスタンバイの位置に戻った。リハー一回で次は本番だ街頭でのロケは車が通るは通行人が来るは大変だ。

スタッフがロケ現場の四方に立って見張り、通行人に頭を下げ向かい側を通ってもらう。車は信号が赤になった時にトランシーバーで知らせる。

本番中に通ろうとする運転手に、スミマセンと説明しても「俺も仕事や」と怒り出す。

やむなく通すと、こんどは監督が「止めんかあい」と、怒鳴る。タイムリングを見計らって「本番」竹内力さんが、つかつかつと来て「銭金は額の問題と違うんじゃ」「ハイOK」次のシーンは店舗内に残っている事務機器類をトラックの荷台まで運び出そうとしているのを阻止し奪い返そうともみ合うシーン、私もその小競合いに加わることになった。

このシーンは先に撮ったカットの続きになっているとはずと判断し立ち位置を確認した。「先のシーンで、あそこに立って居たので、スタートであそこからこっちに、回った方がいいですよね」とADさんに問うと、カメラの後ろに構えていた監督の耳に、それが聞こえたらしい。「エキストラに言われてお前何してんねんちゃんとせい」と監督が怒鳴った。

例のつつけんどで生意気なADが怒られた。ほら見る私が正しかった。「ザマーみる」言い返す言葉など無い、しょぼくれた顔で、ちよこつと顎で会釈をして、「はい」

少し勝ち誇ったようないい気持ちに一瞬なったが出しやばったことをしたかな？、

この世界は上下関係が厳しいから、可哀相なことをしたかなと反省の思いが過ぎった。

「ハイ、テスト」立つ位置を確認してスタンバイ「ヨーイスタート」

パソコンのキーボードを運び出そうとしている。

そこえ慌てて行き、「何してんね」「どこ持っていくや」と奪い合う。

「ハイ、カット」リハーサルはうまくいったようだ。本番も一発で「OK」。

この後のシーンは債権者が店内にアドリブを言いながらなだれ込む、

「金目の物はないか、何か残ってへんか」店内を荒捜ししているシーンを撮って終わり。たったこれだけでも半日掛かりだ。正午アップ弁当なし、撮影予算が少ないのだろう。朝から四時間もの間、何だかんだと緊張するが、この爽快感はいい何やる…!?!。ロケ現場の緊張と緩和「ハマルで、クセになるでえ」エキストラ一遍やって見ない?!。竹内力は、若手に演技指導をしたり、終始リラックスしていて気さくな大分県人だった。

十二月二十一日、関テレ8チャン「仰天めんたまりあ」新春特別番組に出演!。

西川きよしさん司会のトーク番組の正月三日オンエアの特番の収録に行く。

私は小林隼侍さんの代役をさせられる。隼侍さんは好きな俳優の一人で嬉しかったが…。会議室に出演者が集まり、ADの「奥出さん」から台本のプリントを渡された。

VTRの中では主演である。嬉しいと思っただのも束の間中身を知って私が仰天し!、偉い目に合うことになった。小林隼侍さんの面倒くさがりや振りをオーバーに再現する。小林隼侍さんの素行を代役で演じさせられたのである。例えばこんなシーンの撮影だ。

メイク室で、鏡の前で台本を読んでいる。いらいらしてきて手足が小刻みに震えだす。

A D役が来て「もうそろそろです。宜しくお願いします」と挨拶をしに来た時。

気に入らないセリフがあると、「邪魔くさいんじや」と、台本をカウンターに叩き付ける。次の撮影は堺の白木邸に移動しその近所の路上でロケ。出掛けようとして家を出たとたん、井戸端会議のオバハンから声を掛けられる「大変ですね。ドラマそれとも時代劇？」

「は、ああ、ちよつと仕事で……」（無愛想に立ち去る）で「カット」。

次に、歩いていると近所のオッサンにつかまる（ゴルフの手つきで）

「検侍さん、どちらにお出掛けですか？またゴルフ？」

「は、はあ……」（答えるのが邪魔くさい）で「カット」。

電柱の側で立ち話をしているオバハン達に見つかって、

「あら、検侍さんどちらにお出掛けですか？」

「聞くなー」（怒鳴り）帽子を地面に叩き付け「カット」。

白木邸の風呂場で、気持ち良さそうに湯船につかる。お湯がザーとあふれ「カット」。

体を洗う首から腕、胸を洗い下半身にいきかけ、へそのあたりで手が止まって、突然、タオルを壁に投げつけて、「邪魔くさいんじやー！」と怒鳴り、「カット」。

顔に小林さんのお面を付けて。カメラ、パンアップして、肩と胸を動かし「ハアハア」と、イライラしている「カット」。小林さんの邪魔くさがりのエピソードの収録が終わった。

全裸にさせられるわ、湯はぬるくなるわ、「ああ〜写ってるよ」と言われるわ、女性ADに、「今 来たらアカンよう」て、カメラマンが言うてるわ、恥ずかしいばかりだった。

この日の再現VTRで映っているのは口元から下だけで、顔は一度も写っていないのだ。現場に行つて突然！何を言われても断れないのがこの仕事です（悔しい）けど頑張った。

同じ日に、月亭八方さんのエピソードの代役で北野さん。初代ウルトラマンの隊長役で、出演していた黒部進さんの代役を上野山さんが演じた。黒部進さんの代役の上野山さんは前バリというモノを初めて経験しハダカ踊りをやらされた。

「会社に見られたらどうしよう。まづいなあ」と、ボヤいていた。

月亭八方さんの代役の北野さんは、八方さん浮気発覚でお尻を出して奥さん役に叩かれた。二十時近く、八方役の北野さん、寿司屋で愛人と一緒のところへ、奥さんが入つて来てバツタリ会う…。人の通る歩道でお尻を出して叩かれ、「カット」。三人とも裸になった。

「お疲れさま」となり私はバレタ（帰れた）ギャラの支給は三カ月後と決まっている。

この日のギャラは特別報酬かと期待したが、関テレから八千円、事務所費二割カット、源泉所得税一割。引いて手取りは五千七百六十円。「バカにすな〜い」（ガックシ）

十二月二十三日、NAC関係者による恒例のクリスマスパーティーに初参加した。ホテル阪急六階「瑞鳥」にて開催。いろいろあつてそれなりに楽しかった。

パステル画がマイブームになった。パステル画の方は題材があれば片っ端から書いた。マイブームとなつて時間があれば絵に没頭している。中学生までは凶工時間があつたので、その時に絵を書いたが、高校は工業高校機械課卒で一度だけ文化祭に出すのに書いたが、しようもない下手な絵だった。それつきり三十四年間一度も絵筆を持つた事は無かつた。どうして今こんなに夢中に成れるのか自分でも分からないが書くのが嬉しい。楽しい。満月（望月）と梟（フクロウ）の絵を六枚書いた。梟は副録を授ける神である。

中国では、フクロウは「悪魔」を払いのける鳥としてみなされている。古代ギリシャのアテネでは「知恵の神」として守護神にしていた。

「学芸」「啓示」「発明」「明晰」「知恵」「哲学」といったシンボリックな見方で多くの西洋人に尊敬の念を込めていた。日本でも室町時代「点眼力」「神通力」アイヌでは「森の神様」である。「不思議な魅力を秘めている鳥」私はパステルの青色で書く梟にはまっている。

一月七日「朝靄のゴルフ場」を青系と白で青トーンの絵を書き上げた。

一月十一日、福島製粉のCMオーディション、十七時よりNACスタジオにて行われた。カップラーメンを鼓（つづみ）のように左手で持つて、録音テープの「ポンポンポン」の音に合わせて叩き右手を頭上にかざしてにつこり笑う。「世森さん良いですね、いいですよ」NACのスタジオを出て、家に帰る途中の稲名寺駅を出た所で携帯電話に連絡が入った。「世森さん、受かりましたよ」「ヤッター~~~~」150%オーバーにやって大成功！。

一月十三日、松竹「首領への道」七作目、

親分役の入川保則さんに後ろから首根っこをどつかれふっ飛ぶシーンに出る。

ランスルーで撮る長いカットでセリフを囁んでNGが続出した。入川保則に演技とは思えないどつかれ方をされてムチウチのようになり、そのことをずっと根に持っていた。

2011年2月、入川保則さんは直腸ガンが全身に転移していて余命半年と宣告されたが、一切の手術や延命治療を拒否し、限られた余命を自然のままに終える道を選んだ。

同年五月、『ビター・コーヒーライフ』の撮影に入ることを宣言し、「怖がっても死ぬんだから怖がらない方がいい。最後まで撮り続ける」と言葉を残しす。自らの遺言をまとめた『その時は、笑ってさよなら 俳優・入川保則 余命半年の生き方』と『自主葬のすすめ』と題する著書を出版した。余命宣告から十ヶ月後の七十二歳没であったことを後に知る。

私の出番がないカットで、白竜さんが拳銃の扱いが下手クソで、テイク5まで、もたついている不器用さを影で笑って見ていた。撃鉄をそつと戻せばOKなのに、何度もカチツと音を出してしまう。本人は笑ってごまかしスタッフも相手役も笑っていたが…、
「どんくさいやつちゃなあ」エキストラならボロクソに怒られていただろう。

一月二十一日、TVドラマ「金曜エンターテイメント」

午前九時に宇治駅にそこから徒歩で福祉会館へ、玄関前を歩く知り合いの弁護士の役で

(再現のVTRの裸踊りの上野山さん)と挨拶を交わしすれ違って「OK」終わり。

そこからきびすを返し歩いて宇治駅を通りすぎ宇治大橋へ、橋の下の河原で変死体が見つかったシーンを撮影して終わり。宇治大橋では出る幕は無し、またもやホサレた。

撮影の合間に食べた宇治の抹茶ソフトクリームが美味しいかった。十二時UP。

一月二十四日、松竹「京都祇園入婿事件簿」三田村邦彦主演のサスペンスドラマ。

高級クラブのお客役とマンションの管理人役の二役をやらされエキストラの使い回しだ。

移動中のバンの中は三田村邦彦と前田耕洋、女優の古柴香織さんと私の四人。車中で

三田村さんは今度のロケで石川県に行き、古柴さんは富山県に行つてロケをするらしい。

「近くのホテルを一緒に取ろうよ」と誘う。古柴さんは笑って聞き流している。私は「石川と富山は京都と神戸ほど距離がありますよ」と言った。話は芸能人同士の噂話しにもちつきりだった。週刊誌のネタになるような内容の話だった。十八時UP。

一月二十七日、日テレの再現VTR出演オーディション。

NACスタジオで書類審査で選ばれた五人だけのオーディションがあった。

部屋に入り、「短い話を聞き終わるやいなや、『どうも』『あつと』という間に終わった。何が何だか分からない。他の人も哑然顔……。その後、私に連絡なし、落ちた。

一月二十八日、福島製粉「金ちゃんラーメン」CM撮り。長くい一日、正座が辛かった。いよいよ！、テレビコマーションに出れるぞお。CM出演はおいしい仕事なんです。

七時過ぎにイマジカ玄関前に着く。暫くすると一人現れ又一人、もう一人が来て、NACの青年部が三人揃った。何度か会ったことがあり、見覚えのある顔だ。私だけがゴールドシニアのオツさんだ。私一人が選ばれたと思っていたのに、若手三人と一緒にちよつとがっかりした「お早う御座います」とお決まりの芸界の挨拶を交わす。

建物の中に入ってメイク室へ、小さな部屋に案内された。

部屋の中は手荷物と男性のメイクさんを入れ五人で狭く苦しい感じだ。一人づつへアーと顔の化粧をやってもらう。メイクさんにやってもらうなんて初めてだ。それがすんで衣装を着付ける。羽織袴に袴（かみしも）、これがまた大変で袴のぴんと張った肩のラインは細い竹で出来ている。「そこをぶつけると折れますから気を付けてくださいよ」の注意！。エレベーターに乗るとき、ドアを開けて部屋から出るとき、廊下で人とすれ違ふときなど、体を横にして一日中蟹歩きをしなければならなかった。そしてもつとも辛かったのは。

演技中はずっと正座をしたままの撮影だった。スタッフがお尻の下に毛布地でこしらえた高さ十センチ程の座布団代わりを用意してくれて随分足のしびれは逃れたが、それでも、若手はカットが終わる度に「イタタタタア」と言って、立つまでがしびれて大変だった。

「大丈夫ですか」笑ってスタッフは言う。もう一つ残念なのはCMの主役は美穂ちゃんという新人女優で、四人は後ろでおひなさまの五人ばやしのように座って居る脇役だった事。一日中正座をしたまま、「ポンポンポン」「ニッコリ」「ポンポンポン」「ニッコリ」「ワアッ」カップヌードルの底にあるバーコードを見せてるポーズ、底を叩いたり、指を差したり、その動きを一人づつアップで撮ったり、私が笑ってるアップを撮ったりした。

額をポンと叩いて手のひらを返して額の上にかざすして決める美穂ちゃんのアップ撮りにめちやくちや時間が掛かった。何度もやり直し、美穂ちゃんの額が赤くなってきた。

井上監督は楽しむかの様に指示を出していた。ダメ出しでも決して怒った顔は無かった。私と川井君はノリノリで終始笑っていた。下やんと西村君は顔がこわばっていたのだろう。井上監督「お笑い系の二人に負けるなよ」私「ニヒルやろ」と突っ込み返す。

その後一人づつのアップ撮りでぽんと叩いた拍子にポーンとカップが後ろに飛んだ。

私が首をすくめて笑うと井上監督がすかさず、「おいしいね、今の使えるかも」と笑う。

川井君「狙うとったんちゃうかあ」私「ちがうちがう真剣やでえ」全員が笑ってくれた。長くくしい一日に感じた。色々あったが無事CMの撮影は終わり。八時ジャストUP。

タレントとしての扱いを受けた仕事の気分は格別だ。こんな嬉しい気分は日常味わえない。幸せな満足感に満たされた。芸能人はマゾっ気とナルシストと自負心、ある種傲慢で自己堅持欲、自己主張の強い人が向いているかも……。もしかして私もそうなのかも知れない。とりあえず満足感一杯で帰路についた。わずか十数秒で終わるCMに十一時間を要した。「ギヤラがなんぼか楽しみだねえ」。明日から又頑張ろう。どんな明日が待っているやら？、この金ちゃんラーメンのCMを見た。録画もした。世森友の笑顔のドアップがあった。

その後、続いて奈良県のゴルフ場「ヤマトカントリークラブ」開場25周年のCMに出演。書類選考で選ばれたゴールドシニアの三人が出演するゴルフ場での撮影だった。

その一日は。早朝の五時過ぎに新伊丹駅を出て夕方の五時過ぎまで掛かったロケだった。エキストラじゃなくて、タレント扱いをしてもらえたので、気持ちが良い嬉しかった。監督も撮影スタッフも全員が言葉も丁寧で、とつても優しく大事に接してくれた。

パターで打ったり、手で転がしたり、こだわりの音を録音しようとして時間が掛かった。ゴルフボールがカップに入った瞬間の理想の音を録音したいのだが日が暮れかけて来た。もういいかと諦めたとき、誰が蹴ったのか？、カランコロン「それが欲しかったあ〜」

支配人が帰り際に、一度ゴルフをしに来て下さい、勿論ただでいいですよと言ってくれた。このコマースシャルだけはDVDビデオで残っている。たった十何秒のコマースシャルの中に、監督、スタッフ、クルー全員、主演者の仕事に対する情熱が注ぎ込まれているのだ！。

このコマースシャルの出演を期に、NACタレントセンターの仕事辞めることにした。サクセスストーリーとまでは成らなかったが、多くの人との出会いがあり、色んな体験が出来、日常では経験できないこと出来、充実した日々だったと思う。

明日からまたどんな人生が待っているのか？、これからの人生にも大いに役立つであろう。人生を謳歌するのも自分の気持ち次第！。「五十からの明日」と題して体験したD級の芸能タレントもこの後は現場に行く事は無かった。NAC大阪タレントセンターの所属は抹消されていけない「世森さん辞めることはないから、所属のままにしておきます」

『エピソード』 終章

長い年月をかけてエクストラの体験談を綴ってきましたが、内容としてはサプライズが起きるとか、サクセスストーリーとまでは行かなくて残念だったが、書き終わって読み返してみると、ぎょうさん撮影現場に行っていたなあ！と、我が事ながら驚く。

その後も、仕事のオフアールが来たがNGばかり出していたので最近は大ピタリ途絶えた。このような経験をした事で、日々健康であれば楽しみは味わえるものだと思つた。

約三年間の色んな経験は有意義だったと思つている…。人生の一つの川として残つた。現在も私の知っているNACのゴールドシニヤのおっちゃん、おばちゃんたちが頑張つてコマールシャルに出たり、エクストラで頑張っている。このような人達がいて制作現場は成り立っているのである。とにかく楽しめNACのゴールドシニヤ、頑張れエクストラ。

『五十からの明日』（サブタイトルエクストラ体験記）

おわり 著作…せもり友

